

女鑑

明治二十八年十月五日發行

第九十五號

東京國光社

女鑑第九拾五號

目録

女鑑
- この國とこの身……一

論説
- 常に天地に耻ざる心を持べき事……宮地 嚴夫……五
- 女子教育一班(四)……三輪田眞佐子……九
- 女性と文學……水木 青蹊……一二

史談
- 柴田勝家の夫人……鹽井ふく子……一六
- 高橋東岡の妻……山川 清素……二〇

家政
- 活花(第十六)……田邊和氣子……二三
- たちぬひ……西山たい子……二四
- たいごころ……二五
- 思ひいつろ儘……くりや女……二六

學園
- わか學園(四)……鹽井 正男……三一

漫録
- 賴宣卿母公養珠院夫人深慮の事……三六
- 龍造寺周家後室再嫁の事……三六
- 四民の文……故人 加賀の千代……三六
- をしへ草(一)……雨後の翠嶺……三八
- 商女の勸業……鹽井ふく子……四〇
- 高輪の月……二十二木生……四一
- 觀月宴……井上 賴文……四三
- 美術展覽會につきて……貫 堂 子……四三
- 笑ひぐさ(二)……柴 刈 翁……四五
- 九十九髮(三)……大町 桂月……四六
- 邯鄲夢の枕……中尾 蕉夢……四九

文林
- 歌……佐々木高行……五四
- 仝……前田 利嗣……五四
- 仝……津輕 承昭……五四
- 仝……水野 忠敬……五四
- 仝……前田 利昭……五四
- 仝……冷泉 爲柔……五四
- 仝……池田 政禮……五五
- 仝……長谷 信篤……五五
- 仝……植松 有經……五五
- 仝……宮地 嚴夫……五五
- 仝……柳原 愛子……五五
- 仝……松平 健子……五五
- 仝……鶴 久子……五五
- 仝……蜂須賀隨子……五五
- 仝……鍋島 榮子……五五
- 仝……林 甕臣……五五
- 仝……諏訪 忠元……五五
- 文
- 海邊松といふことを詠歌并反歌……
- 海上 蔚子……五六
- すみれ……雨後 翠嶺……五六
- 可憐娘……赤澤 山人……五七
- 野分……林 甕臣……六一
- 黒染衣……太田 貞子……六一
- 親友を哭す……參 川……六三

雜報
- 誰か吾人に主義なしと云ふ……六四
- 老婦に貯銀を賜ふ……六五
- 京都部踊の唱歌……六六
- 琉球婦人の留學……六六
- 支那婦人の足を矯さん……六七
- 振袖廢止の説……六七
- あな嗚呼の業かな……六八
- 清國西太后の來歷……六八
- 一烈婦……六九
- 女子の體操……六九
- 對山女子……六九
- 可憐兒(上)……七〇
- 女子教育論……七四
- 東京府高等女學校補習科卒業生……七六
- ふみの山口……七七
- 賀川料理法……七七
- 家政案内……七八
- 新撰日本小歷史……七八
- 誤り易き字音……七八
- 金田下賜……七九
- わが國の辭書……七九

教の庭
- 兼題 歌文數十首

附録
- 修身百首(つゞき)

- 口繪……永峯 秀湖……
- 挿畫……高橋 松亭……

柴田勝家の夫人



女鑑　第九十五號

この國――この身

この身は、何の爲に、この國にうまれたるか。この國は、何の爲に、この身に大關係を有するか。この問題は、世人の、常に、等閑にして、心を止めざる所なるが如し、といへども、この國に生としいけるものは、大に講究しおくべき事なり。この身の本は、いかに、この國の原は、いかに、身の本と、國の原と、兩ながら、最ふかき由來あり。事、もとより、一朝一夕の故に非ず。國の原は、天地の初にあり。身の本は、神明の胤より分かる。故に、之を知りて、能く其の務を盡くすを、この國の人とこそいふべけれ。いかに、才智あり學問ありとも、この本をしらずば、譬へば、銜なき馬の如く、又、楫なき船のごとし。何處をか目的とし、何處をか寄邊とせむ。

あゝ、本を知らざるものゝ行末は、まことに、かくの如し。さるを、世の人の、常にも、心付かざるこそ、實に、慨嘆すべきことの極なりけれ。

烏は、いかに色黑くして、形よく、鵜に似たればとて、つひに、鵜とともに、水に入りて、生活べきものにあらず。人も、國も、また、みな、然らざるはなし。たとひ、目は、横に、鼻は、竪にして、形ことなることなしといへども、其の習慣のことなると、國柄の成立、同じからざるは、自然の差別にして、到底、一致し、混合することを得べからざるものなり。まして、彼には、善しといふ事も、これには、まことに、悪しと見ゆることあり。かれには、便よきことも、これには、まことに、似づかはしからぬことの多きは、實に、東洋と、西洋との、國體、風俗そのものに非ずや。

かゝる、差別の著きにもかゝはらず、世には、猶も、かの國風を、我が國に移し、或は、比較べて、そのことなるところを同くせむとする、徒ものさへ多かりけり。吾人は、他のことは、いざしらず。わが國の婦女子には、決して、かゝる潮流の浸入をゆるさゞるの決心なり。諸孃も、必、しかつとめらるゝなるべし。何はともあれ。わが國の婦徳は、宗教の力にて養はれたるものに非ず。また、養はるべきものにあらず。さるを、いかに、僻目もて見るにもせよ、教育の普及と、發達とは、宗

教の勢のさかりなるに從ひて、さかりなるべきものと、思ひあやまるは、いかにも、嘆かはし。

わが國は、むかしより、宗教道德を用ゐるべき國柄にあらず、いまの國家教育の主義、すなはち、この國と、この身との關係を知り、この身の盡くすべき所を盡くすを、教育の主本とすることなれば、その本の異るものをもて、これを矯めむとするは、ただ、その利益なきのみにはあらずして、なかなかに、弊害おほきものなり。あゝ、烏の鵜の眞似をするさへ、なほ、その死を免がれざるを、國柄のことなる、習慣のおなじからざるを、移し變へむとすること、はた、いかに。

世界は、ひろけれども、わが身の生れし國は、この國の外になし。わが身の住むべき國は、この國の外になし。たとひ、この身ありとも、この國なくば、生くべき所なきなり。されば、この身は、この國あるによりて、立つべく、この國は、この身あるをもて、榮ゆべき理あり。もし、一朝、この國風の、彼に變化したらむ日には、すなはち、この身の消え失すべき時なり。かゝる危急の災をも、招くことゝ思へば、痛く、これを、こゝに論ぜざるを得ず。

あなうれた　あやしきかぜの
ふく世なりけり
あなうれた　あやしきあめの
ふる世なりけり

吾人、この世界に比なき國風の、天地とともに、窮りなからむことをねがふことの切なるまゝ、常に、心に快からぬ事あれば、これを言ひ、思ひよることあれば、これを述べ、ゐたへがたき眞心の端をあらはし、世に訴ふること、少にても、世を進め、世を正さむとの衷情より、已むことを得ざるなり。

あゝ、いかにせば、わが國の婦德は、全かるべきか。いかにせば、この身を保ち、この國を守るべきか。いかにせば、

草も木も色かはれどもわたつ海の波の花にぞ秋なかりける」といへる意の如くなるべき。



論説

常に天地に恥ざる心を持べき事

宮地厳夫

人たるものは、常に心を正くして、天地の神明に恥ざらんことを要すべし。其故は、唯人事をのみ頼とせむは、實に覺束無きことにて、人事には表裏あり隱顯ありて、太じき功を建たるが、かくれて人に知れぬもあれど、毫の罪なきが、寃を被りて罰を受る類ひも無しとは云ひ難し。さてこそ菅原の大神に座てすら、現世にてはれもはれぬ左遷にも遭せ給ひつれ、此大神に座てすら巳に斯の如し、况てや此大神ならぬ人々をや、實に覺束なきものは人事なり。然るに此理を知らずして、其覺束無き人事をのみ頼み居らむには、萬に一も思はぬ災難などに遇ことあらんか、爰に忽ち惑ひの心起りて、兎やせん角やせんと思ひ煩ひ、竟には天を恨み人をも咎めて、其天命に安むずること能はず、所謂安心立命の地を失ふに至るを免がれざるべし、いかに淺間敷ことにあらずや。

然れど、人は唯天地の神明に依賴し奉りて、常に其行ひを愼み、其照覽に恥ざるを心とし、如何なる幸福有るも、此は忝き天命なりと、仰ぎ尊ぶべきは、云ふまでも無れど、之が爲に怠慢の心を起す可からず。又如何なる災禍に遇ふも、是皆我身に受べき天命なりと悟りて、途方を失ふが如きこと有る可からず。此の如くにして、妄りに輾轉動搖すること無き、之を天命を知るものと云ふなり。斯の如なる時は、其顯はるゝことの早きと晩きとの、差は有るべきも、眞は何處までも眞にて、僞は何處までも僞なれど、眞僞ともに被ひ果べからざること、彼月に掛れる村雲の、暫が間は其光

を隠すこと無きにあらざるも、竟には晴て舊の光に回るが如し。然れど如何なることに出會とも、心に耻ることだに無らんには、惑ふにも及ばざれど、騒ぐにも及ばず、善も惡きも皆天命に任せて、已れが本分を盡したる以上は、常に安心して居るべきものなり、之を誠の道を悟りたるものと云ふなり。此に就て爰に一ッの話あり、其は延享寛延の頃の事なりとか、大阪備後町に、妙昌と云へる尼あり。此尼もとは身代もよろしく、何不足なく暮しけるが、いつしかおとろへて、いと貧しくなりたり。然るに其あたりの人ども、相集ひて念佛講をむすび、その掛錢は五百文づつの定めにて、妙昌尼も、其講中の一人なりしが、或講會の時、その掛錢一人分うせたる事のありしに、皆人此尼の取りたるならんと疑ひ、且其貧しきを侮どり、よもやとは思へど、御身若も間違へたることなどありはせぬやと問へど、妙昌尼はさらぬ体にて、いかにも我今少し入用の事ありて暫く借たるなり、明日は返しまゐらすべしとて、其夜は念佛講の終るまで居て、人々に別れて歸り。翌日五百文持せてつかはしけれど、皆々訝りながらも、彌妙昌尼が盗みて居しものとなりて、先々其場は事すみたり。斯くて月日の移るはいと早くて、ほど無く其年の暮となり。彼時の宿なりし、三原屋勘右衛門と云へるが、家のすゝ拂ひを爲しけるに、長持のさきより、何やらん紙包の出たるを取上て見るに、念佛講錢と云ふ札さへ付たる錢にて、先の講會の夜に失せたりとて、云ひ騒ぎたる彼掛錢の出たるに違ひ無れど、家の主を始め家内の者ども、孰れも大ひに驚きながら、さるにても、其時妙昌尼の自ら我入用ありて借りたりとて、返し來りしこそ不審なれとて、直ちに其由を彼尼に告しに、尼は毫も驚きたるけしき無く、其はさぞあるべき筈なり。我固より借りたるにあらざるも、今貧しければ、人々の我取りたりと疑ひ給ひしも、

亦理無きにあらず。斯る疑ひを受たる時、いかに云ひ譯したれどとて、其證據の出ざらん限りは、疑ひの晴るべきやうなく、又證據の出たらんには、誰か疑ひを殘すべき。縱令證據も出ず、疑ひも晴ずとするも、我盜まざることは、神佛の照覽し給ふ所にして、聊かも我心に恥ること無れど、其は孰れにても苦しからず、兎に角に其錢無くては、其場が治まらぬ故に、我假りに之を補ひ置きたり。今其錢の出たりと聞くは幸ひなり、我は知らるゝ通り貧窮にて事かくる身なれど、其錢返へし給はるべしとて。之を受取り少しも怨むるけしき無く快く歸りしかど、始め疑ひし講中の人々も、却て其心に恥ぢ、傳へ聞く人ともに、誠に貴き人なりとて、皆々感じあへりとなむ。此は余が大阪にありし頃、或人より聞き覺え居たる話なるが、其後新著聞集の、淸僧篇にも、載せあるを見たれど、今思ひ出せるに任せて、爰に之を引けり。然るに此妙昌尼の如きは、誠に彼天命を知りて、安心立命の地を得たるものと云ふべし。又大阪難波村に、瑞龍寺普通に鐵眼寺と稱する寺あり。此寺を建立したるは、元肥後國の產にて、鐵眼諱を光と云ひし僧なり。此僧に奇特のことの多かりしは、近世畸人傳を始め、諸書にも散見したれど、今要なきことは一々これを擧ず。其中に就て一奇話あり。此鐵眼即ち彼鐵眼寺を建立の最中、其使用し居たる所の大工の娘。未婚にして姙娠せり。是に於て其父なる大工、嚴しく之を責けれど、其娘止ことを得ずして、此は鐵眼和尙の胤をやどしたるなりと云ふ。大工其意外なるに驚きたれども、扨やむべくもあらねど、怒氣髮を逆だてて、和尙に迫りたるに、和尙は自若として少も驚く氣しき無く。娘が姙娠とは誠に氣の毒の至りなり、さり迚出來たる上は、致し方無し、生れたらむには此方へ引取るべし。夫までは何卒其方に於て、介抱の儀偏に賴み入るとの事なるより。父の大工も甚だ訝

かりながらも、せんすべ無ければ、其儘日を經るほどに、早月滿て、めでたく男子出生せり。大工は直ちに其赤子を抱きて鐵眼の許に行き、之を和尙に突つけ、如何なさるゝやと云へど鐵眼は更に平氣にて、久しく世話にて有しなり、赤子は正に此方へ受取たり、娘は慥に其方へ返すなり、ゑかし血の道などの起らぬやうに、氣をつけてやり呉たし、此は少かなれども小遣にすべしとて、金子など與へければ、大工は和尙の平氣なるを奇みながらも、固より生佛の如くに信じ居たりし鐵眼のことなれど、何か仔細もあることならんと、先其儘にて默りて歸れり。夫より鐵眼は自ら近所あたりを歩きて、晝夜貰ひ乳をなし、其子を養育し、又寺建立の勸進に廻る時なども、自ら其子を脊負ひて諸町を步き廻るより、忽ち世間の風評となりて、種々に取沙汰すれども、鐵眼之を耳にも掛ず、彌平氣にて彼子を脊負ひながら、所々方々徘徊するより、人皆之を怪まざるもの無く、和尙は或は狂氣でもしたるには非ざるかと云ふに至れり。其內に數多の月日を經て、既に八九ケ月にもなりたる頃、或日廿歲あまりの男、いと打しをれたる体にて、鐵眼の許に來り、面會を乞ける故、鐵眼は之に應じて對面したるに、彼男坐上にひれふし、淚止めあへず恐れ入りて申すやう、私は、此邊に住て當寺に御召使の大工某が家に出入するものなり。然るに如何なる緣にや、彼大工の娘とわりなき中となり、遂に姙娠まで爲しめたれど、元來親の許さぬ我儘より起りたる事とて、致方無く、若私が姙娠させたりなど、白地に申さんには、彼嚴重なる親共は、如何なる事をや爲出さんと、取々に苦心の餘り、娘が父は和尙を常に生佛なりと信じ居るより、詮方なく、娘に含めて和尙の子なりと申さしめ、一時を遁れたるものなり、然るに何ぞ圖らん、和尙は一言の御申解もなされず、其赤子を引取り、剩へ世間にて種々の惡評を立らるゝを

も、更に意とせられず、彼子を背負ひて、他事無く御養育なし下さるゝ狀を拜見するに就ても、其本はと申せど、唯私の不埒より起りて、大德無比の和尚に斯る汚名を被らせ奉れること、其罪身を置に所無く、何共恐入り奉りたる次第なり、此上は積る罪を御赦し下され、彼赤子は全たく私の子なりしことを世に明かにし、之を御受取り申度と、只管に詫入りて乞へるに、和尚は毫も咎る氣色無く、彼子は汝の子にてありしか、實の父の現はれ來れるは、即ち其子の幸なり、望のまゝに渡すべし、風など引せぬやうに氣をつけて育つべしとて、いと快よく彼子を出して渡しけれど、男は忝け涙にかきくれ、厚く拜謝して歸りしが。此男は間無く銕眼の德に服し、入門して出家となり、彼女も之に感じて尼となり、彼大工も、亦益〻歸依し、世間にても彌〻其德を尊び、銕眼の名殊に世に稱せらるゝことゝなりしとぞ。此銕眼の如きも、天地に耻ざる心あれどころ、虛心平氣にて斯ることをはなしたるなれ。されど人たらんものは、兎にも角にも、常に我心を正しくして、天命に安むずるの道を知ざる可からず、天地に耻ざる心を持ざるべからず。これ余が此一編の精神とする所なり。

（完）

女子教育一班（四）

三輪田眞佐子

且、教育は、物產の種類に從ひて、その趣を異にすべきものなり。されど、國の東西により、教育の方針に、差あるべきを以て、他國の教育制度を、そのまゝ採用すべからざるは更なり。同じ國中にても、南北の地方に由りて異るべきなり。例之ど、我が國の如き、米穀を以て、常食とする人民は、他國の、牧畜を以て生存するものと、教育を異にすべきものぞかし。然るに、わが數年前の女子教育は、牛肉の脂肪質幾分、歪

白質幾分などを諳んずるも、魚肉、米、麥、及、野菜の性質を知ることを忽になしたりけん、學ぶこと多かりけるに、施すこと少かりき。思ふに、女子は、料理を主り、家族の攝生を以て任ずべきものなれば、常食の性質を知り、常服の利害を知らざるべからず。例之ば、我か海草の如きは、澱粉質の外に、幾分の滋養質を含むも、不消化質多ければ、氣候のよき季節、腸胃のよき人の用うべきものならんを考へざるべからず。世に、未、斯る研究をなす女子少ければにや、正月の季節に、餅を作るはよからんも、盆の季期に、團子を作ることあり。かゝる習慣は、はやく改むべきものならん。或は、絹紬は、如何に用うべきか。綿布は、如何に用うべきかなど、國産の利用法を知るべきなり。又、普通教育に於ては、地方によりて、各、趣を異にすべきものならん。例之ば、養蠶の盛なる地方の女は、絹を、織ることを知り、茶業の盛なる地方に於ては、その製法を知らんことを要するが如し。蓋、なべての人は、論議の高妙なるを尊び、かゝる實際を卑しめるも、多くは、衣食足りて、禮節を知るものにしあれば、衣食の基なる物産と、住民との關係を知るこそ、教育の眞髓なれ。司馬遷曰ひけらく、人、巖處奇士の行なくして、長く貧賤なると、好みて、仁義を語るは、羞づるに足ると。おのれは、恒に、有徳なる女子を尊ぶと同時に、有爲の女子を欲ふなり。されば、有爲の女子は、空論もてつくり得じ。諸孃、世の風潮を學び、この理な、忽に思ひそ。

氣候は、人の生活に、大なる影響を及ぼし、その風俗、習慣等を左右するものなれば、教育上には、是非とも考へざるべからず。もし、熱氣強ければ、其の人民、酷烈、しかも、懈怠に流れ、寒冷甚しければ、其の人民、頑屈、しかも、姦曲に失するは、勢なり。されば、わが國は、寒熱、各、宜しきを得たるをもて、

女子の性質溫雅、風体優美、智わり。能わりて、活潑なるも、粗暴ならざるは、自然なり。て敎育而しは、自然に從ひて、これを守るべきものならんに、近來、人爲もて、空論を實行せんとし、徒に、かゝる女子もがな、かゝる婦人をこそ、と勤むるものあるは、必竟、女子を害ふ結果をなすものと、言はざるを得ず。わきて、服裝は、氣候に伴ふものなれど、雪、いと深き國の、周密なる衣裝、或は、熱、いと强き國の、粗略なる着物には、各倣ふべからず。故に、わが國の女子は、其の心事、其の容裝、一切、わが國の天然なる時候に伴ふべきを以て、これが敎育をなすもの、大に心せざるべからず。れのれ聞けり。寒地の動物は、脂肪に富むと、これ、寒を防がんがためならん。熱地の植物は、酸類を含むと。これ、熱を消さんがためならんか。詩に云ふ、維、天の命、わゝ、穆として已まずと。敎育者、これを忘るべからず。

これと等しく、一國の富力の程度と、敎育の制度とは、相應すべきものなり。これを以て、敎育の制度、ろの社會の發達と、相伴ふものは、善良なるべけれど、一朝、他國に摸擬して設けしものは、適當せざること、怪むに足らず。然るに、わが現今の女子敎育、或は、二派に分れ、一は、われより、數倍むかり、富の程度高く、常に、大理石の高閣に住み、出づるに、車わり。食ふに、肉わる歐米人中、しかも、最、高等なりとて、自、ほこらへる國の敎育を似ねて、わが普通の女子を、奢侈遊怠の風に誘かんとするより、その學校にて學びし智識を以て、世に立つときは、日時の生活は更なり、交際等、万端の風習に應ずること能はず。誠に、口惜き至なり。蓋、かゝる極端は、救ひがたき弊害を釀すに至らん。一は、頭に、管笠を頂き、足に、草履を穿ちたりける社會の單純幼稚なりしときの生活情態に適當したりけん智識を、そのまゝ、現今の如き複

雜なる世態に處すべき女子にも授けんとすめり。これ、亦、甚わかぬ心地ぞする。されど、かゝる極端は、質素の徳を養ふに足らんか。されど、今日、眞の良妻賢母を養成せんとならば、わが國の富の程度如何、情態の趣勢如何を考へ、適切なる教育を施すべきなり。かしこくも、古き御製に「あまつ神國つ社をいはひてぞわがあし原の國はをさまる」あそばされたり。以て、わが國教の大要を知るに足らんか。而して、教育は、必、國教と、相離背すべきものにあらず。寧、國教を固守する心を養ふべきものとぞ思ふなる。これを以てにや、西洋諸國にも、各、その固有の宗教ありて、民心を一統せんことをつとむとかや。わが國固有の信向は、**強、宗教と見做すべからず。獨、超然と、万教**の外に卓絶しゐるものなれば、おのれは、これを、假に、國教と名けて、他の佛教にまれ、耶蘇教にまれ、之に合同するやう、和合せざる限は、その教義をもて、敢て、この御國の道を妨げざることに注意すべきものとこそ信ずれ。現に、佛教は、その祖釋迦が、自國なる迦毗羅衛國の、隣邦より亡さるゝとき、見ながら、莞爾として、これを憂へざりきとぞ傳ふる宗教なるに、その、始めて、我が國に傳來せるよりは、忽、わが國教に、稍、同化せられ、遂に、その教義は、かくも甚しからざるやうなりぬ。おのれは、常に、今の女子教育は、その半の上、外教信者の手に委ねらるゝを見て、果して、かゝる人達は、かゝる分別を、心に有ち居るか否かを疑へり。あはれ、苟、しきしまの大和の國運を、長に進ましめむやと願ふ愛國の士女、幸に心してよ。

女性と文學

水本青蘿

若し、男子世界を以て、理屈の世界なりと云ふことを得

た、女子の世界は、感情の世界なりと云ふことを得べし。よしや、社會の最高處には、常に形式的論理の到達すべからざる、崇高なる、神聖なる信仰の指導ありと雖も、冷かなる社會は、長久に、理屈の羈絆を脱却する事能はざるべし。社會に於る人間は、先づ其の如何なる理由あるか、如何なる理屈あるかを敎へられざれど、決して行動せざるなり。必竟社會と云ふ語は、理屈と云ふ根本主義に因つて、統一されたる團体を、意味するに外ならざるが如し。然れども、温かき家庭は、終に、理屈の專横を許さゝる也。若し、幾多の理屈は、採用せらるゝとも、ろは、理屈なるが故に、採用せらるゝに非ずして、ろが感情に適當なるが故に、採用せらるゝ也。家庭に於ける人間は、其の如何なる理屈なるかを、敎へらるゝを侍たず、唯自然なる感情の指導に從つて、行動する也。無理屈なる泣く兒の思望は、笑つて容れらるべく、可憐なる子女は、其の理屈を知るより、以前に、其の父母に從順なるべし。家庭に於ける根本主義は、必竟感情に外ならざれどなり。

男子も女子も、均しく是、社會の一分子たるが如く、家庭の一分子たらざるに非ず。然れども、男子は、其の家庭の主人として活動するよりは、寧ろ多く、社會の一男子として活動すべく、女子は、其の社會の一女として活動するよりは、寧ろ多く、家庭の一女子として活動せざる可からず。男子が、役々として理屈の街に驅馳するの間に、女子は、循々として、ろが感情の天地を、整理せざる可からず。法座に、國會に、敎室に、實業界に、男子が、幾多の理屈を弄するの時は、女子が其の統御する家庭の中に、限なき惠と、大なる情を以て、其の子女を誘導すべき、任務を有せり。其の夫が、冷かなる理屈に、飽き果てゝ、歸り來る夕は、其の妻は、温かき感情の手を以て、此を歡迎すべき義務を擔へり。故に、曰、女子の世界は、感情の世界なりと。

由來、理屈を弄する女子程、厭ふべき者無かるべし。彼は、宛然刑法を論ずるの、法師に似たり。

か〻る世界の下に、か〻る任務を帶ぶ女子が性質は、勢ひ感情的ならざるを得ざる也。故に、彼の思想は、單純なり、故に、彼は、理性の制裁に同じ、故に、彼は、淚脆し、故に、彼は、箸の倒れたるをも笑ふ、彼は、唯笑はんと欲して笑ひ、泣かんと欲して泣くのみ、其の間、さらに、理屈の拘束を置く可き、餘地を有せざる也。例令へば其の子弟が、君父の爲に、討死したりとせよ、理屈的に、強て欣ばんと企つる者は、男子にして、感情的に、直に泣き、伏す者は、常に女子なり、是彼の思想は、三段論法的なるよりは、寧ろ直觀的なれば也。彼は、理屈に訴ふるよりは、寧ろ、感情に訴ふる事に、習熟したればなり。故に、彼は、争はんよりは、寧ろ、泣かんと欲し、論せんよりは、寧ろ、唱はんと欲す。されど、女性は、或る意味に於いて、常に、文學的なり。

文學者の任務、何ぞ、單なる主觀的感情を唱ふに止まらんや、彼は、人世を唱はざる可からざる也。而して人間とは、單なる感情の權化には非る也。文學者の目的、何ぞ、一の感情に止まらんや、彼は、理性ある人間を、描かざる可からず。彼は理屈的の、動物をも、寫さゞる可からず。然れども、彼が、理性ある人間を見、理屈的の動物を見るや、彼が、理屈の眼を以て、是を見るに非ずして、感情の眼を以て、是を見る也。文學者は、推理する者に非ずして、直觀する者也。彼は、理屈を以て、人間の罪を、裁判すべき法官に、非ず、彼は、理屈を以て、人間を指導すべき科學者には非ず、彼は、大なる惠の手を以て、濁りたる者をも、純化すべく、高き悲みの眼を以て罪ある者をも憐むべき天職を有す、必竟、彼は、温かき感情を以て、冷かなる理屈世界を慰籍すべく、定められたり。貪慾なるシャイロ

ツヾリをも、逸せざるの同情ありて、マーチヤント、オブ、ベニスはなりぬ。かよわき小春治平をも、憐むの情あり、天の網島はなりぬ。文學者は憐む可き理屈なき者をも憐む也。ろは、文學が、理屈的に非ずして感情的なればなり。

文學に於ける這般の特質は、頗る、女子の資性に似たるに非ずや。ろは、尠くとも或る方面に於いて、女性と文學とが、容易に、連接し得べき事を示すに非ずや。斯る意味に於いて、予は、女子の文學に望を屬する事を、禁ずる能はず。

然れども、女子の感情は、動もすれば、盲目なり。偏狹なり。大詩人の感情は、明晰なり、廣大なり。彼は、往々、理屈以外に逸出せんとし、此は、常に理屈以上に在り。彼の理性は、不正を叱咤すべき勇氣なきなり、此は、惡を惡むよりも、更に大なる、慈眼を有す。女子の資性は、文學者の特質に似たる處ありと云ふのみ。そは、文學者たるに都合よき資性ありと云ふのみ。女性、何ぞ、必しも文學者なりと云はんや。

セキスピヤは、女性に非ざりき。ゲーテ、シルレル、ダンテ、ユーゴー、盡く男子なりき。西洋の歴史は、文學界に於ける、女子の失敗の歴史なり。然れども、源語は、吾人が嘗て有したる、最大文學なりき。平安朝の文學は、其の大半を女子に占有せられつ。日本文學史は、女性の成功の歴史なり。思ふに、彼の束髮と、コーセツトと、夜會と舞踏と、社會的動物としての女性と、男らしき女性との、文學界に於る失敗は、西洋歷史に依つて、證明され、淑德ある、從順なる、感情世界の天使と、女らしき女性との、文學界に於る成功は、日本文學史に依りて、證明せられたる也。大日本の女性世界、何ぞ、必しもセキスピヤと、ゲーテとを、出さずと云ふ事を得んや。

近時の文壇、女流文學者、頻に、輩出すと稱す。然れ

ども吾輩不幸、未だ彼の輕佻なる女流文學に、賀詞を呈する事能はず。たゞ、少しく女性と文學との關係を論じて、異日の紫女、淸少に、待つ有らんとする耳。



柴田勝家の夫人

鹽井ふく子

我國の女子の美德は、情にこまやかに、道に潔よく、操正しく、心あくまで柔和に、温順なるにあり。この美德あるが故に、我國の人の女といひ、人の妻といひ、人の母といはるゝなり。此の美德なくぞ、我國の人の女とも、人の妻とも、人の母とも、總じて、我國の女子といふべからざる者なり。いな、世界に女子といふべからざる者なり。さるに、難波の蘆は伊勢の濱荻、所所の習ひなりとはいへど、あさましく、嫉むべきは、彼の白面の異國人、またこれに惑はされたる白痴の人人が、此の尊き我が日本の國の女子の美德をさして、卑屈なり、柔弱なり、不活潑者なり、男子のしりへにのみ從ひ居る意氣地なしなりなどゝて、密に嘲けり笑ふものなどあるはいともにくむべし。かゝる白面白痴の言は、柔和と柔弱とを、取りちがへたる大なる僻言なりけり。我が國の女子の美德といふは、柔和にあり、柔弱にはあらず。柔和といふは常に青柳の、いとゞなよ〱として、微風微雨にも堪へざるものゝごとくに見ゆれども、内々は、中々に嵐にも雪にも、折れず曲らざる氣節のこもりたるものなり。日來は、櫻の花のあでにやさしく、ゑみこぼれて、力も心もなきものゝ如くなれど、なか〱に、いざとあらむ、散るべき時の、色をも香をも惜します、潔よき氣質を具へたるが、柔和といふものなり。これが、我が國の女子の美德な

り、美徳とすべきものなり。よしや、彼の白面の異國人、白痴の人々、卑屈といひ、意氣地なしと云ひて、笑はゞ笑へ、そしらぞそしれ、元より父母の敎のまゝ、夫の差圖のまゝ、やさしうおとなしう、かしづき仕ふるが、此の日本島根の女子の美徳なり、美徳とすべき所なり。彼の親を凌ぎ、夫を壓へて、眞に活潑とか、十九世紀の新しき女子なりなど稱ふるは、白面白痴の爲す所いふ所のみ。我國の女子の、更に〳〵まねぶべからざる所なり。

柴田修理亮勝家の夫人を、小谷の方といひけり。織田信長公の妹なりけり。天正十年十月、織田信孝が、秀吉を面白からず思ふことありて、柴田勝家、瀧川一益等と共に、これを兎に角に除かむことを謀りぬ。一益、密に計略をめぐらすやう、まづ信孝が兵を起して、濃州わたりにたてこもらむ、秀吉必ず大軍を率ゐて、一もみにもまんと、押し寄せなむ。其の折り、勝家は江北より打つて出で、己れ瀧川は、うしろよりして、三方より取圍みなむ、秀吉何ほどの智勇ありとも、進退こゝに究まらむ。さすれば、勞せずして、勝を得む事、論をまたずと云ふに、人々も、げにこゝろよき計略なれと同意して、先づ信孝兵を岐阜に起したり。

かくときくや否や、秀吉は直に兵を出して、信孝がこもりたる岐阜の城を、一揉みにと取り圍みたり。折しも、雪に阻まれて、勝家は兵を出す事能はず。一益が計略、案に相違して、信孝が岐阜城は、孤城落日の姿となりければ、是非なく、信孝は和を乞ひて、一たん事は治まりたれど、秀吉は勝家一益が事を恚り、明年正月いよ〳〵大軍を出して、一益を伊勢に伐ち、本陣を長濱にすゑて、自ら此處に居り、賤が岳の十三塞を修めて、勝家方に備へたり。

形勢やうやく大事となりぬ。一たび和を結びたる信孝も、又兵を起して、岐阜の城に據り、陰に勝家が方に

應じたりけれど、秀吉も、兼てさあらむと思ひたる事なれど、直に時もなく兵を向けて、これを攻めたり。勝家此隙に乘じて、佐久間盛政をして、賤が岳の塞を襲はしめ、その將なりける中川淸秀等を討ちとり、大に勝閧を擧げたりしに、秀吉は賤が岳大事なりと聞き、直に又兵をひさげて、これに赴き、一戰に盛政を擒にし、勝ちに乘じたる大軍七萬餘騎、駒にむちうちて、長驅、直に勝家が籠りたる北の莊をも圍みたり。勝家方は、やうやくに二万騎ばかり、それも、また大半は盛政が手に屬せしめ、賤が岳にむかはしめたるに、其股肱の將とたのみきつたる佐久間は、力つきて遂に賊の手にとらはれ、將士ども、半は討れ、半は逃げ失せて、殘るは僅に三千騎ばかり。岐阜なりける信孝が方も、おなじく大軍にとりかこまれ、一益が方も、また元よりせめなやまさるゝ最中なれど、後詰と頼む味方もなく、防矢もたのみすくなになりにける。

日來楊柳の枝なよ〳〵とやさしげなる小谷の御方は、夫と共に城中にありけるが、始終騷ぎたるけしきなく、心靜かに夫を助け、また木戸〳〵をうちめぐりて、兵士どもをいたはりはげましたるこそ、いさましけれ。討たるゝもの、捕らるゝもの、逃ぐる者に、城中の勢は、いよ〳〵減じて、數ゆるばかりとなり、子息權六並に玄蕃の頭も生捕られて、心細くもなりまさる城中にひきかへて、七重八重に圍みたる寄手の方は、十重廿重と、日每にいよ〳〵重りゆきて、見亘す限り、野も山も、羽柴が軍勢のみ群がりたり。

力山を拔き、氣世を蓋ふ英雄も、時利あらざれば、遂に江淮の土となるならひは、何處にもいつの世にも變らず。實に、北越七洲の藩鎭にて、日來鬼とさへ呼ばれたる勝家も、また時利なくして、かつて己が武名をしたはれ、羽柴とまで改名せられたる秀吉に、かくせめなやまさるゝとは、げに定め無き戰國の世のさまや。

最早是れまでなりと、勝家は思ひ定めて、妻なる小谷の方に向ひ、そこは信長公の妹、殊に女性の御身ゆゑ、遁るゝとも、何の苦しき事のあるべき。とく〳〵城を出でゝ、如何ならむ方にも、御身を寄せ、行く末長く安堵を謀られよ、とく〳〵とありしに、小谷の御方は、涙ぐみ給ひて、あなうらめしの我が夫の御言の葉や。去ぬる秋の末に、岐阜より來りて、あひたてまつりてより、此の世、後の世といふものあらむ限りは、諸共にと誓ひしは、如何でか忘れ申すべき。火に入るも、水に入るも、さきの世よりの定業にてあらんに、弓矢とる家に生れ、弓矢とる家にかしづきし身の、かゝる事あるべしとは、かね〴〵思ひまうけたる事にて侍るものを、今更に、何懟き申すべき。武士の娘なり、武士が妻なりと思召さむ、我と共に、何處までも來れと仰せたまふが、眞の武士が、眞の武士の妻に盡し給ふ情にて侍らむ者を、夫の危を捨てゝ、身をのがれよ、子の捕らはれしをもかへり見で、獨り止まれとは、あまりにあさましき御言の葉を聞きまゐらするもの哉。武士が武士の妻に、の給ふべき御言の葉とは覺へ候はず。賤の女ならばともあれ、武士の妻が、いかでさるあだなる御情を、うれしう思ひ侍るべき。我が夫の仰ながら、海ゆくも山ゆくも、君がみどりにころと思ひてなる我が心、必ず〳〵さる事きくべくも候はず。此の城の月影も、今宵を限りと覺えらるゝに、互に潔よく見はて候はむ。いざ〳〵とて、自ら酒肴をとり出でゝ、夫にすゝめ、殘りたる將士どもにもたまはりて、是までの志を歡びきこえなどすれど、皆泣きなどす。

短き夏の夜の、見はてぬ月の光りればろに、はやしののめのあけかゝる空に、折りふし時鳥の三聲二聲、別を催し顔なるに、小谷の御方、

　　さらぬだにうちぬるほどの夏の夜の
　　　わかれをさそふほとゝぎすかな

とよみかけ給ひて、流石に怨をも眺められたり。勝家、心よげに、莞爾とうち笑み、

夏の夜のゆめぢはかなきあとの名を
　　くも井にあげよ山ほとゝぎす

とて、さかづき高くさしあげ、うち仰ぎてぞ、のみほしぬ。

此處にて、若狹のかみにて、文荷齋と申す者、甲斐甲斐しき雄士なりけるが、城の四方を驅け廻ぐり、少々殘りたる兵者に敵を防がせ、天守の下に、ごみくたを積み重ね、用意殘るくまなくはたしをき、今はかくてそとて、小谷の御方はじめ、其の外志ある女房どもの念佛高らかに唱へて、一同に自害したまふさまを見て、文荷齋心しづかに天守に火をかけ、半ば燃えあがりしとき、雜人ばらを出して、勝家のおはせし五重の上にのぼりて、殿の御行方、何處までもおくれん供仕らむとて、男女三十餘人と、腹かき切りて、おなじ城を枕に、おなじ煙となりて、立ち上りたりしといふ。この無言なる嵐は、實に、天正十一年、四月二十四日、申の刻ばかりなりきと云ふ。時に從ひ、世にまかせ、或は己が自由我儘なる心のまゝに、節義を忘れ、身を汚す異國の人どもは、かくても、なほ此の神國の神女の心をも、卑屈不活潑としてのゝしらむとするや。

高橋東岡の妻

伊勢　山川清素

曆學者として世に名高き、高橋東岡の事は、人皆是を知りなむ、されど東岡を知れるものは、又其の妻を知らざるべからず。

東岡生れながらにして、剛直の氣あり、世の譏譽を意にとゞめず、自ら信ずる所、一歩も人に讓らざる性なり。夙に天文曆術の學に志深く、如何でかして、其の蘊奧を極めむと、思ひをりぬ。時に豐後の人、麻田

剛立大坂にありて、暦學を講ずと聞き、悦びて其の門に入れり。東岡剛立の門に入りて、日夜汲々として怠らざりしかども、其の家固微祿なれど、赤貧洗ふが如く、朝夕の細き烟をだに立てかねたる程にて、思ふに任せぬ事もゑど〳〵なりけむ。されど其の妻、いと賢良なりければ、其の貞節の心と赤誠の情とは、能く夫の志をはげまして、遂に蘊奥を極めしむるに至れり。

東岡の家餘り廣からず、籬には八千草生ひ繁れど、筧に訪ふ水清く、自然に立てる石も、おもむきあり。況て庭の面に植ゑわたしたる、萩女郎花などの、露を含める樣は、さながら一家和合の姿をあらはしてける。其の庭内に、大なる柿の木ありけり。年々其の實を、市に出して、世を渡る手助となしにけるが、氣候順に叶へるにや、一年わきて枝も折るゝばかり、實を結びぬ、東岡悦びて、朝夕之を培養ひき。さるを、近隣の少年これを見て、暗の夜に忍びて、實を盜みとりぬ。一度二度の程ころは、默しもゑつれ、度重りては、いかでか見逃さるべき、此度目にふれたらむには、斯くてやはおくべき、引捕へて辛き目見せてむと、夜ごとにその樹の本を見めぐりつ、風の音に籬の呉竹の、さやさやと音するにも、其かと疑はれ、叢にとぶ蛙も、其の足音かとあやしまれて、夜な〳〵安き夢をも、結ばざりしぞうたてかりなん。

ある日の事にてありき、東岡例の如く、役所より歸りけるが、ふとうち見れど、さしも心にかけつる柿の大木は、根元より截り去られて、倒れたり。そが驚き如何ばかりなりけむ、割るゝばかりの聲に、妻を呼びて、怒氣と共にいひなぢる、其のけしき、近づくべうも見えぬを、妻はにこやかにいで迎へて、こは妾の業にこそ、許させ給へ、此の意外なる一言の答に打たれて、烈火の如き東岡、爲すことを知らず、眼を嗔出して睨みたるほどに、妻は容を正してあはれ、吾が夫、君は

必、天文の學によりて、名を揭げ家を興し給ふべきよし、見え侍るを、此の一本の爲に、わたら時と精心とを煩はし給ふこと、妾の忍びて見過ごすべきにあらず、若この樹なからましかばと、聊心に期する所あれど、竊に人をして、斯くは截らせつるになむ、君の夜な夜な起きあかし給ふ毎に、妾は安き心も侍らず、君の身の、この一本より重きを、思ひたればこそ、斯くは計らひつれ。妾の罪は、固より輕からねど、此の言ばかりは、聞入れ給へと、果ては涙さへさしぐみて、膝下に伏沈めむ。東岡このありさまに、氣ゆるみ足たるみて、朱をそゝぎたる面貌、向くるに所なく、血走りたる眼光、俄にふさがりて、鬼の如くつッたちたる東岡は、妻の言葉に忽ち小兒の如くなりぬ。

あはれ、この妻の一言、この一言は、實に迅雷耳を覆ふ遑なく、晴麗なる雲霓を、天の一方に望むを得たり。東岡の名を成したるは、實にこの妻の一言によれるなりけり。

彌生の嵐、葉月の雲、實に果敢なきは浮世の常なり

あはれ、この良夫に伴ふ賢妻は、如何なる宿世にかありつらむ、夫の榮達を見るに至らずして、夕を待たぬ花と共に、果敢なき物の數に入りぬ。東岡の心如何に口惜しき限りなりけむ。

あはれ、東岡貧窶の故を以て、其の志をひるがへさず、百難を排し、能く其の事を成就したるは、其の持する所の、堅固なりしによるとはいへ、かの賢婦の助けなかりせば、いかでかこゝに至るべき。



家政

活花（第六）

田邊和氣子

萩すゝき桔梗かるかや女郎花、庭は錦と咲みだれたり。明日は、何をか手折りて活なむと、おもふ折しも、夜中ばかりより野分の風吹あれて、しどろもどろになり行くぞ口をしき。明ゆくままにつま戸押あけ、見出だせば、哀れきのふ見しれも影だになくなりにけり。かくてあらんよりはと、折れふしたる萩も薄もかり取りて、大なる花がめにさし置けば、中々に又見どころありて哀なり。さはいへ世のをとめ達、流儀だちたる活方をや待給ふらむと、吹折られたる中より、薄の直なるを、二本三本取出でゝ、體にはまがきのもとに、伏ながら咲きたる菊を取添へて参考のため活けて見せ参らせむ。そもゝゝ薄の葉は、左右へ出でてなびきたるも、こを前後に見なして活けざれば、あらぬさまになりゆくぞかし。眞副の葉打重りて十文字となりなば、葉さきを切りなどして筋の通る様にすべし數は三本又は五本を以て眞副とすべし。體は、菊に限らず桔梗なでしこ其他の花何にても取添へてよし。其色の取合せ、見はからひ給ふぞ要なりける。





たちぬひ

西山たい子

(七)一ッ身袷の縫ひ方

何物にても袖よりまづ縫ふべし。さなき時は、そでなき事をするとかと、嫗など常に云ひぬ。

袷の袖をも、綿入の如くして、裏表はなして、縫ふ人もあれど、袷は、あはせて縫ふがよからんと思へど、此處には、四ッ縫ひと云ふ縫ひ方を記るしてむ。

まづ裏袖のおもての方へ、袖口をかけ、そのかけたると、表袖の袖口にすべき方とを、合せて縫ひ、袖付と、袖巾との寸尺をよく度り、まぎれぬやうしるしをつけて、袖付より下、ふりになる方を、一方だけ裏表合せて縫ひ置き、よく條をつけて、引きかへして、表の方を出だし、それを横に眞二つにたゝみて、ふりの縫ひあらぬ方をひきまくりて、縫ひある方をつゝむやうにして、よく合せて、針をうちれきて、四つ合せしまゝ、袖口の方より、袖下だけを縫ひなど、一つからげぬひて、そこより縫ひたる振を、中にたゝみて、上のふりを袖付まで縫ふなり。そのふりの方を縫ふときは、袖下の如く、縫ひつくるにはあらぬ故、よく心を用ゆべし、縫ひ終らば、よく條をつけて、角々をしかと折りて、手を引き入れて返すべし。袖には左右あれば、初めのふりを縫ふ折、一方は表より、一方は裏よりと、よくまちがはぬやうになすべし」。さてそこにて身衣をとり、裏表とも、單物縫ひし如くにして、縫ひれきて、裏と表との丈をくらべて、ふき一分と見て、裾を合せ、脇の裏表との縫ひ目、及び、衽の裏表のぬひめとを合せて、とぢつけ、褄下を折りて絎け、襟をもまた裏の方へ折りてくけ、それより袖をとりて、袖付だけわけおきし處の表なるを、身衣の表にぬひつけ、裏袖の袖付と、袖付下とを絎けるべし。

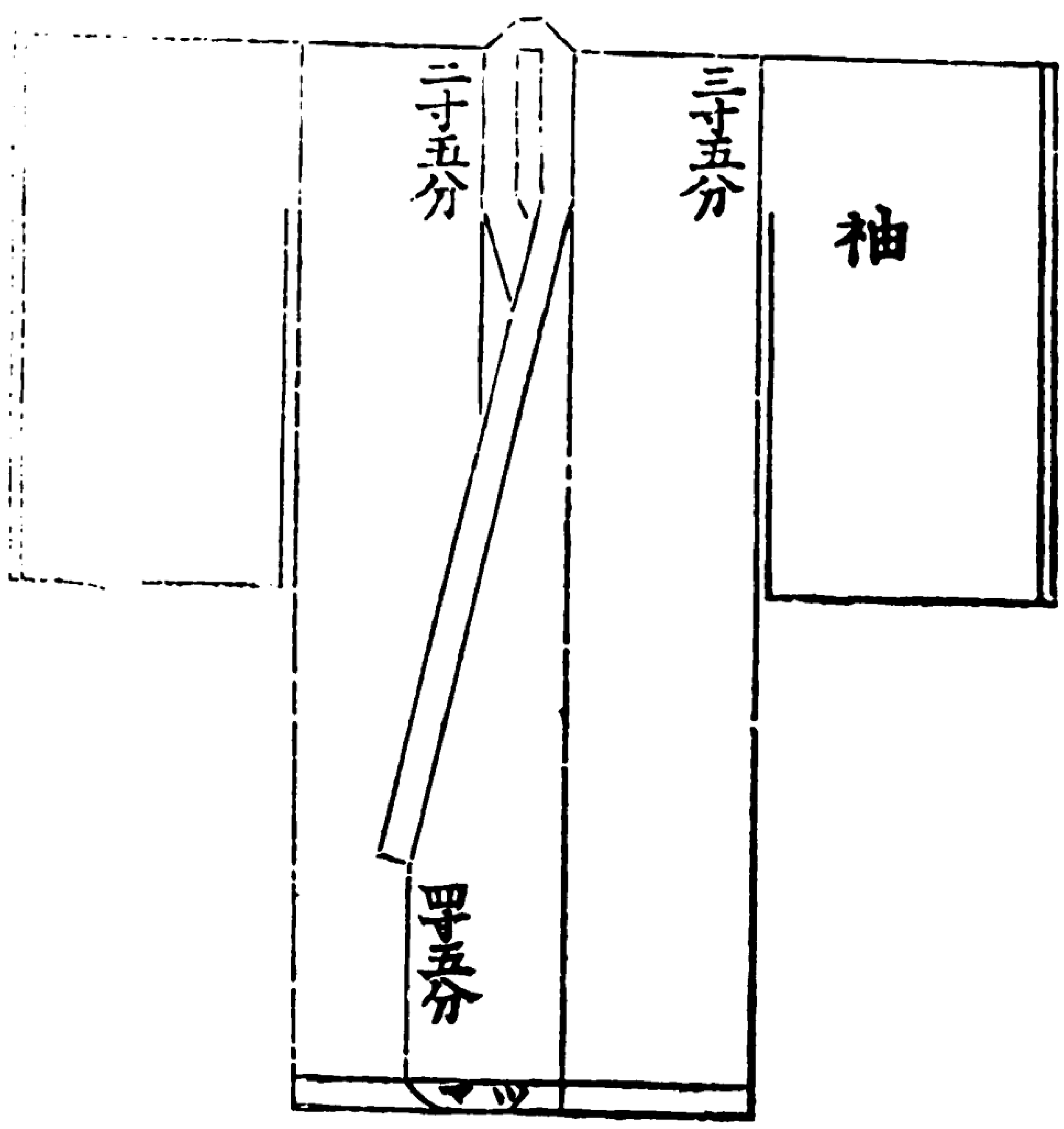
(八)一ッ身綿入の縫ひ方

之もまた先きの袷の如く、まづ袖口を、裏袖につけ置き、表袖、裏袖、各一つ〳〵に袖下を縫ひおくなり。(但し裏袖は、一分ぞかりみじかく縫ひおくべし)

身衣も、また、袷の如く、裏表縫ひおきて、ふき四分五分六分等欲するまゝに從ひ、よろしきやう見て、褄

形を揃へてぬひ合せ、四袖をつけて、縫ひめ〳〵に假糸をかけ、うらがへしてたゝみ、表の脊の方を出だして、のせし、綿を入れ、裏をのせて、其上に、綿の横縦に出で居るものを、折りかへして、足らぬ處には、外の綿を足し、さて、下になり居る表の、前の方に手をさし入れて、引き返して、袖口、振、褄下、ゑり等を絎けるべし。

一ツ身綿入縫ひ上りの圖



寸尺等は、單物のときいひたれど、此處には別にいはず。

又袖は心を用ゐぬときは、よく同じ右どかり、或は左だかりをこしらゑたり、又は左の袖を右につけたりなどする事などもあり、よく〳〵心がくべし、

丈、巾などはよくくらぶべし、表がたるみたり、裏が廣くなりたり、袖口がですぎたり、振りがあはずなりたりしては、誠に見苦し、

褄の事は、言の葉には言ひ得ざれど、圖に出だせる褄を見て、よく〳〵形のよきやう縫ひ給へや。

だいどころ

薑の味噌燒

新薑を莖二三寸の處より切り、根を庖刀にて割り、此間に味噌を狹み、金網に上せて燒くなり。味噌は生味噌、又は、砂糖味淋抔加味したる味噌を、用ふるもよしとす。

栗の經純

栗を生の儘にて皮を剝き澁を去りたるを水に積けて好く洗ひ、水の濁らざるを待ち、鍋に入れて湯で、沸騰したるとき之を卸し、湯の冷却るまで蓋を爲し置くときは、栗蒸せて煮ゆるなり。更らに之を、アクを取りたる多量の砂糖水に食鹽少し計にて鹽梅したる汁に投じ、三十分間煮たる後、鍋の儘卸し置き、別に甘藷の皮をむき好き程に切りて湯で、(煮立つときは度々水を取換ひ、アクの爲め黑色にならざる樣注意すべし)之を裏漉に掛けたるものを、前の栗を煮たる汁に入れ(此時栗は、鍋より揚くべし)餡の如くに煮詰めたる處に栗を入れて攪回はすべし。斯くて、經純は出來るなり。

鮎の魚田

鮎を丸身の儘にて串に貫し、(大いなるは縱に一つ、小さきものは好き程の數を横貫しとすべし)火に炙ぶり其の燒けたる後、味噌を附けて燥かすべし、但し味噌の拵方は、前號茄子のシキ燒の味噌と、同樣にて宜ろし。

蒸し松茸

松茸を濡れ紙に包み、溫灰の中に埋め、大略二十分位置き、之を細ろく割きて大根ヲロシの三杯に混せるなり。又た其の細ろく割きたるを、山葵醬油にて用ゆるも佳し。但し大根ヲロシの三杯とは、大根をヲロシたるものに、酢、醬油、味淋の煮切を好き程に調味して注ぎ混せたるものなり。

蓮根の酢煮

蓮根の皮を去り極く薄く小口切りと爲し、酢と味淋に食鹽少許を加へて調味したる汁にて煮るべし。色白くして體裁好きものなり。但し汁に唐辛少量を加ふるも、亦た妙なり。

初茸豆腐

先づ初茸の土に着きたる部分を切り去り鹽水に漬け暫時にて揚げ、之を煮出汁に投じ、其煮いたるを待ち、豆腐を好き程に入れ、後醬油にて鹽梅し、沸騰せむ速に卸すべし。柚子の皮を削きたるを吸クチとなすを佳しとす。

思ひいづる儘、

くりや女

(二二)　(十月中婦人行事)

季節日用調理

(番外)一言申し上げん　いづこの姫御前にやおはすらん、心雄々しき方の文給はりて。御身はさても鄙しく下卑たる生れかな、いま少し人に教へでとせんには、高尚くて矜り慢ぶらぬこゝろよかんめれ。と、まことに理りなる言の葉なり。さはれ一を知つて十を知らぬとやいひつべき。おのが心の矜り慢ぶれるも悟らで、をこがましきことゝ、「自ら心に思ひ給ひね、たゞ其のしはらしき文の意味をくみつゝ、この欄にて、少しく「だいどころ」に漏れたるを、補はんかし。

(ち)大根の味噌漬　こは先づ一晝夜間「あめ」(味噌豆を笊にわけ桶に垂れたる者)の中に大根を入れ置き、かくして赤味噌に漬込み　五六日を經れば、美麗透明の濃紅色を呈し、齒ざはり柔にして溶る如し。

(り)ライスカレーを作る法　はじめに牛酪若くは豚脂を煮解かし、これに球葱(普通の葱にても良し)少許を細末にきざみ込み、攪きまはしつゝ、煮立つるときは、能く融けて味汁となる。之れに切目牛肉適宜を入れ、煎りつけること暫時にして「ソップ」を加へ、煮立たる後、小麥粉を適宜に混ぜ、是より火勢を減じて、折々「ソップ」を加へつゝ、攪きまはしながら、煮詰めること普通の糊を製するが如くにして、更に「カレイ」粉(其の分量は、麥粉全量に對する五分の一位を投じ、其の汁一躰色付き、トロゝ、汁の如くなりしを適度とし、之を炊ぎての飯にかけるなり

(ぬ)泡雪汁　朧豆腐を布につゝみ、暫く雫をたらし大根をむぎ、山葵卸しにておろし水を去り、豆腐二合もあれば、おろし五合ほどにして交ぜ合はせ、上上の葛を小皿に一ぱい半ほど解き、一緒に交ぜ合はせ、鍋に湯を沸かせ、其の中へ入れて煮、沸え上がりたるとき蓋をとり、他の鍋に味噌汁を製して、鍋杓子にて掬ひ入れ、淺草海苔をもみ、被けて出すなり。

(る)煎り松蕈　生のまゝ能きほどに切り、空鍋を燒きて、ざつと煎りつけ、汁を捨て、醬油すこし柚子のしぼり汁と、一處にさし入れ、よく攪き回はして器へ盛り、胡椒の粉をふり被けて出す、但し銅杓子にてかきまはす時は、銅氣のうつるゆゑ木杓子にて攪き回はすべし。

(を)蒸し松茸　生松たけを丸のまゝ笊に入れて、程よく蒸し、引き裂きて、わさび味噌、山椒味噌、又は生姜醤油にて食ふべし。松茸を空土瓶に入れ、火に掛けて蒸すも亦可し。

(わ)白菊の吸物　豆腐を一寸四方ほどの角に切り、十文字に細かに切りかけ、椀に入れて、すましを篩ぎ入るれば、開きて菊の花のごとし、口は、淺草海苔などよし、切りやうは、韮盤目に所謂霰切りに庖丁を入れ、切り放さずにして、淸汁を注けるなり。

(か)蠣の肉あへ　大きなる蠣をさつと湯煮し、目籠などに入れて水氣をとり、梅干の肉へ、白味噌すこし入れて擂り、木くらげ又は割り栗などあしらへ和るにころ。

(よ)金柑のあま煮　きんかんを針にて突き、湯を沸し起て、をり〳〵水を注しながら煠で、水に浸し酸氣のなくなるを度とし、砂糖に味淋を加へ、すこし鹽を入れて煮上げるなり。金柑を菊の形にするには、竪に周りへ庖刀を入れ、煮上げて上下をつまみて押せば、菊の形になるなり。種あらば間より揚子にて取る、口取りのとり合はせなどによろし。

(た)霜の菊　黄菊の花に葛の粉のころもを被けて揚げる。ころもには、白砂糖にすこし鹽を加へ、花の上のみころもの付くやうにするなり。

(れ)松茸飯　あまり御馳走の澤山も、都の方々には等閑ひて、こたびは飯の調理にて、腹のこしらへは御免を蒙るべし。さて松茸飯を味甘く調理するには米一升の中に、猪口に酒を二杯ほど、おなじ分量に醤油を入れて、飯を仕かけ、松茸を短冊にうちて、めしの煮え上がるとき、うち入れて炊くなり。又飯は平常のごとくに焚き、松茸を味淋、醤油にて味をつけ飯を移すとき、をか交せにす

(ろ)椎の實飯　太ひの實をざつと煠で皮を去り、常のめしに少し鹽を加へ、椎の實を入れて、炊くなりける。

即時簡易治療法

(ろ)燒傷の治療　追々に秋風身に染み渡りて、火鉢を抱くあまりに、巨燵など設らへ、寒さを防ぐころともなれり。されば、子供等の折々過ちて、燒傷をなすこと屢々なり。されば、これが用意なくてやは。火傷の時は、種油と鹽とを同じ量に調合し、傷所へ、

塗り附く。あるは、胡瓜の赤く熟せしを、其のまゝ瓶へ貯へ入れ、日を經て水となるを付くべし。

(は)口中の惡臭を去ること。　婦人の身に最も避くべきに、三つのことあり。こを注意して避けざれど、世に交際らふことと叶ふべからず。乃ち、腋臭、口の臭氣等なるが、通常人の最も怠り易きは、口の掃除にてこそあるべけれ。さあらん時は、桐の木の消し炭を粉とし、毎朝及び食事の後に、口中を磨き給へかし。しかするときは、口中の臭氣自ら去りて、歯も亦白くなるべし。

農事の志をり

上旬。　水蘿蔔、小松菜、小麥等の播種、夏葱の根分け等なすべし。

栗、櫟、椎、樫、榧、油桐及び其の他果樹等の種實を採るには、初期後期の者を採るべからず。唯中期の實をよしとす。

又松、杉、扁桐柏、榿其の他用材に供すべき樹の種を撰ぶには、中年にして病なく、直立にして強壯なる木より採るを肝要とす。凡て樹木の種實は、能く熟したるを好しとす。

中旬。　大麥、二年子大根、水葱の播種によろしく、柿桃、漆の種を植うるにも、好き候なり。

下旬。　胡蘿蔔、豌豆、小麥の播種、葡萄の接木、桑葡萄の挿木にも、よからまし。

家禽飼養法

(へ)卵を産むことと止むこと屢々あり。されど、最早飼養せざる老成の雌雄雞を、離ち去るべし。蓋し、四ヶ年以上老成せしむる勿れ。飼養して結果最も十分なるは、二年目の鷄にあり。但し、優等の種類は、勿論この限にはあらじ。

そへごと(前々號のつゞき)

十五日より數日の間、軒に燈籠をかけつらね。美服をかざり。男女おの〳〵くみをわかちて、手を携へて圓きかたちになりふしつけて可笑しく、鄙びたる音頭をとり、舞ひあかして、曉に徹するものを、盆誦といふ。今はもはら田舍にのみれてなはる。

八朔の賀。　これも今は、かいむの姿とやいはん、こは五節句のほかなれど、

月々に月見る月は多けれど
月見る月は此月の月

といひけん如く。この月の月こそ神祭りして見まほしけれ。

酒、芋、栗、葡萄、枝豆等を、月に供へて、後に姫たちが、つれ〴〵を慰むる肴ところ、なるなりけれ。月にして、下界のものを味ひたまふは、此月と三日月とぞかりなりといふ。

重陽の宴。　九月九日は重陽とて、菊の節句とす、いにしへは主上南殿に出御ありて、種々の節會行はれ、群臣詩を賦して奉る。其の後、菊酒をたまひしかや。これを重陽の宴といふにぞありける。五節供の隨一ときく。

二十三日には、秋期皇靈祭にて、春季の御儀に相同じ。

十三夜にまた、月見ありき。

神嘗祭。　これは十月十七日にて、伊勢の大神宮に新穀を奉る祭典なり。蓋し、これ百姓鼓腹の時、主上また畏多くも宮中より、御遙拜あらせらる。

月の初の亥の日には、大豆、小豆、胡麻なんど、七種の粉をあつめて亥子餅を造り、一年の内病をうけざるためとて食ふ、これを亥の子の餅といふなり。この月に降る雨を時雨といふ。紅葉をあしらう景色大によし。

天長節。　四百萬衆、誰たかこれを知らざるべき。故らにこゝに志るすも恐れあり。三日を記臆せよ

(十一月の)

蛭子講。　この月の二十日は、商家にて蛭子講の筵を開き、盛んに酒宴をなして、延喜を祝ひ、商業の繁昌を祈るの習慣あり。こは、蛭子の神を祭るなるが、少彦名神とし申せど、誰人も祭るべきを、農工の徒は、いかにしてこの事なきやらむ。この神を俗に三郎殿と申す、されど太郎次郎の君は、如何にしたまひけむ。よくろの由來を訂しなど「えびす侍ふ」の歌より、誤れりとなん、何ばうをかしき限りならずや。鯛をこよなう好ませ給ふとて、えびす鯛の名あるも、亦をかしかり。さるにても、鈎を呑みたる處は、夙くに、許させたまひけるにか、聞かまほしけれ、この月下旬より、青物屋の店頭に顏を曝すは、紀伊出雲の末孫とかいふ、蜜柑等なり。暖國の生れながら、よくぞれ風召さゞる、これぞめでたき所以なるとか。

學園

わが學園（四）

鹽井正男

古代の歌謠の、自らの句格語脈の、五七調なりし事は、前條に詳しくのべたり。次ぎに、古代の歌謠の、自らなる句格語脈に就きていはゞ、所謂三十一文字の短歌の中にて、一段落のものも、二段落のものもあなれど、そが中にて、一段落のもの最多し。殊に第五の句の末に据ゑたるもの、即ち第五の句の末にて結べるものの如き、なだらかなるが最多し。即ち一首を結べる語が、一首の最末の句、即ち第五句の末に在るものなり。一首を結べる語が、一首の最末、即ち第五の句の末に在りとは、即ち第一句より起して、第二句、第三句、第四句と、語脈句格の順々と、なだらかに引き續きて、流水の高きより低きに赴く如く、上下相つぎて、第五句に至り、一首の意を結びたるをいふなり。五言七言五言七言七言の五句の中途にて、文の切れざるものをいふなり。例へば、一二首の例を示せば、

「あか玉はをさへひかれど白玉の
　君がよろひしたふとくありけり。」
「やくも立つ出雲たけるがはける大刀
　つゞらさはまきさみなしにあはれ。」
「みちのしりこはだをとめを神のごと
　きこえしかどもあひまくらまく。」
「夏虫の火虫の衣二重きて
　かくみやたりはあによくもあらず。」
「おしてるなにはの崎のならび濱
　ならべんとこそその子はありけめ。」
「やましろの筒城の宮にもの申す
　わがせを見れば涙ぐましも。」
「やまとべに見がほしものはおしのみの
　この高木なるつのざしの宮。」
「山川に鴛鴦二つ居てたぐひなく
　たぐへる妹を誰れかいにけむ。」
「もとごとに花は咲けどもなにとかも
　うつくし妹がまたさきでこぬ。」
「あすか川みなぎらひつゝゆく水の

間もなくもおもはゆるかな。」

いまきなる木むれが上に雲だにも
しるくしたゝば何かなげかむ。」

斯の如き姿のものにて、順々たるなだらかなる句調のものなり。なだらかなるは、耳に聞きよく、おだやかに優美なればなり。古代の歌謠は、皆謠ひたるもの故、耳に美しう響くやうなる聲調に、自ら傾きたる事は、誠に然るべき道理なり。長き歌にも、斯の如く、なだらかなるが聲調のもの多し。一々あぐるは、煩しければ、長きは略けり。されど、春風の嫋々たる、秋風の瑟々たる、松籟の稷稷たる、流水の潺々たる、其の聲調は、各異れりといへども、其の風韻は、いづれも、おもしろく妙へなり。歌とても自ら然り。句調は異れるも、うたうて妙なるは、幾種もあらむ。妙音美聲にきこゆる句調は、斯の如き一段落の歌のみにはあらず。故に、おなじ一段落の歌なれども、此の第五句の末にて結べる調のみにあらず、中途にて句の切れたるあり。例へば、

おきつ鳥かもどく島にわがいねし
妹はわすれじ」夜のこと〲も。

の如き歌にて、これは第四の句にて、一首の意を結び第五の句は、通例の詞の順序にては、調子のよからむ爲めに、語の都合より、上におくべきを轉倒して、末に附けたるなり。即ち「夜のごと〱も、おきつ鳥、かもどく島に、わがいねしいもは忘れじ」とあるべきが、普通の順序なれど、語調のため、且ッ嘆息の意を強くして、餘韻を多くせむために、殊更に「夜のこと〲も」と、末に置きたるなり。

また第四句にて結び、第五句は、唯上に在りたる語を、再度繰りかへしたるものあり。例へば、

八雲たつ出雲八重がきつまごめに
八重がきつくる」その八重垣を。

朝霜のみけのさをばしまへつ君
いはたらずとも」みけのさをばし。

ぬば玉のかひの黒駒鞍きせば
いのちしなまし」かひの黒駒。

の如き姿のものにて、第四の句の末にて、一首の意も語も結ばれたり。されど、それのみにては、末の方つまりて、なだらかならず、句調苦しげなれば、流調にせむために、第五の句に、一首の主要ともいふ語を繰

り返へして、調を調へたるなり。此に擧げたる歌、皆然り。第一の歌を見よ。八雲たつ出雲八重がきつまごめに八重垣つくるにて、一首の意は結ぼれたり。而して、それにては、末つまりて、もの足らぬ故に「その八重垣を」と、主要の語を繰り返へして、調を整へたるなり。其の他も皆同樣なり。

此の外一段落の歌には、第二句にて結び、第三第四第五の句は、上に置くべきを、殊更に轉倒して、下に置けるもの、又唯に主眼の事物を形容して、繰りかへしたるものなどあれど、極て稀れなり。

次には二段落の歌あり、其の中にて、第二句と第五句とにて二段落をなせる歌、最多し。例へば、

「衣こそ二重もよき。」さゆだこを
ならべむ君はかしこきろかも。」

ひらがたゆ笛ふきのぼる。」近江野や
けなのわく子が笛ふきのぼる。」

わがせ子が來べきよひなり。」さゝがにの
くものふるまひかねてしるしも。」

此の外、古代の短歌の狀態には、第三句にて結べるもの、段落を成せるもの、休息せるものゝ決して無き事は、前號の紙上に、古代の歌謠は五七の調なりし事をへいる所にいひたれど、更に新しうはいはず。

また古代の歌謠には、同韻、同體言、同働詞、同形容詞を繰り返へす事頻りなるは、前にも數多ひき出でたる歌を見給はゞ明なれど、これも新しうあげず。甚しきは、同じやうなる句を繰りかへして、五句三十一言の短歌となせるものさへあり。例へば、

やまとべに行くはたがつま」こもりくの
したよどへつゝ行くかたがつま。」

などいふあり。これ屢いへる如く、古代の歌謠は、必ずうたへるものにて、聲調の耳に面白からむ事を欲したればなり。

古代の歌謠には、起句にて結びたる歌なし。起句にて結べるは萬葉集にも無く、古今集にも稀れなり。併るに、新古今集の頃に至りては、初めの句の末にて、結び切りたる、世に首切れ歌といふものさへ出でたり。例へば、

又や見ぬ」かたのゝみのゝ櫻がり
花の雪ちる春のあけぼの

と、俊成卿が攝政太政大臣の家にて、五十首の歌よ

みける時の歌の如く、或は、攝政太政大臣が歸鴈をよめる歌に、

わするなよ」たのむの澤をたつ鴈も

いなばの風のあきのゆふぐれ

或は、上東門院の小少將の歌に、

かはらじな」志るも志らぬも秋の夜の

月まつほどのこゝろばかりは

などいふ姿にて、句格を轉倒して、起句にて一首を結びたり。かゝる句調の歌は、決して古代には見えざる所なり。

また古代の歌謠には、懸詞といふもの、殆んど無し。懸詞とは「ふし柴のこるばかりなる」「梓弓はるの山邊を」「我戀にくらぶの山」「音にのみきくの白露」「今はの心ありあけに」「あら小田をかへす〴〵も花を見るべく」などいふ風のものにて、刈ると凝ると、張ると春と、聞くと菊と、心ありげと有明と、荒小田を鋤かへすと返へす〴〵見るとの如く、詞の緣によりて、互に引きかくる事なり。萬葉集には、まれ〳〵にあり。假令ば、四の卷に筑前椽門部連石足といふ人の歌に、

みさきわの荒磯によする五百重浪

立ちても居てもあがもへる君

とある「立ちても」の語は、「浪の立つ」といふ語と、起居のたつとを引懸けたるなり。又同卷に大伴家持卿の歌に、

此の處にありて筑紫や何處白くもの

棚引やまのかたにあるらし

も、又「知らぬ」といふ事と、白雲のしらとを引き懸たる跡ありげなり。

この類、かづ〳〵見ゆれど、皆上なる三句の中にあり、下の句には見えず。これは、やゝ調子に由來せる所もあらむが、歌が事物を歌ふにあらで、唯詞を歌ふやになりてより、盛に流行し出でたる技術ならむ。故に、中古以來、歌が單に詞の上の技術となりてより、此の細工、殊にいやまし盛になれり。古今集に數十首あれど、

我せこが衣はるさめ降るごとに

野邊のみどりぞ色まさりける

おもふことは雲井はるかになる神の

音にきゝつゝこひわたるかな

秋野のに人まつ虫の聲すなり

　　われかとゆきていざとふらはむ

の如く、多くは上の三句の中にありて、折り〳〵は

　春日野の若菜つみにや白妙の
　　袖ふりはへて人のゆくらむ

の如き、下の句の中にあるあり。これ萬葉の頃と異なる所なり。而して新古今集の代に至りては、實に甚しく、

　秋を經てあはれも露も深草の
　　里とふものはうづらなりけり
　蛩なくや霜夜のさむしろに
　　衣かたしき獨りかもねむ
　時わかぬ浪さへ色にいづみ川
　　はゝその杜に嵐ふくらし
　夏草のかりそめにとてこしかども
　　難波のうらにあきぞくれぬる

の如き、上の三句の中に懸りたるも多けれど、又

　春にのみ年はあらなむあらを田を
　　かへす〳〵もはなを見るべく
　なれ〳〵て見しは名殘の春ぞとも
　　などしら川のはなのしたかげ
　花ならで唯柴のとをさして思ふ
　　こゝろのおくも見よしのゝ山
　雲をのみつらきものとてあかすよの
　　月は木末にをちかたのやま
　うつらふは心のほかの秋なれど
　　いまはよそにぞきくの上の露

の如き、下の二句の中なるも、多くなれり。古事記日本紀萬葉も、舊きには、決してかゝる細工めきたる技は見ざり、中古以來は、これを無上のあやのごとく心得て、つとめてめづらしき懸詞を巧みむと、起きては思ひ、臥しても案んじ、焦心燃思、たま〳〵新奇なるを得れど、自らもあつぱれとほこり、人も又めでたきものにいひはやし、上東門院の女房の加賀といへるは、

　兼ねてより思ひし事をふし柴の
　　こるばかりなるなげきせむとは

とうたひて、「ふし柴の加賀」とて、よびはやされ、うたひはやされたるばかりの姿となれり。もしも人麻呂赤人などの出で來りて、まのあたり見たらむには、いかばかり驚きやしけむ。

漫錄

頼宣卿母公養珠院夫人深慮の事

板倉伊賀守勝重の物語、紀伊大納言頼宣卿御母儀は、ゐまん殿、駿河にて判團右衛門事を聞及び給ひ、御子達に寶物太刀を進るは常の事なり、大將の寶と云ふは名ある勇士なり、團右衛門は古主に被レ搆奉公不レ成共、世中若何事も出來候はゞ、能士なれば一人にても、いとほしき御子に進せ度物なれど、團右衛門義常陸介殿家人に可被成とて、御鏡代金とて金五百兩宛每年御拜領金を、二百兩宛團右衛門に御合力有たるとなり、家康公に奉公被レ成紀伊大納言殿を生給ふ程の人なれど、女儀にてもかくの如くの心入也。（武隱叢話）

龍造寺周家後室再嫁の事

弘治二年丙辰、隆信公の御母、（後號二慶誾妙意大姉一）自ら公の御父駿河守清房䢴の舘に入來られ、清房に嫁せらる、此女姓は龍造寺刑部大輔胤和の嫡女六郎次郎周家の後室大方殿と申して、頗る賢女にて御座す、然るに今此儀に及ぶ事何故ぞと尋るに、大方殿倩思はれけるは當時亂世の最中なれど、器量の人を得て隆信の股肱と不レ爲ば、中々當家大功を立つる事難かるべし、されど此日慮て一門他家の中、其人を鑑るに鍋島清房の二男左衛門大夫に越したるはなし、幸清房近年妻女に後れてやもめ也、所レ詮自彼家に入りて清房に嫁し、隆信と左衛門大夫を兄弟の緣になし、龍造寺の大功を立てんと思はれける故とぞ聞へし、公十八歲の御時なり、元來公の御母公（號二花溪正春大姉一）は隆信公の御家の御姉にて、隆信と直茂公とは御從弟也、公御若年の頃より、專ら人を御惠み世を救ふの御志深くましくける故、諸人思付奉る事大方ならず、御一族中も兼て褒賞せられしと也。（三德譜）

四民の文

故人　加賀の千代

千代は加賀の國松任の驛の民の妻にして、俳諧をも

て名あるは、世の人の知る處なるが、そが貞操たゞしく學識ありて、まことに一個の女傑たることは知らぬ人もありぬべし。そも千代が、如何に尋常の女子に優れたりしかは、此文によりて窺ふべし。今は四民の階級こそなけれ、よく此文を味ひなは、妻たるもの丶心得大よそ此外には出でじとなり。此心得ありて後、始めて俳諧その他の藝にも遊ぶべきなれ。

四民の世に立つそれぐ〜の務あり、男に四民あれば女も亦然り、士は亂れたる世に、逆ふを伐ちて靜謐をなし、治まる世には暴を禁じ賊を誅し萬民を安堵なさしめ、文武を以て治亂に處したまふ君に近侍し、共に其事にあづかる故三民の上にあり。されば士の妻たり女たる者は、風俗、髮貌、立居、振舞、言葉をたしなみ、人柄よくあるべし。形態の婀娜たるを好むべからず、悋氣の心はその身の愧なるを辨へ、夫に心得違あらば詞やはらかによりく〜諫め、万一不幸にして危難ある時は、身命を惜まず舅姑夫に先だち、貞烈の操正しく、いかにも士の妻ぞ女ぞといはるゝ程にありぬべし。

農は、其業賤しといへども　上御一人（　天皇をさす）より下諸萬人の食を作り出す故に、次序工商の上にあり。その妻たり女たる者は、養蠶機織の事は云ふもさらなり、晝は野先の餉を持運ひ、夜は月下に衣を擣ち、粗飯粗服し、耕作の業盛なるときは、夫と共に朝の風に梳り夕の雨に浴し、霧を犯し霜を踏みつゝ粒々の辛苦を手づたふなれば、丈夫も及ばず疲勞すれども、毎毎打開きたる曠野山水の絶景を眺望し、氣樂なる世渡りなれば、心も悠に、おのづから長壽を保つべし。農家には、先祖やんごとなき人の裔、代々連綿として筋目正しきも多し、質素を本とし奢侈なく、女法の風俗うつり變らぬやうに、子孫遠長の相續を心とすべし。工は、食と衣と住との三。なくて叶はぬ最第一その住を職とし、神佛の宮殿樓閣帝王の御座。貴人高位の居所を造り作すものゆゑ、商の上にあり。商は金錢の利を積みて産業をなす故、下にあり。工商の妻となり女たるは、稼は夫に任せ、内を治むること肝要なり。物かき縫針の心がけは、定まりたること、間ある時は、算數も覺ゆべし。内を治むるとは、家事の取締り、弟子奉公人の取扱ひ、師弟主從の間武士と違ひ、嚴密に過きなば、却て渡世の妨も出來るべく、忽にすぎては、

不慮の損失もあるべし。上下其家業を出精し、其々利潤を得て、家名を長久に傳ふることを思ふべし。豪富の家たりとも、奢侈超え過ぐることは、衰微す、况んや、其下には、分外の美食、美服せず、雜費失墜を厭ひ、町家相應の形態を旨とし、妓女傾城の風俗を禁すべく、朝寐すべからず。毎日の掃除に念入れ、夜は火の元別して大切に、みづから見まわるべし。下々を憐み、他人への挨拶愛相よからんは、繁昌の元たるべし。四民の外に、遊民あり、其妻たり女たるものは、假令藝能ありて當時の世渡りに差支へあらずとも、子孫へ傳ふべき定まれる職分家業なきは、孟子といへる書に恒の產なしといふもの是なり。夫にも勸め申し合はせて、何なりとも、家職を取立て、四民の中に列ならんとねがふべし。みづから今俳林にありて、所謂遊民を友とすること多し、憶ふ處ありてこれを誌す。

をしへ草（一）

雨後の翠嶺

古人の文の、詞に意に、面白くあはれにればねたるもの、是れ彼れ讀むにまかせて、寫し取りて、文箱に納め置きたる物、何時しか山と積まれて、今は文箱にはゐ入らずなりぬ。いたづらに蠹魚の住家を造らむは、くちをしき業なるに、かつは其が中には、姫たちに、一度はきかせまほしき教へともなる文多けれど、末每に、おのれが心をも添へて、一は姫たちが、文かく爲めの手本ともなれ、一は姫たちが、朝夕の心の教へともなれと思ひて、此處に女鑑が餘白をかるなり。

自然の樂

内の樂を本とし、耳目を以て、外の樂を得る媒として、其の欲になやまされず。天地万物の景氣の、うるはしさを感ずれど、其の樂限りなし。この樂、朝夕つねに、目の前にみち〳〵て、あまりあり。これを樂める人は、すなはち、山水月花のあるじとなりて、人にこび求むるに及ばず、たからもて買ふにあらざれば、一錢を費さず。心にまかせて、擅にとりて、用ふれども盡きず。常にわが物として、れうすれども、人いさかはず。如何となれば、山水風月の佳景は、もと定まれる主なければなり。かく天地の內、きはまりなき樂をしりて、たのしめる人は、富貴の驕樂をうら

やまず。ろの樂み、富貴にまされどなり。この樂を知らざる人は、樂しむべき事、目の前に常にみち〳〵て多けれど、其の樂をえらざれど樂まず。世俗の樂は、其の樂いまだやまざるに、はやく我が身のくるしみとぞなる。たとへど、味よき物をむさぼりて、恣に飲みくはゞ、はじめは快しといへど、やがて病れてりて、身の苦みとならんごとし。凡、世俗の樂は、心をまよはし、身をそこなひ、人をくるしましむ。君子の樂みは、まよひなくして、心をやしなふ。外物を以ていはゞ、月花をめで、山水を見、風を吟じ、鳥をうらやむ類、其の樂淡けれど、終日たのしめども、身にわざはひなく、人のとがめ、神のいさむるわざに非ず。この樂、貧賤にしても得やすく、後のわざはひなし。富貴の人は、其のをごりをうたりにすさみて、此の樂を知らず。貧賤の人は、此の二の失すくなし。志だにあれど、此の樂は得やすし。

これは、貝原益軒が、樂訓にいはれたる文なり。花鳥風月山水草木など、何にても、自然の景色、自然の物色を樂しむべし、自然の樂みは、益ありて害なきよしをときたるにて、誠によくいはれたり。すべていはれたる條々、皆、道理ふかく、姫たちが敎へとすべき言の葉なり。誰れは無く、國のため、君のため、世のため、人の爲め、親のため、子のため、一かどの業をいろしみて、あつぱれ恥かしからぬ御國の人と成らむと思へど、自ら心身をいたましむるもの少からざらむ。人は氣力に体力に限りあるものにて、これを養ひ慰むるの道を知らずど、何時までか、よく久しく、いろしみの業に堪ふべき。されど、人は樂みといふ事、また必要なり。且つ樂み且つ勵むといふやうせでは叶はじ。樂みといふ事、やうなしと爲す人は、反て、勵むべき道を知らざる人なり。我心を樂ましめ、我身を慰むべき事にまれ、物にまれ、つねに生路の伴とせざるべからず。されど大かたの世俗の樂みと爲す所の物は、害多くして益少し。故に、せつかく心身を慰むべき樂みといふべきものが、反て、心身をやぶる危險なる物となりて、樂みが樂みたる効能なくて、くちをしきものと成りはつるなり。故に害なき、危險なきものを、樂みとせざるべからず。世俗の樂みの害毒の、甚しきに至りては、これを得むが爲め、これを遂げむが爲め、これ

を滿足せん爲め、不德義といふ人間外の魔界にさへ、墮落しはつるに至るものなり。自然の樂みといふものは、斯の如きあさましき弊害は少し、且つ自ら人の思想を、高尙の域に進ましむるものなれど、生路の伴とせむには、此の上なき樂みなり。されど、これとても、樂みの樂みたる本分を、うち越えて、餘りに過ぎたる際に馳せては、遂には、徒らなる風流の才子とて、國家には、やくたゝぬ者となるべし。それなくど自然を樂しむといふ事、人の樂みが中の、此の上なきめでたき樂なり。

今一ッ次手なれど、姫たちにすゝめむと思ふ樂みにこそあれ。そは、家族團欒といふ樂みなり。祖父祖母ましますど、それはもとより、父母、兄弟姉妹、むつまじく團欒して、互に恙なき有樣を見て、樂しむといふ事なり。春のあした、秋の夕べはいはずもあれ、夏の日は、夕風すゞしきすのこに、冬の夜は、けはひあたゝかなる埋火の邊りに、うちあつまりて、四方八面の物語り、何となく語りあふ時は、花の色月のかをりも、一際おもしろく、暑さも寒さも忘られ、苦しかりし事も、つらかりし事も、悲しかりける事も、忘れに忘られて、朝夕の營みの、自ら面白くおぼえて心の自ら進むものなり。人といはるゝ社會には、是非ありたきは、此の樂みならむか。

盲女の勸業

臨井ふく子

清女の才、紫女の德には及ばずとも、せめては其色香の末ばかりはと思ひわづらへど、生れながらの才の拙さ、文綴ることはさて、讀む事さへたど〱し。せめて書くのみはとおもひて手習へど、それもはか〲しからぬかなしさよ。心短くてはとて、おもひ返しては、筆を取り、形容あらためては、机にむかへど、さても鈍きは何處までの身なるらむ。露ばかりも、こゝろに似ざる筆のあと、なほとてたどりわづらへど、一わたりもえ進まず、げにわが身ながらあきもはてたるや、さはいへ、今一度筆とりてむかへど、人の筆はげにめで度、人の文はげにかしこくて、已れの拙なさのいよいよ見られてかなし、あな口惜しや、やみなん〱、猿はいづくまでも猿なり、深山にありて木の實拾ふこそ分なれ、なまじひに人にまねびむとて、鋏をもちて、

爪を取るをあやまりて、指を切りなどして、おろかなるたとへ草にひかるゝなどのあさましさ。燕雀もまた鴻鵠をまねびんなど思はで、田に、畠に、ひゑを食み、こぼれたる稲穂にてもひろひたらんがよし。さなりさなり、身のほどをも思はで、徒らに天にのみ上らんとれもひて、龍の髭にすがりたりとて、遂には海に落ち入りて、弓を抱へてなきまどう事などのあらむよりは、とう／＼やみなん。さるにても、日來力を入れさせたまへる兄の君の、今にしも歸りこされなど、最早此處にこれかぎり志を斷つよしをつげなむ、風ふく朝、雨ふる日、雪ふる夕、倦まず、たゆまず、通ひもし。暑き日、寒き夜いうしき折、はたいたづきをもおして敎もせられし師の許にも、今日はいゆきて、きつと思ひを斷ちにし事を述べ來ん。文も筆も今は用なし、とくとくかいやりすてむとおもひ、文庫ひらきたるに、ふと目に遮ぎる明治孝節録といふ書物、こはいつか友よりかりこしものなり、かく思ひ決したる上は、これもまた用なし、いで／＼友許ゆきてかへしこむとて投げ出だしたりしに、はからずも、盲女の勸業といふ處の披らきて、ふと目に入りたり、さすがに、如何なる事か、名殘りにとて讀みたりしに。

奈良縣大和國式下郡爲川村に住みける永井佐平といふもの、女、ゑかと云ふもの、幼稚の折り疱瘡を煩ひ、兩眼とも見えずなりたり、生ひたつに隨ひ、これを歎きて、縫ひ針のことを學び、一心に心を用ひしつのから、數月にしてろの綱領を習ひ覺え、日を追ひ、月を越えて、遂に業に熟し、平常之を以て活計をたてたりといふ。勉强だにすれど、癈疾の者とてかゝるものを、なみ／＼の人は、決して徒らに四支を老せしむるなかれと記しありたり。實に心を入れなど、不具の者とてかゝるものを、五体も足らぬ所なくつくられたる身が、たとへ拙けれども、此處にかくて止むべき事やある、いで／＼かなはぬまでも今一入勵みなむ、勵みて倒れむ、倒れて後にやまむ。

高輪の月

二十二木生

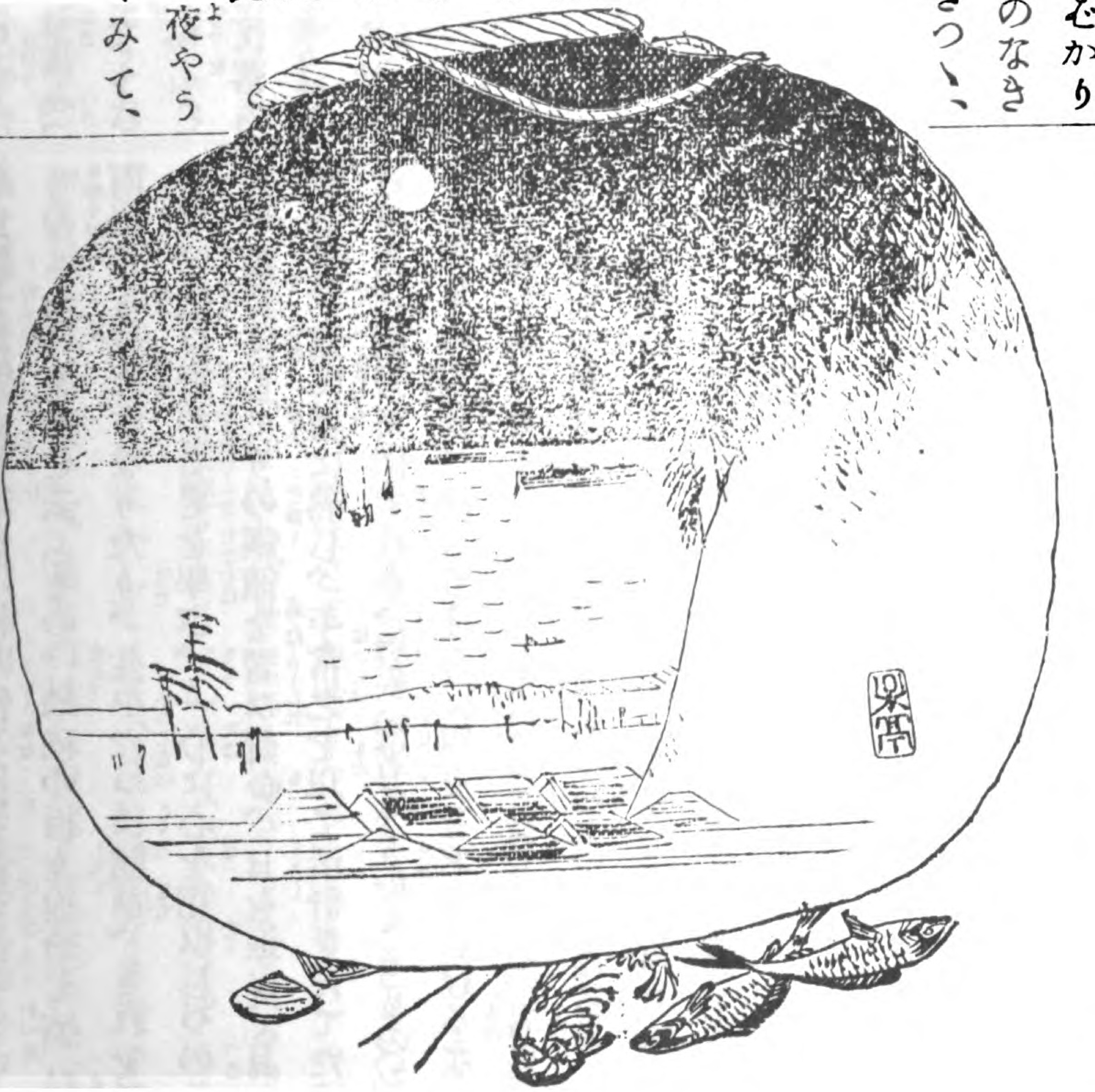
花に、月に、春秋のながめをかしき處のたはかるなかに、とりわきて、墨田の花と、高輪の月とは古より名

高くぞ世にきこえし。ことに、海邊なる泉岳寺といふ寺に、四十七士の骨を埋めしより、月もいかばかりの光を添へにけむ。蟲の音きほふ秋の夕、義士のなき跡をとぶらひて、こゝろに涙を千草の露にそゝぎつゝ、かくなむ。

ありし世の昔をかたるこゝちして
　をかべの松にあきかぜぞ吹く

かへるさ、門前の小高き丘の上に、穂に出でたる尾花の人を招くに、見すてがたくて、のぼりてながめけるほどに、いつしか月もいでぬ。總房のやま〳〵、烟の外にたなびきて、夢よりもあはく、水の面いとあきらかにして、波間にうかべる砲臺も、さながら畫けるがごとく、すみわたれる大空に、羽音たかくして、なく聲はせぬ一つらの雁の、とびさりて、遂にそのゆく處を知らざるなど、をかしさ言はむかたなきに、夜やうやうふけ行きて、行く人も絶え、車馬の音もやみて、心ます〳〵すみわたりぬ。

もゝしきや都のそらもすみよきは
　そでがうらべの月夜なりけり



おく露のしげきをいとはず、ふく秋風に袂をひるがへしつゝ、歸る空もわすられてなむ。

観月宴

井上頼文

八月十五夜の月の光りは、今古をおしてらして清くもさやけき事は、今さら云はむもおろかなりや。されど、孝元天皇は今宵の月を愛でさせ給ひて、諸〱の上卿を召させられ、歌をよましめ賜ひ、又、源氏物語、須磨の巻に、月のいと花やかにさし出でたるに、こよひは十五夜也けりとおぼし出で丶、殿上の御あそび戀しくところ〴〵ながめたまふらんかしと、思ひやり給ふにつけても、月のかほのみまもられ給ふ、ともあれど、往昔はやくさるかたの御宴ありしこと思ひやるべし。俗間にはおしなべて、家々團子を調じ、御酒、薄、紫菀などの草花を机にすゑ、又、芋をむゆで丶備ふるならはしあり。

元禄の頃迄は、今夜三つ股の月見とて、大小の船にて、大川へ出で樂しめる事あり。今夜に限り、官より許るされて花火を打あげなどせしが、享保の頃より此事や少くなりしとぞ。近比はおのが家ながら、親しき人人と心の底を汲みかはしつ丶、さやけき影を盃に浮べて事足れりとするもあり。又は歌よみ、詩つくりかはし、糸竹を調べ合はするなど、いづれか樂しからざらん。或は家よりうかれ出でては、河中に舟をうかべ、公園にあそびありくなど、皆、是こよひの月のおもてにそむかぬ心すさびなるをや。

美術展覽會につきて

貫堂子

美術といへる文字は、古くは、聞こえざりし文字なれど、老人などは、いかなる意味のこもれるものなるやは、くはしく知り得べくもあらず。たゞその文字の意義より推しはかるときは、何ものによらず、もの丶奇麗をつくし、巧妙をつくし、人の細工のあらむかぎり、技能のきはみをつくしたるもの丶、意匠も、製作も、みなおの〳〵のたくみをこらしたるものは、すなはち、いはゆる美術といへるもの丶類なるべくおもはる丶なり。か丶れど、翻譯の語にて、美術といへるなるべし。美といふことは、西洋などには中々むづかしきわけを付けて、その解釋は容易ならぬこと丶聞けど、もとよ

り、日本かたぎの老人の、しひて調べ見むともおもはぬことなり。たゞわが國のみひとりすぐれて、世界に比なき技藝、製作品の、太古より、代々のうつりかはりにつれて、進みも衰へもしつゝ、この明治の大御世におよびて、大に發達のさまをあらはしゝことのあらましを、代々の歴史につきて、うかゞひ見るにつけて、時々、思ひよることと、また、はなはだ多かりき。

今年も、はや、十月となりしかど、例の美術協會なる繪畫展覽會も開かれぬ。老人はいまだ往きて見ねど、ことしの出品のいかに多く、いかによからむかは知らねど、兎にかくに、この度は、博覽會の餘響にて、いと盛なるべしと傳へ聞きぬ。

この展覽會のことにつきて、老人、かねてより、思ふやうは、いつも、この展覽會に出品するものゝ大かたは、繪畫にて、そのつぎは、漆器、まき繪のたぐひより、彫りもの織りもの、やきもの、鑄ものゝたぐひなり。しかるに、その中、繪畫は、もとも多きゆゑに、春秋二期の中、繪畫は秋期のみに定められ、春期には、ぬりもの織りものその他を陳列せらるゝことゝなりぬ。かゝる事情にて、おしはかるにも、繪畫の、たやすくして、しかも多數の人の學びもし習ひもすることを知らるゝなり。

かくも、多數の人のものするは繪畫には、いろ〳〵の趣味ありて、自然に心の慰めともなれるものなれど、畫家の中にも、男子のみにかぎらず、女子のいと多くまじれるは、このわざの、女のやさしき性質にいとよくかなへるなるべし。

かく女子にてもはやさるゝ繪畫こそ、大にすゝめて、ひろく婦人の手藝の一つとせまほしけれ。すべてのものゝ、形つくりより、かざり、色どり、摸樣の品さだめなどは、みな、畫心のはたらきより、意匠の出づるものなれど、一家の主婦となる人々のためには、直接にも、間接にも、かならず必要なるべし。

ある人は、いはく、「すべて、美術とは、奢をすゝむるものゝ張本なれど、決して、世の中にて、もてはやすべからず。また、女子などには、ことにすゝむべからず。」などゝ心配するもあれど、これは、あまりに極端の論にて、老人などは、さまではまりこまぬ心得にて、これをすゝめむとするなり。こゝろみに、考へみたまへ、一枚の絹に畫をかき、思ふまゝに、その筆をはこ

なし、染色、もやうなどの、高尚にして雅致あるやうに出で來たらむには、いかに、こゝちよからずや。

（つゞく）

笑ひぐさ（二）

柴刈翁

理屈

やくにたゝぬむすこ飯を喰つては二階へあがり一日寢てばかりゐるゆゑ親父大きに腹を立てやい〳〵悴われはまアめしを喰つて寢てばかり居るがろのやうに身を持たれもひやられたものじや何か役にたつことをして錢を取ることを考へてみろ悴「わたしも錢をもふける事を此の間中から考へて居ます親「めしを喰ては寢へ〳〵して何か錢もふけに何か錢儲けになられるものだ悴「責めて牛になつて車でも引きませうかとぞんじて

小言しなん所

さる處に小言指南所といふ看板かけし内ありすいきやうものこれは珍らしひことと少々こ言を習はむと玄關にかゝりおたのみ申ますといへば内から弟子が出てハイ「どなたでこ座ります八「わたくしは近所の者でござり升先生おやどならば今日より御弟子にならうと存じてまゐりました弟子「これは〳〵ようお出先生内にてござるさわ〳〵座敷へ御通りなさりましと座敷へ通す先生出むかひ八に貴樣は何しに來た八「今日より御弟子にならうと存じて先生「何おれが弟子になりに來たぶしつけ千万なぜ一年も二年も前に約束をしないでさしつけがましいなぜつゝかけて來た其分にしておかれぬりよぐわひもの手打にすると刀をひねくる故八「膽を潰ぶし是はけしからぬ氣違ひと腹を立此のべらぼうめ何しに一年も二年も前に約束をするものだ敎る事がいやならばそれろはらぬぶんの事先生かといへばいいかと思つてつきあがりのしたべらぼうやらうめうぬに手打になつていゝものかたわ言つくとふみころすぞよと立ちあがると先生「おちついた顏にてよほど御下地が見ゑます

日和

新八さんあすは大師河原へゆかふとおもひますが天氣はどふであらう新「あすはきはめてふりなす〳〵客「是はめうだきつこ降るうけやいか新「きつと降る請負ました客「サテ〳〵大丈夫なうけやいどふしてきつとふ

るとおしやいなさると　新「はてわしがけさてむもんどを食て見ましたか大氣にわかけでござりました

長命自慢

百五十歳になる親爺わしは六百七十歳になるがまだ足も腰も目も耳も何もかも達しやとおまむにて噺すゆゑ若衆寄合ゐれやぢさんろんなら昔の軍のあつたのをしつてゐ出なさるか　親爺「夫れを知らゐでよひものか八島檀の浦の戰もよく見て覺て居ます　客「中々軍を見ることはならぬものときゝましたがよく怪我もなく見られたの　親爺「ろつとのぞひて見たがさて／＼をろろしひ事さ　客「ろれはどうしてどこで　親爺「淺草のからくりで

九十九髪

大町桂月

（三）

兼ねてより繁く申込みのありし縁談の、兄の病氣につれて、しばしはとだえたりしが、病氣の癒ゆるにつれて、また繁くなりぬ。もとより學問なく、女の道も辨へず、また見目形とても、いたく人におとりたる妾の身の、如何にして世の人には知られたりけむ。いろいろのつて求めて、言ひ入れられし人、いくそばくといふことを知らず。數ならぬ身をかくまでと思へど、人の心のうれしからぬにはあらねど、天にも、地にも、唯一人の血をわけたる兄君と、心細くも相依りて、わけくれ、しばらくも相離れず、なぐさめつ、また慰められつ、氣兼ねもなく、氣苦勞もなく、かたみに心打明けて、いとむつまじく樂しき月日を送れる蓬生の宿の生活の忘れがたく、もとより一生兄のかゝりうどゝなるべくもあらねど、せめて、兄嫁の來させたまふまでは、たゞ此儘にてと、兄君に願ひけれど、兄君もまた、そなたは、女の年頃を過ぎたりといふにあらねど、あながちに急がずともよし。心しづかにさがしなど、心にかなふ人もあらむとて、おほかたの縁談は、ことわりけり。

ことわりたれど、なほ繁げかゝりける縁談の中に、二度ならず、三度ならず、申込のありしは、さる華族の若殿の、年は二十六歳、學問も心柄も世にすぐれたる人物、財産は三十万圓の公債に、地所が幾千坪、舅姑は





あれど、子に甘くて極人の好き御方、別に小舅小姑は一人もなしなど、めでたき箇條ならべたてたるが中に、器量を見込みての所望なれど、別に身の拵へは入らず、裸のまゝにて十分と、媒介する人の口のすべりたるに、兄君はや氣に入らせたまはず。われは色を以て妹を賣らず、器量好みする人は賴母しからず、たゞ人は心の持ち方が大事ぞや、爵位も財産も何かせむ。そなたは如何にと問はるゝも、妾も亦か思ひ侍るとて、この縁談もことわりぬ。

縁談はなは絶えざるが中に、前妻に死別れて一人の子はあれど、年はまだ三十路を二つ越したるばかり、さる役所の高等官にて、世の聞えもよく、財産に不足なく、夫にして不足のなき當世の紳士と媒介する人あれど、さる名高き學校の先生の、父祖傳來の財産とてはなけれど、月々の俸給あまりありて、年猶はわかく、將來望ある學者とふれ込む人もあり。また、嫁入するが厭なれど、此方より五千圓持參して入聟にならむなど、思ひもつかぬこと言はるゝ人もありたれど、たすきにすれば長く、襷にすれば短しとの世のたとへに洩れず、みな兄君の氣に入らで止みぬ。

兄君の常に言はれけるには、幸福といふものは、心にありて物にあらず。世の中の上を望めばはてなく、下を望むも果なし。足ることを知れば、草の菴も、現世の淨土にて、あかぬ心の煩悩に苦しめば、金殿玉樓もさながら針の席ぞや。また昨日の淵は今日の瀨と變はる世の中に、いかでか金銀財寶の常なるべき。よしや爵位はなくとも、財産はなくとも、心だに誠の道にかなふ人ならば、われは好んで妹聟にせむ。そなたもまた喜んで夫とすべきなり。

二親には死別れて、賴みとすべき親類もなく、天にも、地にも、血をわけたるは唯一人の妹の、そなたの身を遠くへは離してやりたくなく、財産を分ちて義兄弟を迎へんかとも思へど、小糠三合持つたら養子に行くなと、たとへもある世の中に、碌なものは養子には來らざるべし。されど、たゞ心に愜ふ誠の人を求めて、嫁にはゆくべきなり。

夫婦は一生を共にすべきものなれど、はじめによくその人を擇ばざるべからず。互にいやと思ふ人と一生を共にすべくもあらず、世をはゞかりてうはべは夫婦にてありたりとて、何の樂しきことかあるべき。わが國

にいとふべき離婚の多きは、はじめよくその人を擇ばざるに基づくもの多かるべし。寫眞のやりとりや、見合ひ位にてはその人はわかるべくもあらず。もとより西洋風の自由結婚はいたく厭ふべきものなれど、天保氣質の親だちが禿げたる頭の内に一人合點して、これはと思ひ込んだる先入が主となり、いとしと思ふ心のひがめに、痘痕も笑靨と見ゆるまゝに、無理に强ひて娘をやるが如きは、或は不縁のもとゝやならむ。われは、よろづ相應しき人をさがすつもりなれど、たゞわれのよしと思ふばかりにても行かず。そなたも遠慮なく思ふ所をのべよと、いとねもごろにさとさるゝ言葉のはし〳〵、いよゝ身に浸みて、常に答ふる言葉よりはさきに涙のこぼれける。

ある夜、兄君、他所に出でゝ行かれけるに、十時頃歸りて、いつになくわらはの顏をそろ〳〵と見たまひけるが、やがて机によりて、物の本をもひもときたまひけれど、夜も更けたるに、少しは休ませたまはずやとて、急須もち出でたるに、いとにこやかに此方を振り向きたまひて、茶のほしく思ひ居たるに、よくこそ氣の付きたれ、とて、茶飲茶碗とりあげて呑み干したまひ、今一杯と云はるゝに、たぎりたる鐵瓶の湯を急須にうつしてつぎまゐらせけるを、手にとらむとはしたまはず、いとよろこびしげに眺めながら、これ玉や、そなたもよく知りつらむが、多かる我友達の中にてまことの人といふべきは、獨り川田清忠氏のみなり。勉强家にて席順は常に一番なれど、學校のことのみ勉强するにあらず、妄りに贅口はたゞかざれど、理にさとくて、あげつらふ時は、その言葉によどみなく、情あつく、義にいさみ、さわやかにしておちつき、威はあれどたけ〳〵しからず、然諾を重んじ、外見をかざらず、とりわけて、あはれみの心ふかく、自分の身は顧みずして人の爲につくすなど、世に賴もしき人なるが、その實意のほどは、そなたも、さきころ我病氣の時にても、知りたるなるべし。

縁談の申込ありたる人達はみな我が氣に入らず、我義兄弟には至極望ましき人あれど、その人はまた縁談など、申込むべくもあらず。げに果敢なき世の中やと、日頃心をいためけるが、今日、はからずも川田氏にあひて、その心ほのめかして見たるに、もとより望む所なれど、たゞ勉强中なれば、かゝることは思ひもよら

ずと、思の外の逃事に、もとより唯今といふにあらず、約束だにあれど、妹の身のかたまるといふものにて、五年十年なりとも心しづかに待つべしと云へど、さらど、その時にいたりて巾込むべし。それまではたゞ君とわれとの心に約束のみして置かむと、案じたより生むが安く、隔てのなき書生同士の事とて、何事も無造作にはこびたるに、われはうれしくて、今夜は鬼の首とりたる心持ぞや。そなたも無論異存はなかるべし。いかにか思ふと問はせたまふに、答へむとすれど、言葉俄に胸につかへて、しどしたゆたひけれど、兄君はいらちたまひて、この縁談そなたは厭か。

邯鄲 夢の枕（讀切）

中尾鶯夢

われ、髫つ頃より、ふと腦を痛めて、病を養ひ居り、筆とる業のいよ〳〵なり難きに、あるは、機を失ひて無益に流るゝ受持の記事もありて、口惜しくも憾めし、されど如何にもと詮術なさに、筐の底探りつ、古き稿を與へて、お伽どなし、流行の栞、可憐孃等の責を塞ぐ、尚病懈らで、家計簿記法をものして、謝する覺悟にこそ。

風清く月白き築地の濱なる病蓐にて

歌舞音樂の響宮殿に滿ち、美目豐頰の裡に、心嬉しく、氣狂ひ、意跳るの大盡も、忽然悟を開きなど、一聲の松風茅屋に落ちて、心耳を洗ふに似、心すが〳〵しく、氣沈み、意淨かるべし。迷と悟の兩岐道は、人生の象なるにや。昔、蜀に、盧生といへる書生あり。浮世の旅に漂泊ひて、夢路を辿る心地に、あたら幾歳の春秋を經しが、一日、如何なる風の吹廻りけん、吾、人間に生れながら、佛道に身を托せず、唯、茫然として、一日再び難き晨の月日をあかし暮せる事、抑も痴愚の極なりき。聞けど、楚國の羊飛山には、いともめでたき善知識の、座しますとかや。いでやいで、身が處世の妙諦を、尋ねむや。と、瓢然、孤笻を曳いて、住馴れし家を雲路の跡に瞻なし、山又山を踰え、谷又谷を渉り、只管、羊飛山へと急ぎける。實にや、そことしなき旅衣、露に濡れ、荊に裂き、野に月の舍りをなし、山に草を敷寢の夢を結び、やがて、名にのみ聞く、邯鄲の里に着きぬ。日は未だ高く廂を色彩りつ、田畦に

草喰ふ牛の、歸るべき様子も見えねど、幽邃閑雅の土地風景、深く吾氣に投りぬ。兎にも角にも、草鞋の紐解かん、恰好の旅宿もがな、と、訪ね歩きける。軒傾き、廂朽ちたれど、柴折門に、見越の松が枝這ひ垂れ、猗々たる菉竹の、透を作れる。飛石の苔に舐められ、雪見燈籠の姫蔦に縈旋れる、一際奥床しければ、盧生は、此家こそ望ましけれ、案内申すと、音通へど、誰人ぞと、幽に答へて、出來るべき風情もなし。又も、聲高に呼入るれど、稍暫時經ちて、靜々と足音の聞ゆ、何となく高尚き様に、悚慄の意生じ、衣襟正して俟設けぬ。立顯はれたる白髮の老翁、仙骨童顏とも言つべく、眼は炯々と鋭けれど、頰に溢るゝ斗の愛嬌を堪ゆ、威わつて猛けからさる容貌なり。懇に一揖し、蕾なす花唇を破りて、見れど遠方の旅人、何御用にて、斯くは荒破屋を訪問ありしぞ、と、問はれて。盧生言葉を叮嚀に、されど私は、蜀の者なるが、心願の筋ありて、高野山へ旅路を急ぎて、此里の風景如何にも見捨難く、近頃無念ながら、一夜の宿を御無心申すなり、と恐る〳〵賴むに。老翁は、微笑を浮べ、それは〳〵容易き事、いざ我に随ひ給えとて、快く一間に導きぬ。見れば、客間と覺しき十疊の小坐敷、楠床の鴨居、金銀を鏤め、揚貴妃の畫像を掛けなし、琴瑟を横たへたる、彼方には、緞子に金糸もて、唐草を織出だせる衾、眩ゆく設らひ、夜光の珠かと疑ふまでに、晶透れる枕を添へ、後の襖は、一面に何人の靈筆を揮ひけん、鳳凰の翼を擴げ、麒麟の異彩を放ちぬ。主人の老翁が、誘導ふ儘に打通り、出だされたる鹿皮の敷物、疲れし兩足窮屈氣に、行狀正しく座に就けど。老翁いとも打解けて、茶菓の饗應振りわけて深切〳〵しく、よくこそ遠路の所遙々と、來り給ひし。嘸な疲勞れたらめ、生憎に從者も遠出いたし、老人の氣樂さは、何一つ調度もなく、突差の用を辨せねど、今に從者も歸り來れど、夕餉の支度を命すべし。先づ茶にても、喉を潤はされよ、と、挨拶されて。盧生却へて心耻かしく、自ら畏敬の念に襲はれて、誠に一樹の蔭、一河の流、見ず識らずの雲公に、斯く無遠慮に迷惑かけ、御恩の程決して忘却仕らじ。最早懸念されな、と、言ふも夢現、旅の疲勞の、一時に發しやしけん、頻りに睡氣の萠して堪へ難きも、老翁の手前じつと耐へ忍ぶ辛苦さ。主

人は、それと見て把りしが、然あらぬか、痛く疲れ給ひけん、いざ彼方なる臥床に、暫時眠すまれよ。予も、書見の後繼續くべし。夕餉も整はゞ、醒し申さんに、遠慮は無沙汰とやら、懸念ばし致されなと立上りさま。われこそは、人も知りけめ、邯鄲の枕なれ、と、跡を濁して、掻消す如く、次の間に影を沒しぬ。

盧生いとゞ訝かしく、一種不可言の心地なりしが、見れば瑠璃の玉にてもあらん、燦然と靈光を放ちたる小枕の、衾の金糸唐草模樣と、相映して、眩麗燦爛たり。盧生も羊飛山へ至るは、未だ程遠からん、斯く崇高く奥床しき家に住ひて、山水の明媚に徜徉ひ居たらば、如何計り悞樂しかるらんにと、旅の嫌氣を催して、過越し方行末など千々に思亂れしか、去るにても此家の主老翁の身の上こそ、仔細あるべしと、思案に暮るゝ折から。幽に咿唔の聲漏れ入るに、聽耳欹てんとすれど、如何にも睡魔の魅りけん、瞼重く、自と塞りて、心恍惚となるに。儘よ、世にも名高き邯鄲の、枕に夢試し、未來の身を知る門出の告を蒙らん。これぞ天の賜なりと、一村雨の雨舍り、日はまた殘る中宿に、假寐の夢を見るとかや言ふ、邯鄲の枕に臥しにければ、身はふはりとこと、衾の裡に沈みける。

✿　✿　✿　✿　✿

あな不思議！盧生公々々と呼ぶ者ぞある。心地快げに魂を天外に走せて、此世ながらの蓮の臺に、露一點の邪氣もなき、淸淨無垢の姿なる盧生、我が名を呼ばれて、現蟬の、音樂の瀏喨たるに、又も夢を破られ、重重しき瞼細目に開き、周圍見廻せど、こは抑も如何に、殿上人とやら噂に聞きし、欽差大臣衣冠美々しく、威儀を裝り、吾枕頭に佇めるあり。こは何事の起りけん、駭き周章て、喝破と上着を跳退け飛下り、跪きて見仰れば。公卿、謙遜は卻つて畏しと、手を把らん計りに、褥に上せ。抑予の不意に夢驚かせ奉りし、餘の儀にあらず。楚國の帝御身に方乘の位を讓らん爲めの、勅使に參りたり、と、告ぐ。盧生事の意外も程に由る。一介の書生の、などて至尊の御位に卽かるべき。夢か現か、幻か、これぞ狐狸共の、我を欺弄ふにやあらん、と、疑へど、然にもあらぬ体裁に、いとゞ怪訝の念霽れ遣らで。思ひも依らぬ事を承るかな、王位にとは抑何故の御勅旨にや、不肖殆と合点致さず、と、問詰るに。さな宣ひぞ、我々が身の如何で是非をば量るべ

き、御身世を治し召す御瑞相ころ、備はらめ。いざ早く輿に召さるべし。やよ者共此方への聲に連れ、靄々たる風に、伽羅の香、蘭麝の薫を凝め、瀏喨たる奏樂の音と共に、花の盛の女房の、眉目容貌艶麗しきが、數多金銀珠玉を鏤め、いゝくす玉の紐に御簾半ぞ褰りたる輿、靜々と擡入るれぞ。盧生は恰も夢心地、嬉しさに前後も忘却れ。こはろも何と夕露の、光り輝く玉の輿、乘も習はぬ身の往來、斯かるべきとは思はじな、天にも登る心地して、玉の御輿に法の道、榮華の花も一時の、夢とは白雲の上人となりけるぞ、不思議なる。來て見れぞ、卑賤の身の想及びも難き、忱に有難の氣色よな、もとより高き雲の上、周圍眩ゆき金銀寶玉の累積き、月も殊更晶けぞ、光を奪はれなん風情にて、雲龍閣或は阿房殿の嚴めしく、棟立列ね。四方の門邊の玉の戸を、出入る人々までも、光を飾る扮裝は、名にも聞きたる寂光の都、喜見城の樂も、此には劣らじ勝らさる景色。千貨万貨の御寳の、數を盡せし捧げ物、千戸万戸の旗の礎さへ、天に燦めき。地に響く擂の聲も、夥だしく。東の方に皓々と、三千餘丈の白銀山を築き。黄金の月輪宇宙の常闇を照し。西の方眩然と、三十餘丈の黄金山を築き、白銀の月輪、宮殿の後隈を明し。これや此處、朗詠集の「長生殿裡春秋富。不老門前日月遲」と云へる心の程を、學び盡せしならめかし。

百疊に餘る大廣間、正面には、盧生金の冠、綾羅の服、錦繡の褥に坐を構へ、左右に美女を侍らして、綺羅星の如く居並ぶ百官に、興詩の筵をぞ、促し給ふ。折しも遙か下座に、李大臣の出仕と奏聞するに。何時しか玉座近く進む白髮の老翁、兩手に御酒玉盃を載せし三寳を捧げて、恭しく跪き。「如何に奏聞申すべき事の候、帝には御位に即かせ給ひて、早や五十年を過ぎ侍る。先例に慣はせられ、此不死の仙藥をきこし召し、御壽幾千代までも保ち給はゞ、臣等一同喜悦至極に候。ろれ故不敬をも顧みず、天の漿、沆瀣の盃、これまで持參、御遊興の席燃かし候」盧「汝等の志過分々々、抑天の漿とは、如何なる物にや」大「さん候、仙家の神酒の銘「馮然らぞ」沆瀣の盃と申すは」大「これ同じく、仙家の靈盃にて候」盧「あら嬉しや、今ぞ手に領る下からは」大「榮華の壽も萬年、君には豐かに渡らせ給ひ、民はさかゑて餘光を仰ぎ奉り、

國土安全、君運長久の榮華も愈增して、欣喜も勝り草の、菊の盃とり〳〵に、いざ祝儀の莚開かせ申さん。誰かある、用意の調理これへ持て」と命ずる言葉に、左右の襖押開き、立ち顯はれし女御更衣、手に〳〵三寶目八分に捧げ、鼕々と打込む太皷の音諸共、笙篳の響幽に四方に起り、廻ぐる盃の流れは、菊水の流に引かれ、夙く過ぐれど、渡る千手の表白く、裏紫なる百官か菊衣、花の袂を飜へして、さすも、ひくも、光なす、盃の影の廻る空ぞ久しく、宇宙の歡樂、たゞに極まりける。盧生は、茜さす顏の暖熱に、息を吹き。千壽丸、盃ひき手に、一さし舞はずやと、詔ふ聲に、月人男(月の異名天上界舞手の位)なる一人の、飛んで出で、正座に向ひ、御免と拜禮なし、身構をころなしにける。間もなく、殿下に湧く歌舞の聲、いとも朗らかに、

我宿の菊の白露、けふごとに幾世つもりて、淵となるらん。よも盡きじ、よし盡きじ、藥の水も泉なれど、汲めども〳〵、いやましに、いづる菊水を飲めど、白露もかくやらんと、心も晴れやかに、飛立つばかり有明の夜、晝と无き、快樂の榮華にも、榮曜にも、實に此上もあるべき。

妙なる節音に舞奏づる唐兒、蝴蝶の蹁々と、花に戲る纖巧妙技、誰しも見惚れて醉ぞ增す。舞納むる時しも、盧生は、手近の侍女に輔けられ、寢室にころは入りにける。跡に大臣寛濶に、如何に方々、いとも目出度今夜の酒宴、實に君が御代、榮華の春も常盤に、今しも山の端に冲りし、幾久しき有明月。況して月人男の舞に、雲の羽袖を重ねけれど、喜びの歌の夜もすがら、飲み祝ひ候へやと言ふ。舌の動き息まぬ間より、彼方此方に吟詩劍舞など、交々席を亂して祝ひ狂ひたり。謠ふ夜もすがら、日は又出で、明らけく、夜ふかと思へど、晝になり、晝かと思へど、月又冴へ渡る。此宮殿晝夜の差別もあらなくに、四季の眺望、悉く春の花咲けど、紅葉も色濃く、夏かと思へど、雪も降りて、四季折々は、目前に。春夏秋冬、萬木千草も、一日に花咲亂れ、千紫萬紅燃ゑ競ふ、面白くも又不思議なる事共なりける。

※　※　※　※　※

かくて時過ぎ頃去れど、五十年の榮華も盡きて、誠は夢の裡なれど、皆消ゑ〳〵失せ果てつ。有りつる邯鄲

の枕の上に、眠の夢は端なくも醒め破れて、五十の春秋の榮華も、忽ちに。盧生は、唯茫然と起上り。然ぞかり多かりし女御更衣の群と聞きしは、松風の音となり、さしも宏麗なる宮殿樓閣は、邯鄲の假の宿にて、五十年の榮華の程も、粟飯一炊の夢の間なりけり、不思議にも慮り難かり。熟ら〳〵人間の狀態を觀するに、百年の榮耀歡樂も、無情の風の誘ふが最期、命終れぞ夢なれかし、吾身が五十年の榮華も、最早消滅しけれ。嗚呼榮華の希望も、壽命の長久も、五十年の歡樂も、王位に登れぞ窮極、何事も一炊の夢かや。南無三寶、思へぞ浮世の外に、出離を求めんと、尋ぬる善知識は、此枕ぞと。盧生は、實に有難や、邯鄲の夢の世と、悟を啓ひて、望願ひし嬉しさに縋れ、老翁に、禮は勿論暇乞さへ爲さずに、喜勇んで孤筇を把り、條先の畦道を藹然に、茜なす夕日を背に、我家へと歸りける。何人

も同じ浮世の樣なるぞかし、六賢。



文林

谷菊

水上の谷つゑらきく咲ぬらん
すゑ汲ろても香ににほふなり

佐々木高行

山紅葉

をしか鳴聲をたるへに分いりて
み山かくれのもみぢをそ見る

前田利嗣

秋雲

秋ふけてさびしさまさる山さとを
けふもくものみ行かよひけり

津輕承昭

秋山

あきふけて梢いろつくおくやまは
小鳥のこゑもさむけかりけり

水野忠敬

初紅葉

いつの間に霜のおきけんもずの鳴
はしのたちえは色つきにけり

前田利昭

雨後月

冷泉爲柔

雨の音はかせにかはりて更るよの
ろらすごきまですめる月かな
閑見月　池田政禮
世の塵をとほくへだてし山ざとに
すむこゝちして月をみるかな
秋旅行　長谷信篤
野路とほく霧立こめてやどるべき
さところ見えぬあきの夕ぐれ
森時雨　植松有經
はゝろちるいはたのもりの夕時雨
こずゑぬらして過にけるかな
舟中月　宮地嚴夫
みなれ掉見なれし月もつりふねに
のせてかへれぞおもしろき哉
朝秋風　柳原愛子
ぬはたまのよきりも晴れて朝月夜
のこれる松にあきかせろふく
山影寫水　松平健子
薄墨にゑかきしものと見ゆるかな
野澤にうつるやまのすがたは

夜蟲　鶴久子
ぬはたまの夜露や更けて寒からし
まくらに近くむしの鳴くなる
水上　蜂須賀隨子
くみ得たるかげは瓢にありながら
つゝ井の月はなほのこりけり
庭上月　鍋島榮子
鳴蟲のこゑやゝすめるあさちふの
にはくさきよくてらす月かな
池水初秋風　林甕臣
蓮葉のひろ葉のたち葉うら白く
かへすも涼し秋の初風
驚立秋　同
つらづゑをつく〴〵ばうしつく〴〵と
れもへむ〳〵秋は來にけり
初秋露　諏訪忠元
秋きぬと目にさへみねて八千艸に
れきあまりたる露のしらたま
庭前花　同
庭の面にさま〴〵さける秋くさは

いづれを花のかみにさだめん

聞蟲　同

おもしろくはた哀にもきこゆなり
あきの花の丶むしのこゑ〴〵

古渡霧　同

いにしへの渡りはいつら秋ぎりの
ふかくのこつる佐野のまつむら

里擣衣　同

さらぬだに秋のあはれもふか草の
さとにさびしくころもうつ聲

雨中鷺　同

墨田川なか洲のあしにゐるさぎの
雨もいとはでなにあさるらむ

海邊松といふことを詠歌幷反歌

海上壽子

いそのかみふりしむかしゆ、清見がた。三保の浦わに、百千本、たてる松はや。邊津浪は、間なくよすれど、沖津風、絶ずふけども、年のはに、かはることなく、枝も葉も、しげりさかえて、はしき松がえ。名細しき、三保の松原。徃さ來さ、見れどもあかず、みほの松はら。

暮秋風

ふく風にひとむらすゝき打なびく
秋も末野のゆふべさびしも

すみれ

雨後翠嶺

「たれに　ゆかりの　いろにいでゝ
なれは　ゑむらむ　花ずみれ
かくも　やさしく　うれしげに」

「あらき　あらしを　やはらげし
あまつ　日がげの　めぐみをぞ
なれや　よろこぶ　ものならむ」

「もゆる　ひかりの　はげしさに
やがて　枯れなむ　わが身なり
なにゝ　うれしき　日かげかは」

「むすぶ　氷りを　ふきとさし
かせの　やさしき　なさけをだ

さては　よろこぶ　なれならむ」
「をなじ　こちかぜ　みだれ來て
まなく　しほれむ　わが身なり
たれか　風ゆゑ　はゝゑまむ」
「ゆふべ　ゆふべに　かよふなる
つゆの　しづくに　ほだされて
さては　なれはも　粧るらむ」
「露の　くやしき　れきふしの
しげむ　ものから　しぼむ身を
などか　つゆゆゑ　粧ゑべき」
「舞ふも　やさしき　春の野の
蝴蝶の　袖の　なつかしみ
さては　媚びるか　花ずみれ」
「もの丶　數には　あらねども
あだし　いろには　ゑまぬ身を
あはれ　くやしき　ことないひぞ」
「ゆかり　あやしき　むらさきの
たゞに　ゑむべき　いろかゝは
さては　きかなむ　ながゆかり」
「われを　此の世に　つくりたる
あめに　ますなる　三神ゆゑ
かくは　ゑむなれ　すみれこそ」
「われに　此の野を　かしたまふ
あきつ　三神のす　めらゆゑ
かくは　ゑむなれ　すみれころ」

可憐孃

伊勢　赤澤山人

此の一篇は、過ぎし夏の頃、世の中暑かはしく心苦しりかけるをり、心の駒のやる方なくて、西東に流れ渡る夕立のまにかいやりて捨てたりしを、ゐよと吹き立ちたる此の頃の秋風につれて、恨み顔にも反古にまぎれて散りぼひいでたれど、何となういとはしうもおもはれて、

上

庭の葉ざくらけふは又　昨日にましてしげりけり
綠したゝる夕べには　一しほ物ぞおもはるゝ。
夕日はおちて三日月の　たゞよふ影も何となく
心ぼろくもおもはれて　むかふ面にさも似たり。

軒端に立ちてながめやる
心つくしの果といふ
大御軍はかちどきの
歸りきますときくなるに
たゝし、日よりうなだれて
深き嘆きのありもせむ
涙にひちてわかし、を。
風のたよりによそながら
國の御爲にかゞやかし
かき拂へどもはらへども
世にもやさしきれも影の
忍べは去年の夏なりき
水鶏よりけにほのかにも
ざすがに耻ぢてある時は
せざりし物を今更に
唐野の嵐吹きやみて

末はいづこぞしらぬ火の
唐野の方にやあるならん。
聲も高らに歌ひつゝ
君に何時までおはすらむ。
昨日はいかにけふはまた
妾はこの世にあるかひの
聞けむろの名もいや高く
かへります日は近しとか。
家にれはし、ろのむかし
夢に入るころすべなけれ。
かゝる月夜にあくがれて
訪はれし事のありけるを。
ありのすさびに語むも
れもへどあやし吾ながら。
御世も靜になりつ衣

君はきますときくからに
ありし昔のあやまりに
にくしと君がおもはして
情ふかきはしきしまの
心のかぎりかしづかむ
妾のまこと到りなむ
うもるれもひの一すぢは
はといきつきて見上れど
月の姿も笑ましげに

中

旭日に匂ふしき島の
あへなかるらむ殘りなく
八十宇治河のあじろ木に
如何にすれむか行水の
降る五月雨に袖くちて
由べなき身を如何にせむ

とゞろく胸をいかにせむ。
つれなかりける吾が心
うとみ給はゞ如何にせむ。
大和男子の習とや
憐とおぼさぬ事やある。
下行水の見えずとも
通はぬこともなかるべき。
胸の横雲うち晴れて
柳の眉をてらしたり。
大和ざくらはなどてかく
散るころ花と人はいへど。
いざよふ波もあるものを
かへらぬ身とは成にけむ。
假寢の床も浮びつゝ
げに果敢なきは浮世なり。

雲井の空をさりともと　頼みし綱は絶えはてゝ
かぐろき髪もかきみだれ　花の姿もしほれたり。
身をともし火に寄ろひて　あな堪へがたの片身やと
包みかねたる袖を重み　をとめは嘆きに沈みけり。
いまを限りの血涙に　かきながしけむ水莖を
妾もともに誘ひてと　いひつゝやをらくり反す。
過ぎこし方をながむれば　昨日のことは夢なりき
はしたなかりし吾が罪を　許し給へや幾重にも。
甲斐の黒駒ひきよせて　とりし手綱の一すぢに
思ふは君の御爲より　外に心はなかりけり。
草の枕も露しもと　いとはじ者とかけめぐり
仇としいへど一度も　背に矢をは負はざりき。
血しほにむせび玉をあび　あがなひ得たる奉天省
旭日の御旗かげ高く　なびきし時やいかなりし。
唐野の果の木枯も　やがてのどかに春立ちて
今は涼しき夏衣　きますはわすと聞つるに。

咲の盛の花の香は　蟲もしたひて寄りくなり
朝日にゝほふ花かげは　夕の風ぞねたむなる。
龍をはふりし黃海の　あれし名殘やよせにけむ
おもはぬ方に波たちて　おきの村鳥さわぐなり。
ことわり知ぬつゝしりに　誠の條の立たぬ世か
血しほに染めし國原は　御國の者にはあらずとよ。
赤き心にさゝげたる　聞くもうれしき奉天省
ろの者かげは名のみにて　消ぬ吾が身ぞうとましき。
大和錦の數にもれ　かずよりもれて今更に
何ときこえむかへりごと　何とわびてむ世の人に。
憤どほろしさいへどねに　いはねど胸にさわがれて
もゆる思ひのこのほむら　身を果さねど消ねぬなり。
あだには散らぬ山ざくら　今は嵐にまかすなり
やまと心のふかき香を　世の人皆に告げは爲め。
此身はこゝに朽ち果てゝ　唐野の土となりぬとも
やがてさくらの咲かへり　馨らむ折もありぬべし。

下

少女は半よみさして　みなぎる涙せきあへず
しとゝにぬれし玉づさを　とり揚る手もたゆげなり。
又よみいでぬ少女子は　手向の花の一枝も
君としいはゞ如何だかり　我はうれしくたもふらむ。
心こめたる此の片身　よしや忘れてありぬとも
せめて御許に參らせむ　情なしとなれもほしろ。
今を限りの命とぞ　殘す言葉の一ふしは
げにわかつきの郭公　血を吐よりもつらからむ。
少女は今はたへかねて　風にかつちる露の身を
さゝふる力なよ竹に　すがる螢も我が身かと
消いるぞかりなげきけり。

つれなくすぎしれのが罪　何をよすがにいひとかむ

下のおもひはかくとだに　事かよはさむよしもがな。
かくとしりせば初めより　忍ぶにあまる袖のつゆ
みだるゝ絲のはしをだに　結びとめてもれかましを。

我がまごゝろの知れずは　慕ひ行くともうとまれむ
よもぎが島に通ふてふ　さかしき者もわらぬ世か。
かりの宿りはすみわびつ　山郭公に身をなして
のぞみの果の深山べに　なげきやむらむ今よりは。
れもひみだるゝ玉の緒を　何ぞと人のとひもせば、
露とこたへてけなましと　かごとも今は聲はろし。
われも御國の民草の　三葉四葉の末葉なり
女ながらもくづをれて　なげきにのみや沈むべき。
花と散りにし增荒男に　由緣ある身とあるからは
ろの心根をよろにして　なげきにのみや沈むべき。
皇國の光のあらはれむ　春をまちえて咲きかへる
花をたむけてなき魂を　慰むる日もあるべきに。
思ひ直せぞむらぎもの　心の暗は晴れたれど
さし向ひたるともし火の　てらせる影は猶くらし。



野分

林　甕臣

空の、晴れ曇り、定めがたく。雲の脚、疾さも著く。風あら〳〵しう吹き出で、雨、れど〳〵しう窗うち灑ぎぬ。

風まち、雨こひにたりし夏の暑さも、はや野分きだつ秋とは、成りにけるかな。

世の常無さ、明け暮れの眺めにしも、見る〳〵身にしみて、ればゆかし。

夜、すでに更けゆくまゝに、打ち目ざろみたるに、風、いよ〳〵音凄し。雨のしぶき、ます〳〵烈し。

つち壁の
　ゆれ落つるおとに
　　見し夢も
　　　臥房も吹きやぶり
　　　　吹くあらしかな

起き騒ぎ、物に觸れまどひて、とかくしつるうち、洋燈も消ね、雲、暗を閉ぢて、一天、墨をれし流したりし風雨、何所の空にか、吹き遣りにけん。月しづかに、枕上に、澄みわたりぬ。

雫うくる
　盥に雨を
　　のこしおきて
　　　野分は月の
　　　　漏るに代はりぬ

墨染衣

太田貞子

さやかなる此頃の月を、空しく過さむも心もとなくて、はとりろこはかとさまよひ出でぬ。時は長月の廿日わまりなれど、長き夜ふけて昇る片われの月、いとおもしろく、秋蟲の聲の色〳〵なきしきるもまたわはれなり。夜ふけてならす足の音、人にきゝしられんもさすがにて、忍ぶとはなしにれのづから人なき方に出でぬ。待つといふなる松蟲の聲にひかれ、振れ出でゝ鳴く鈴蟲の、ふりすてかたきにもよふされて、行くとしもな

く遙かなる片山里に分け入りぬ。こゝかしこに見ゆる笹のまろやも、八重葎ふかう閉ぢ果てゝ、心にもなき世をやへだつらむ。やう〳〵辿り行くに何處なるらむ、木魚のおとま近うきこゆ。あはれ如何なる人の世をすてゝ、かゝる片山里にはかきこもるらむ。あはれからうやうなる山里にこそ、語らはむ人もすむらめとて音する方に尋ね參るに、荒れはてたる一つの古寺あり。いつの世にか立てけむ、樓門もなかばくづれて、ゆひめぐらす垣根まばらに、昔名殘りのついがきもこゝかしこに見えたり。數ある石燈籠もともし火あるは稀なるに、ましていや廣き庭淺茅に埋もれて溜きあまる露に先づ袖もぬらさるゝかし。鐘樓などの石垣もつたかつら生ひはらばひて秋の色いちじるし。前庭を左りに折れて少し行けば、まばらなる生垣のひまもれて、燈火の影幽かに見ゆ。倘ほ近うちかよるに、讀經の聲松ふく風の絶〴〵に聞えたり。あはれ如何なれば、かく夜ふかく、おこなひたまふならむといふかしみゝ、法の戸ぼそを「そと叩きぬ。内にはたしかにきゝつらむ、讀經の聲もやみたり。されどもかゝる片山里に時しらずおとづるゝ人の上、けしうやおもひけむ、叩けどもたゝけども立ち出でん樣もなし。物申さむ、願ひまつる、と、聲細うおとなうに、かなたも、心靜まりけむ、立ち出で、何れよりかなど事とふに、こなたもこよひの月の空しくすぐしがたきをいらふ。

あはれみやびなる御心樣かな、疾くこそと引き入るゝにまかせて内へは入りにけり。外面のあさましさには似ぬ内のたゝずまひ、まづすむ人の心ぞおしはからるゝ。經机には今かよみよしたるならむと、おぼしき經ぶみ一卷木魚のかたはらに見えたり。たき伏せたる香のか折〳〵きこえて、浮世のちりにそみし心も掃はるゝばかりなり。住持の尼君は身に墨染の衣をつけ、例のみぐしをろしいといさぎよし、見奉れば、まだ二十歳の上をも出でぬみけしき、如何なればかくは早く世をそむきたまひぬるならむ、必らず深き故よしも侍らむ、聞かしたまへとてさし寄りぬ。

◦　◦　◦　◦　◦

なきしまに蟲の聲いとさびしく、月かげもいみじう更けりわたりて、燈火の影もいとゞ寒けし。尼君はいらふる口もどかしく、いはむ言の葉いと澁したし、心にはたしかにますらんめれど、かゝること人に傳へんは

とおもひたゆみたるなるべし、幾ろ度とひ奉れども何もえいはず、えいはざりしが、やう〳〵御ぐしもたげて「答へまつらむことは露侍らじ。只味氣なき世をはかなみ、ま丶ならぬ世をあへなみて、斯かる姿にはなりにけり。もとより世にとほき山里なれど、谷の戸出づる鶯に、春知り初め、うつろひ行く峯の紅葉に、秋の更くるを知るのみ。世に爭はぬ深山の花の花陰に、山下水の水の淸きをむすぶ。誠に濁りある世の中に比べてはいとゞまさりて心安さも一入なり。」と、いひさして、又、言葉もなし。今ははや問ひまつらむすべもなみ、今昔の物語に、移り行く時をぞわすれぬる。

・　・　・　・　・

峰の松風聲絶えて、み法の庭もいとさびしきに、月も入りぬ、蟲もなきやみぬ、今は只まぎる丶ものなきにあけ烏の二聲三聲なきわたりて、とぼろのひま白うしらみ初めたり。あまりの長居もとて、何れ又の折ゆふ〳〵おとづれまいらすべし、ゆくりなき此のおとづれ、定めてかしましくやおぼしたまひけむ、いざさらばといひすて丶、法の戸出づれど、袂はらふ朝かせいと心地よく、又誦しあぐる讀經の聲むなしく松杉の外に嗄嗄たり。

親友を哭す

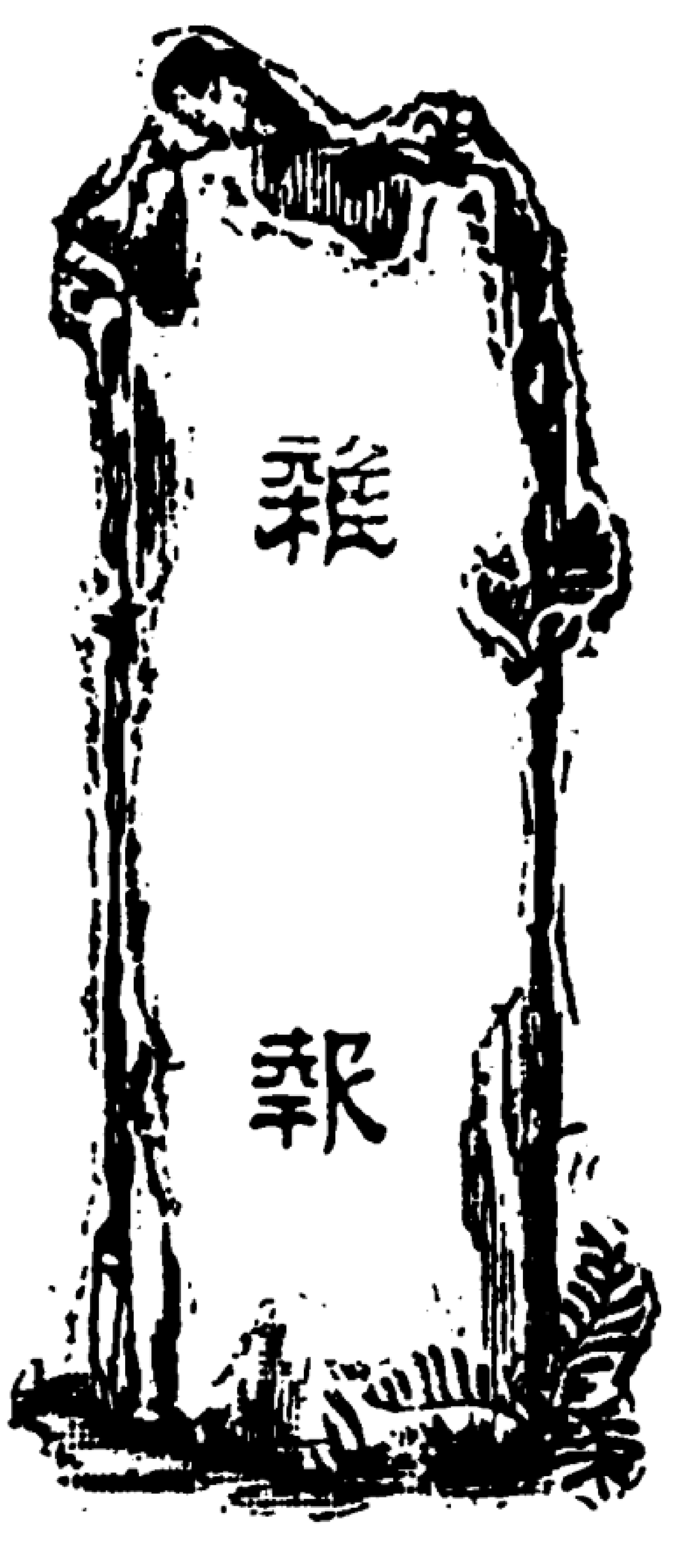
蓼川

おのが身もおのが心にまかせぬ世にしあれど、いまはと春まちゐて綻ひし花の、見るほどもなく、一夜の間に散り果ることの、いかでかくちをしからざらん、こよひはと待ちつけし月の、やがて雲隱れして、照りもはてず成りぬることの、などかは殘り惜しからざらん、うき世とは人ことにのみ聞きにしを、今又君が上に懸らんとは思ひがけきや、

おのれ山里に生れ出て、幼き時よりの友とては、唯君あるのみ、袖つらねて花の朝に峯の霞をふみわけしも君なりけり、手携はりて夏の夕に小川の螢を逐ひけるも君なりけり、諸共に秋山の紅葉蹈み分けて、木の實をひろひしも君なりけり、諸共に雪の斷端に雀を射取りけるも君なりけり、學の道に志して、吾妻の里に移りても、なほ五年の間は、窓の旦夕を、君と共に明かし暮らしぬ、君の才秀としも人に誇らず、人いやしけ

れどとて侮らず、み國を思ふ心あつく、大君を仰ぐ心深く、歴史を繙く毎に、吉野の天皇は天の川の奥なる、賀名生といひける所に、黒木の宮を造らせてれはしまし、芝ふく庵のあやしきに、軒漏る雨をふせぎかねて、御袖のなみだはすひまもれはさゞりき、といふ所に至りては、君はものをも得いはず、衣の袖をしばりもあへず、ひたなきに泣かれける、面かげの今はた思ひ出られて、心のほども推し慮られつ、

去年の春、君がよしありてふる里に歸へらんとて、一本の梅を留め置ていへるは、此の花の吹かん時には、必ず尋ね來んと契りてころ出で給ひしが、その花は時を違へず笑み初めつるに、君は既にはかなき人の數に入りて、いつしかと頼みし花さへ、むなしき形身に成りはてんとは思ひがけきや、尋ね來んとは何時の世にかある、逢はんとはいつの時にかある、眺むれども果なき**大空の何處か君がみ魂の住居ならん、思へども胸つぶれ**てかなしきぞかし、あはれ行末は秋津洲の礎とも成り、御國の柱とも成りなまし人を、殘り惜しく一夜の嵐にちらしつる哉、



❺誰か吾人に主義なしといふ

世には、主義々々と、いふこと、なかなかに、やかましく、太だがひて、敎育の如き、かならず、一定の方針にてあるべきことにさへ、何の主義とて、人によりて、みな同じからざるやうになりたり。されど、吾人も、大に、主義を主張せざるべからず。誰か吾人に主義なしといふ。誰か吾人が女子敎育に主義なしといふ。誰か吾人が女鑑に主義なしといふ。吾人が多年、此處に論ずる所、此處に說く所、此處に記す所、此處にいふ所、此處に敎ふる所のもの、皆吾人が主義なり。而して吾人が主義は何處にあるか、即ち、吾人の主義は、敎育の大勅語

爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及シ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進デ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アラハ義勇公

ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ

此の大詔りを體して、此の大詔に依り、此の大詔に戻らざる所の忠良順善なる眞日本眞女子を養成せむとするが、吾人の主義なり。吾人何ぞ殊更に主義をいはむや。

至聖の訓へたまへる所、即ち吾人が謹で奉じて、吾人が女子教訓の主義とする所なり。眞日本の眞女子たる者を、養成せむと爲すに、これをすてゝ、豈他に何の主義あるべき。謹できけや、白面者流の白痴、青眼末派の色盲者、汝が主義とする所のものには、吾人遂に女子教育の主義たるものを見出す能はざるなり、否、眞日本の眞女子を養成するの主義たるものを發見せざるなり。敢問ふ汝が主義は蓋し何の女子を養成するの主義なりや。

●老婦に賞銀を賜ふ　頑迷語るべからざる臺灣の一老農婦にして、猶且此擧ありとて、征臺近衛師團長能久親王殿下より賞與の沙汰ありし、佳話あり。去六月七日、我近衛第一聯隊第一大隊が、臺北城を占領せし當時、各隊齊しく銃裝突貫を以て城門に迫りしに、堅く閉して開く能はざるのみならず、城壁も非常に高くして、容易に攀登ることもならず、殆ど百計盡たる折柄。乍ち壁上に人あり、一同眸を蝟めて、之を見れど、懦夫は素より、男の身にても止り難き、修羅の戰場には、見も馴れぬ年老いたる農婦一人、彈丸雨注の難を恐れず、突立ちたるまゝ、何處より持來けん、一丈有餘の竹梯子を攜へつゝ、怪しき眞似に、我が軍隊を麾きながら、件の梯子を、群集の眼前に釣り下ぐるに、危みながらも勇氣に逸る面々、我劣らじと、之を攀ぢて上れど、老婆は、梯子の尖頭を確と捕へて、上るに便ならしむる必死の働き、奇特なるに力を得て、我が兵次第に壁上に登りしかど、斯くと見るより、敵兵一同色めきて、狼狽の餘り爲す所を知らず、遂に門を開きて降參するに至り、刃に衂らずして、全く臺北城を占領したれど。戰終るや、師團長殿下には、其の殊勝なる勳勞を愛でさせられ、身に餘る賞詞に添へて、銀子若干を賜はりし由。其の賞狀を得れど、左に掲ぐ。

賞賜獎狀

臺北府北門外農婦　陳　法

該名於去明治廿八年六月當我官兵進入北門門扉緊鎖之時汝陳法敢冒敵陣携楷梯來助力攻打本師團長深嘉汝以一婦身有此美事其効可賞茲賜銀五圓賞其美併獎

衆庶後日報効無慢

明治廿八年七月五日

近衛師團長　能久親王

●京都都踊の唱歌

京都紀念祭賑ひのため、祇園新地歌舞練場に於て、二週間の催ふしなる都踊は、延暦時代の摸様を見する筈にて、唱歌のつゞみ歌は、某貴顯の注意に仍り、後亀山天皇の御製を、申し唱ふる事となし、全躰は花朴といへる宗匠の、組立たるものと聞く。いま左に、

唱歌　寄都祝

「ころは紅葉の唐にしき。四方の梢もさまぐ〵に。色ろめなして靑丹よし。ならびしならの町つゞき。たつるけむりもゆたかなる「君のみましの大内の。ろの跡ふりて今もなを。ゐるしにのこる宮居さへ。物さびたりな。見えわたる。山は三笠や啼鹿の。遠音ゆかしきところ哉　つゞみ歌「君にころさかりも見ゆれをさまれる。花の都の萬代の春「今はむかしに長岡の。殿造りせし古ことを。きくさへ殊にいや尊き。あたりに建る屛風にも。ゑがけるすがた大宋の、服は草葉のみどりろふ。色にのりたる若駒も。はみていさまんむかりなり「年ふるまゝにわびごとの。見ゆるは庭のやどりさへ。これかやぶきのかつを木も。誰しらゆふとかけまくも。畔そなせるかきつむた。いろを見せにけり。爰に開ける博覽會。場をせましとはこびきし。跡は夜にさへながめよく。疏水にうつる星のかず。秋の螢と人や見ん。見よや見られんさす舟に。のりては人にのせらるゝ。わだしこと葉はなんのろの。夜め遠めとのろらでとや。まことのをもひうちまけて。きいてきからん樂しさや「應天門の棟高く。並ぶいらかも靑空に。色むえ合ふて永く目に。とゞむる御代の搆へなり。昇る旭にかゞやける。朱の扉に廊下まで。わたりまむゆしとのゞの。左右は白虎蒼龍の。外に稀なる龍尾壇。これやあらたにそなはりし。大極殿の大造り。平安神宮は今よりや。かぞふ千年と百年を。祝ひ〳〵てまつるけふ哉「目出度時のいたりきて。これやうへなき九重の。民のいさみの。すゑぞ久しき。

●琉球婦人の留學

琉球の婦人は、内地にありて、島外に出づる者は、唯、醜婦のみなるが、今回、兩名

の女子、始めて、長崎なる美以美婦人傳道學校に、留學する事となりし由。

●支那婦人の足を矯さん　臺灣の外人居留地に於て、先頃各國西洋婦人等の發起に係る、婦人會と云へるもの興りぬ。會の人々は、日清戰爭も治まりし今日、支那婦人の陋習を、何卒して改良しやらんこそ、吾儕第一の急務なれと、談合ひし末、何よりか先づ彼の不具なる、足を矯さしむる樣、相共に力を盡さんと議論一決し。其れよりは、只管支那婦人の足の小さき事に就て、攻撃を始め、終に其の爲め、健足會と云ふものを、新たに設くる迄に至りたり。此程の事とか、右の健足會員の一婦人が、知己なる某支那婦人の許を訪ひし折、種々の物語りの後、例の足の事を言出で、如何に昔よりの習慣なればとて、然りとては、我と我身の自由ならぬまでに、足を作り、圓滿なる體を、殊更に不具となして、悦ぶ事卿等の不便計りか、傍の見る目も笑止の限りなれど、斯る習慣は、少しも早く思ひ捨て、文明の人と倶に進まん樣の、心掛こそ、現今の世には緊要なる可しと、爽やかに說き勸めぬ。支那婦人は、恪と聞き終りて、容を正し、如何にも御諭しの趣、一々御道理とは存ずれども、習慣の容易に改め難きは、御身等の胸を小さくする事が、人身に害ありと云ひながら、容易に改め給はぬにても、知られたりと答へけるとなん。さても可笑のことゞもなり。

●振袖廢止の說　從來我國の結婚式は、頗る面倒にて、花聟花嫁の禮服には、それ〴〵一定の制規あり。維新以來諸事の變遷に連れて、昔流は次第に廢りたるも、中等以上の社會にては、今も都鄙の差別なく、男子は、紋付の羽織袴に、女子は、縮緬の振袖を着するを、例とするが、振袖の如き、上等の品に至ては、其費用中々莫大なるに係らず、婚禮の節、一回着するのみにて、離緣再嫁の時にあらざれど、殆んど二度と用ゆることなく、只結婚當時の紀念物となりて、空しく簞笥の底に埋り置くは、實に不經濟の至りとて、近年は振袖を廢するもの、段々多數に成行きし趣なるが。爰に越後中頸城郡菅原村勝山喜作氏(前縣會議員)は、深く之を慨歎して、一は勤儉貯蓄の爲め、一は華奢の弊風を除かんが爲め、今後同地方に於ては、婚禮の際、右振袖を廢して、之に代へるに、將來永く實用に適する禮服を以てせん、とて、目下盡力中なりと云へり。

●あな嗚呼の業かな　本郷臺町に、北宗派の講家あり、峯本晩霞といふ、今年四十二才、俗にいふ厄年の、最愛の妻に死別れて、切に後妻を迎へんとす。然れども、元來の醜丈夫、面色黎黑、蓬頭垢面にして、渾身泥の如し。而して、斯る醜夫の僻として、其妻の美を欲するの念や、人一倍に切に、深く胸中に刻まれて、寸時もはなれず。此度は、亡妻の叔父は、奥州の長者にして、某會の會長、矢部某といふ、資格も正しく、名望も盛なる仁なるを、栖に、何とかして、富豪の婦人を娶らんとしけるうち。圖らずも目につきしは、芝三田の高臺に住る、比丘尼珠明といへるは、財産は一萬圓餘もあり、殊に絶世の美人にして、實五十に近き身ながら、見渡す恰好三十路前後にしか見えざるに、目星を附け。直に徳川家茶道の宗匠松野雲峯へ、其の周旋かたを賴しに、ろは六かしと斷はれども、晩霞なかく\/に肯かず、是非に\/と賴みたり。然らば、成否は保證しかぬれど、話だけはいたさむと。早速此のよし、珠明尼に語れど、尼は佛然として物をもいはず、袖拂つて奥へ入りしまゝ、出で來らざるに。雲峯は赤面して、歸宅したりけり。さるに、此程にいたり、豫て懇意にせる故澤主人正の令息より、急使を以て、招かれしまゝ、到れど、御前は、殊の外立腹の血相恐ろしく、宗匠の分際を以て、親戚の珠明を、素性も知れぬ講家の許へ嫁入らせんとせし段々、以ての外なり。彼を誰とか思ふ、故石山子爵の未亡人にして、前の女官石山照子の母堂とは知らずや。

●清國西太后の來歷　久しく簾を垂れて、政を聽き、今尚現在の政界に於て、大勢力を有する者は、清國の西太后と爲す。今同太后の來歷を聞くに、元は廣東の郭外に於て、貧人の子たり、夙に其美貌を以て顯る。兩親生計に窮して、今日の食を得る途を知らざるに及びて、此女兒孝養を盡さんが爲め、奴隷として自ら賣らんことを、兩親に勸め。遂に一名將の、所有物となりたり。其名將は、此女兒の美貌を、殊の外に愛して、之を養女と爲したり、次で北京に赴きし時、此養女を携へて到り、遂に之を時の皇帝に獻じたり。爾來頗る皇帝の寵を得、間もなく、皇帝の愛妃と爲るに至れり。既にして、同帝崩御の後は、前日の奴隷、遂に清國の攝政となり、國政を料理するの伎倆は、殆んど歷代諸皇帝に、淩駕するの勢あり。西太后は、現に今世の、

一大女傑におはすとかや。

●一烈婦　氣象探撿者なる野中至氏の、富士山の絶頂にて氣象を試驗し研究して、年を越んとて、そが告文を出すや、誰か感奮せざるものあるべき。さる程に氏の夫人は、資性剛順怜悧にして、夫がこの堅志を見ては、などて輔けざらめや。氏の親父に請ひて、女の身の心雄々しくも、富士の絶頂に、夫を扶掖して、共々、越年の苦を嘗むるとなん。いかに貞節勇烈の婦人にあらずや、かくの如く、内助あり後に一大聲援あり、野中至氏が計畫の業は、その偉績を顯はすこと、期して俟つべきなり。

●女子の体操　此頃小學校の前を通行せしに、花やかなる少女子たちの、赤、紫、淺黄などの、色々の襷をあやどりて、立ち並びたるあり。さても、何を爲すにかと、見てあれど、ほいとかをいとかいふをかしげなる師の聲に引續きて、女子にもふさはしからぬすさまじき聲をふりたてゝ、一二三など云ひながら、拳をかためて、人をうつ如き、或は足をそらにはね上げて、物をけるごとき、または胸をそらして、欠伸を爲す如きさまぐ\の見苦しきさまをして、はては鵞の歩む如くに歩み出しぬ。されど、体操とかにて、我が國の婦女は、あまりに柔弱なれど、かゝる事をして、身体を健康になすなりとは、一わたりいとよろしきやう聞ゆれど、實際に於て如何にか。その前にも後にても、直に又窮屈げに机にむかい、疊に坐りなどして、全く反對したる仕事をなすものから、氷炭水火相入れざる兩極端の事を、續けてなすやうなれど、湯に入りて又直に水をあびる如く、水をあびて直に湯に入る如く、反て健康の爲におもしろからずればゆ。夫が爲に、又次の時間なる僅の間の讀書手習裁縫などには、やゝもすれど、倦み疲れて、はては誠に欠伸をし伸をなし、拳をふり廻しなどのみして、事も覺えず、ものも聽かぬ事などの多くありて、あさましき結果と成る如し。されど、女子は、さる男子らしき運動はなさずとも、日來萬づに心を用ゐて、まめやかに立ちふるまはせたらむこそ、中々に、二三十分の体操などには、まさりたらむとればゆ。

●對山女史　といへる婦人ありて、記者の許に、つぎの文おこされぬ。まこと男子も耻かしき心ぞへにこそ。凡べての女子の徳高く、行きよくて、その心のた

くましきこと、かくあらんには、我國の幸、何ぞこれに過ぐべき。

坂本三七郎氏の問に答ふ

女鑑を見もし讀みもしする孃達は、大方學の庭にある人々なり、未來の母たる人々なり、よきに習ひあしきにさけ、よきを取りあしきを改む、是れ孃達のつとめとする所なり、又、其他の人々にもせよ、かかるたしなみなき人々のあるべき筈なし、もし氏の云はるゝごとき人のありとするも、おしなべて云ふべきかは、さなくとも、氏に此鑑にくた〳〵しくものせらるゝ勞を、夏のはじめに孃達に注意して、かゝる事のなき樣、未發に豫告せられてこそ、男々しかれ、さるを、女の誤りあるを、あげ足とりて、さももの知り顔に、試に問はんなどゝあげつらへして、論說に掲げたるは、何たるひがことぞ、此ふみを讀もし見もしする人々は、此よきふみに習ひ、よき人とならんとする皆良心なる人々なり、氏よ、國家を思へての心なるか、はた、さかしらなるか、有もせましきあとかたなき事などをかき立てそ、若、かゝる孃達のあるとならば、其人につきて、密に忠告してこそ、なかれ、外聞のあしき事をな云ひぞ、氏よ獨愼むてふ文字の意味をあじはいてよ。と、はべるものは、下總國香取郡干潟の農の婦對山女史。

おのか身の守り愼む道の上によきともへども人につげつゝ」ふる霧にふりさけ見れどあきの下いづれをそれとわきて見るべき

●可憐兒(上)

こは鶯夢が可憐娘と好一對の事實なりとて筆のすさびに書きつけしを今つぎに掲げぬ。

春は那處を眺めても心地のよきものぞかし、まして此處は田舍なるをや。都會と違ひて下駄踏み鳴らす音の騷がしく、砂烟天にたちて正面に帽子を襲ひ來る心配もなし、氣は濶く心寬かに、非の自然を味ひ得るは唯だ此處……神の不用意に粧飾せられし田舍なりかし。看よ、東南の一面屛風を立てたらん如き山又山を平地には今を盛りと櫻の花の咲き亂れてあれど、山の絶頂は夕日の名殘を止めて、まだ消えやらぬ雪の白皚々として、日に映じながら巍然として蒼天に屹立てり。く山の中央を微かに白く帶の如くまとへる雲の如何に淡くして且つ優なるよ、見渡せど西の隅の方にも之と等しき淡雲の球の樣な形せるが三ッ四ッ見ゆめり、他は

蒼天一碧、恰も布巾にて拭ひたらん樣な天の色なり。風はそよと昨日芽を出したらん歟と思はるゝ計りの軟かな若葉を扇ひて、菜花裏に夢を結ぶ蝴蝶の羽がひを微揺がし行くのみ。試みにふさ〳〵と柔かげなる若草の上に大の字形に寐轉ろびて、眼を蒼空に注ぎながら、心の儘に休らへば、身中の肉も爲に解ける歟と思はるる好天氣なり。松杉のしげる森陰に藁葺の家の彼方此方に見ゆるが、其庭には木槿や椿の花の打ち交りて咲きながら、杉の根方の薄暗き處に椿の一と片二た片落ち散れるも床し。ふと耳を傾くれば、ちよ〳〵と囀る聲の聞ゆ、其は何と名くる鳥にやあらん、優しき音聲にて向ひの森に歌ひ行くは黄鳥ならずや、何故に我傍に來て鳴かぬ歟や。此時ふと頭の上に落ち來るものあり。仰ぎ見れば小さなる蝴蝶の翩々として舞ひ下がりしなりけり、あゝ春の景色の面白さよ。

此處は越中の國にて戸數の三四十もあらむといふ一都會より、更に十餘町も離れたる本郷村といへる寒村にて、家數の四五十計ある田舍の田舍也。酒、酢、醤油、石油、或は、蠟燭、線香、糸、針、など購ふにも一々町へ出ねば用の便せざるは不都合此上なけれど、酒屋へ三里豆腐屋は五里といふ片山里に比べると、なんの此處は極樂天上界。別に町へ出るにも股引草鞋の面倒もなきぞかし、暮を見掛けて着の身着のまゝ、一寸町へ行ッて來ようや、草履をツひと爪先に突かけ、手を懐にしながら、悠然出掛けて埒明き得れば、村と云ふも其實町も同樣なり。尋常小學校は隣りの村に四五ケ村合併のがありて、此村に建てられてないのはチト肩身狹けれど、なんの是れ皆な共同の小學校なりと聞けば、夫程己が村の不名譽でもなし。高等小學校へ通ふは町まで出ねば仕方なければ、是とて此村斗りにないのでなく、何の村にもないことなれば町だけは別物、他の村の者共に自慢せらるゝ心配もなし。それにしても町と云ふ處は羨ましい、郡役所もあれば警察署もある、裁判所もあれば收税局もある、病院、會社、郵便局、倶樂部有るぞに〳〵立派な建物が澤山あることぞ、第一高等小學校のある斗でも町は豪氣ぢやと、毎朝高等小學へ通ふ兒童の一人、路傍に立ちながら、苗代の見事に生へ居る中へ、何故ともなく小石を投げ込みながらいひしことありと聞く。朝より大鼓の音の全村に鳴り響きて止む時のなきは此日本鄕村には一村の

祭禮ありと知られたり。流し旗數十本社前に立てられたるが、折々風の爲に飜るめり、其中には紅いのもあり白いのもあるべし、中にも遙き樹の間より際立ちて見ゆるは紅い旗なりけり、地には風ありと覺へねど、旗のゆらるゝ度に時々其文字の書かれたる方が、表裏を爲すを見れば、空には幾分か風ありと見ゆ。町の十文菓子屋殿の此天氣と此祭節とを的睨んで一儲せずんばあるべからずと、朝まだ小供の眼醒ぬ頃より宮の前に陣取り、臺を出して十四五組列をなして扣へ居るなり。此日彼等の儲け幾程あるべきや、小供の財布の輕重によりて、此人たちの儲けに加減あるもれかし。哀や村の小供、町の小供なりせば旨い物食ひの爲に一日五厘銅貨を遣ふことも稀ならねど、村の小供は日に文久一文遣ふのも異數にて、多くは十日も錢の顔見ずに仕舞ふこと例なるべし。唯だ彼等が格外に錢を遣ひ得るは、正月と盆と春秋二度の祭禮の時計り、また佳い**着物きる事の出來るも此時と、祖父様の十年忌に當る**當日町より坊様の御出でなさる時位に過ぎざるべし。左れど盆と正月とを除きて、第一の嬉しい日なる祭時といふことなれど、十歳以下は十文錢十枚、以上も二三年前なりせど天保錢、現時は天保錢なければ、一錢銅貨二枚は遣へる、天下是ほどの嬉しいことのあらんや。

全村四五十戸、其中一戸に二人の兒童ある家もありとすれど、其數凡そ七八十人はあるべし、それに他村の親類縁者より遊びに來て居る小供もあれど、都合合せて百幾十人の小供の喜び、樂み、昔し世に極樂の圖を書きたいと思ふ人あらば、此日の遊びを見せてやりたし。太鼓の音の朝より鳴り響き居るは、神主の來て鳴らし居るにあらず、小供の行きて代り／＼鳴らし居るなり、宮は流石に祭日の事なれば、常の如く蛛蜘の巣をして縱横に網を造らせては置かず、綺麗に掃除せられて源平八島の合戰、川中島の合戰、牛若辨慶五條の橋立合ひの額面なんど四方に掲げられたるが光彩燦然たりき、旗竿の立てられたる根方の日當りに、晴れ衣を着かざれる八九歳の小供大勢、頭を集めて俯向き居るは、そも何をして居るのやら。此方より餓鬼大將らしきが馳け來て、太鼓敲く棒を奪ひ取らんと意氣込み居れど、アラ可憐、他の小供は今やお山の大將に虐待られて、可愛らしき顔に時ならぬ雨を來たさんず雲な

り、石の鳥居の根元に重さは目方二十六七貫目、輕きは十七八貫目位の多きな石、五ッ六ッ顛倒がり居るは何の爲ぞや、村の若い衆が腕力試めしせむとて置かれたるなんもて石(方言)ならん歟、此石を動し見むとて小さき手を兩邊に掛けて、曳けや〳〵と叫びたれど其動かないのに呆る〻小兒の樣子可笑し、日も午後の三時頃になれど、鷄の鳴き聲も太皷の音に埋められて、全村何となく浮き立ち、家々の女房、娘、婆樣に到るまで襷わやどりて厨さわぎ忙し。宮へ行かんとてか、十二歲より十四五斗りの小供五六人、森の木の間を拔け出で〻、畝路傳ひながら、何事を歟語り興じつ〻來れり、孰れか今日を晴れと此頃流行り來りし二子縞の袷の綺麗なのを着、帶の結も特に其母樣達にして貰ッたかして、かいのくち結に結べるものありき、中にも學校の生徒らしきが白金巾の兵士帶して意氣揚々として行くは一際目立ちて見えぬ。閾の外へ出るまでは着物を汚ごしてはならぬと、母樣に注意せられて、又歟と思ひながらも、不常着脫いて、晴れ衣に着換えて見れどハテ、其丈でもハヤ無條に嬉れしいのなり。出で行く我子を表口に送りながら、其後ろ姿を眺めて、喜べる親の情を、萬分の一ほども酌むことは知らねど、扨て外へ出て見れど、何時になく氣の晴々せらる〻も、啻に太皷の音に浮かる〻、精のみでもなかるべし。宮の前には菓子屋が澤山出で居る事、昨年の祭には雨が降りしが今年は上天氣なること本年の火祭(一月二十六日)に太皷を張り換へたが能く鳴ると云ふこと、祭が來たので學校の休まれたが何より嬉しいと云ふ事など語り合ひ噂し合ふて、此村の一番廣ひ路の曲り角の、雨に晒されて首のなくなりし石地藏尊の邊へ來たりぬ。此時彼等の中の盆ちやんと云ふ小供、など立とまりて、中での大將と見ゆる椀ちやんと云ふ年重の小供に向ひ、ヤアあれ御覽彼方へ吉田が一人町の方へ行くぜ、彼奴め何用しに一人で行くのだろう、何時も悄々下斗り見てあるく生氣地のない奴だと言いぬ。彼奴め此の祭に町へ出るたァ奇怪しい、盆公聲掛けて義公メを(吉田と云ふ兒の名、學校へ出て居るを以て常に其姓を呼る〻が例と見へたり)呼で見ろ、と餓鬼大將の椀ちやんが命令皆まで聞かず、盆ちやん聲張り上げて、おい吉田か、何處へ行く、おうい吉田と呼べど叫べど返事なし。聾か、彼奴一心に下地斗り見てあ

るくから聞こへぬのだ、やい聾やい吉田ァ、人が何處へ行くと云ふのに何故返事せぬのだと叫びぬ。此時遠くより家々の表口を見舞ひ歩く獅子舞の笛太鼓、小供のはやす聲に和してどッと斗りに聞えたり。

●學習院次長高島信茂氏の女子教育論　こは、同氏の談話を筆記せしものなり。得るがまに〳〵、こゝに掲げて教育者の參考にそなふることゝなしぬ。

女子教育論は先年或る會で演說したことがある今日に在ては其論旨を敷衍し或は實際着手の次第を細く論ずるに過ぎぬ唯自分が獨り驚くのは女子教育の必要を此節論ずる者を見るてある人間たる以上は即ち教育が人である教育外に人と云ふべきものはあるべきものでない此教育と云ふものは勿論男女の別はない事である然るに今日女子教育の必要如何を論ずるは時間を徒費するに過ぎぬ併し女子教育を如何にしたらば其宜しきを得るかと云ふことは遲々ながらも今日講ずべき所である

維新前の女子教育は恐く家庭より成立つたものである其の家庭より成立つた教育で女德は勿論の事一家を經營することも敢て不足は無かつた然るに時勢の急變よりして凡て教育と云ふものは學校に托すべきもの又學校も負擔すべきものゝ如く心得て家庭の教育と云ふものは一時消滅して仕舞ふた其消滅したる所の理由は種々あるが要するに其兩親が當今の事は何も分らず子供に言つても親の言ふ事は決して聽かない子供も亦れ叔父さんの言ふことやれ父さんの言ふことは到底何の用も爲すものでないと思つて居る或時若干の兒童が遊んで居る場合に自分が暫く佇みて見て居たところが一人の子供が言ふにそんな馬鹿な事は內の親爺でも知つて居ると云つて一人の子供を辱しめたことがある兒童の無邪氣から出た言葉ながら之れを以て家庭教育の頼むべからさる事の一部分を知るに足ることである而して其の維新以後女子の教育は隨分學問上では所謂天保時代の者に比して見れば遙かに進んだ女德及女子の風俗を傷けた事も亦少からぬ事であろふ此等既往の事は論じても益もないことであるか前に言ふが如く實際着手の如何を講究するは今日の最大急務と思ふ

前にも云ふた去る明治廿四年に或場所に於て話した女子教育に關する演說の筆記を一寸讀んで今日の話に代へませう

(前略)抑も教育法の國家的たると如何とを問はず總て其目的を達せんには學校教育家庭教育社會教育の三者互に相俟ちて始めて其効績の觀るべきものあるは今更云ふを要せざる所然して冥々隱微の裏に於て最も至大なる影響を及ぼすもの何ぞや曰く家庭教育に若くものなし家庭教育にして其宜を失せば僅々の時間を以て委托すべき學校教育將に何か爲ん社會教育も亦之によりて紊る所ゝあらん然り夫れ既に家庭教育の至緊至要なること斯の如くなるに其實權を執れる者は誰ぞ曰く婦女是なり蓋し本邦の習俗たるや男子は外に出てゝ百般の事を執るもの多く女子は二六時中概ね內に在りて家事經濟及保育の任に當るも

の多きは自然の狀態にして兒童習慣氣質の如きは母の膝邊に彷徨し其襁褓の中に在る頃より既に不知不識の際に於て自ら母に感化さるゝもの多きは爭ふ可からざる事實たり是れ即ち家庭教育の全權は婦女の掌中に在りと謂ふ所以にして誰か復た疑ふ者あらんや然るに婦女の責任此の如く至重なるにも係らず女子を教育する所の方法は將た何れに於て備はるや各府縣に於ては僅に小學校に入らしむるの道開けたる而已にして一たび其業を卒へなば去りて如何なる學校に入るを得べきか男子の爲めには高等學校尋常中學等の準備あるを見れども女子の爲めには未だ嘗て斯る設あるを聞かず是に於てか正當に其身を寄する所なきを以て或は止む事を得ず教會校堂の類に入る者多きは國家の爲め喜ぶべき事か將た憂ふべきもの歟苟も教育に志あるもの最も愼重なる攻究を要する所たるべし請ふ見よ彼の布教家の精神は口にも筆にも金力にも實に十二分度に達し就中我女子等は此徒の爲めに非常の恩澤を蒙りつゝあり驪も亦及ばざる時なり奚ぞ漫然之を看過すべきものならんや豈夫之れに對する救濟策を講ぜずして止むべけんや

又翻て願ふに女子たると男子たるとを問はず其前途に於ける教育の結果は如何あるべき歟或は萎微柔弱の氣運に陷らしめざるか否或は有爲活潑にして國風に相當せる精神を涵養し得べきものなりや否は之を教育し終れる後に知るにあらずして試に讀本の初卷を繙かば多慮を要せずして自ら之を卜知し得べきものなるに因り讀本の編纂及撰擇とも特に緊要視すべきものなり然れども今茲に其意見を詳述し之より推し及ぼして以て女子教育の必要を説くに遑あらず因て之に關する理論は姑く茲に擱き此上は如何にしてか能く女子教育の普及と改良とを謀ることを得べきや即ち實際着手上の方法を研究すべき事是れ今日に於て最も必須なる緊急問題たるを信ず若し夫れ此事をして等閑に付し去らしめば喃々として國家教育を説き孜々として教育の普及を論ずるも恐くは其効果の擧らざらんことを憂ふるなり蓋し教育上の第一初歩階梯たり基礎たる所の家庭教育に與かるべき女子をして適當なる教育法に服せしめずんば百般の苦心計畫も是れ猶は砂上に大厦を建つるの譏りを免かるべからざれはなり因て茲に左の鄙見を呈して社員諸子の參案に供せんと欲す幸に此案を以て至當なりとし之を贊助さるゝの諸君は徒に理論上辨難駁擊に拘はることを止めて着々之れに從事されんことを冀はずんばあらず若し此他に良案好工風の存するものあらば吝まず之を公示して以て益斯の道の爲め盡す所あれ

第一　女子の爲め特別に高等女學校を設くるは固より然るべきものなれども其維持上に於て經濟上の困難なる所あるを奈何せん

遽に之を設け忽にして復た閉づるが如きは教育の事業上深く愼むべき事なり然らば尋常中學校内に女子部を置かん歟是亦種々の弊を醸すの虞あるにより固より得策たるを見ず是に於てか到底普通の小學校内に在りて女子の爲めに特別の學科を設け稍々高尚なる教育を加へて以て賢母良妻たるの素地を教養せば如何

第二　女子の學問は讀書作文地理歴史習字書學裁縫家事經濟(日々の出納を明にし蓄財の法を授く)料理(中等人民の生活を度とし物に遺利なきを勉む譬へば蕪子大根の皮は漬物にする等の如し)育兒法及衛生等の要旨を授くるに限り夫の高尚なる數理學説若しくは交際上の方便たる外國語の如きは勉めて之を省略するを要す數學は小學の課程にて充分たり

第三　女子學校の管理法は質素節倹を旨とし極めて規律の精確なるを要す

第四　女子小學校卒業及び之と同等なるものは年齢十八歳以上たるべきものとし學期は凡そ三年乃至四年間とす」

云々……

是れは私が先年演説した大要であるが先づ私の女子敎育論は斯う云ふ考である

●東京府高等女學校補習科生　二十餘名は、去月三十日を以て卒業せり、個は、普通卒業生中、志願を以て卒業後六ヶ月間、小學敎員たるべき事務練習をなせしものにて、丁度、尋常師範學校女子部に相當するものなり、當日、學校長は、證書を與へ、卒業生惣代及在校生徒惣代等の祝詞あり、祝詞の文并卒業人名は、左の如くなりき。

答辭

あはれたのしきけふの日やげに今年ははなさき匂ふやよひのころをもとくすぎよかしと思ひほとゝぎすの音をきくにつけてもまだ夏なるかとわびにけるものはあまつそらいや高く尾花小はぎにたくつゆの清らかなる秋のながめをめでんためならずたゞまなびの屋なる定めのわざををへんとまちに待ちつれそこそうべけふは校長の君をはじめ奉り師の君たちの臨ませられてあかしの文をたまはりぬれのれらのうれしさたとへんものもなかるべしこはひたすら師の君たちのくめどもつきぬ泉の如き御敎とあたゝかき春かぜにも似たるなさけの賜にすぎずかしこされどものれらかゝるをしへの君たちをはなれ假にかせふきすさび浪さへあらぶる世の青海原にいづべきのみかは長の年月姉君とたのみ妹どもとめでける友がきにわかれやがてくまなき月になきわたるかりの列をあはれむ身とならむもげにけふとぞおもふからはたゞならぬ思ひころすれいざたのれらいまより數ならぬ身ながらもいろしみはげみて師の君たちのねもごろなるみをしへをふみ行ふは更なり敎の　大みことをまもり幼兒らををしへ導かんにはかしこくもめぐみしられぬ　れはみこゝろをうやまひ奉りなさけあつき師の君達の御こゝろにも答まつるにすがともなりなむあなかしこ

東京府高等女學校
補習科卒業生惣代　澁生さと子

補習科なる姉君たちの卒業をことほぎて

はや今年も秋は半ばをすぎて初かりの聲雲ゐにたかきながら月の末つかたとはなりぬ實に月日のたつそ早

きものなるされとかゝる月日につれてすゝみ行人の業こそ目出たけれ常〳〵わかまなびの燈としてしたひまつる姉君たちには過ぎにし春三とせの業を卒へきせけるもなは尊き師の君たちのみちしるべにて奥たにしらぬ文のはやしに分け入らせたまひてついに得がたき桂か枝をも手折らせられてけふなんこゝに其しるしを得させらるゝあはれ目出たきこと何かこれに過ぎんかくなんひさしき間女の道を學ひ徳をみかき給ふからはもし世に出で行ひて教の道に身をよせられんには必すいみじうらうるはしきはまれを擧げさせ給ふらんかしあるはちかくたらちねの父君母刀自につかへまつらんには必すそが御心を安じ給ふらんかしかくありてこそ學のひかりいやめでたけれされも數ならぬ我ら嗚呼のわざなれといかでかことはかざるを得ん猶此後とてもかはらぬみこゝろもてあはれみ導き行ひてよいさゝかことはぎ奉らんとて花も實もなきみ山木の葉もかりことをかへり見ずかくはものしつるになんかしこ

明治廿八年九月卅日

東京府高等女學校生徒總代

辻　たけ

卒業生

蒲生さと　荒島すゑ　不破ちさ
片山ちとせ　梅澤はるね　楢原よし
小川すゑ　井上のぶ　森さく
久保しげ　佐藤ふさ　島てつ
小宮とめ　丸山もと　佐々木くに
田邊すみ　内藤ちよ　小杉しづ
渡邊をとめ　秋葉せい　布施とく
中川さち

●ふみの山口　とは、この頃、坂正臣ぬしのものせられたるを、大倉書店にて出版したるなり。この書の体裁はいふもさらなり、その詞づかひのなだらかに、俗ならずして、しかも、高尚に流れざるは、まことに、婦女子が四季のをり〳〵につけ日用の消息、習字のしをりには、いとよく適ひて、たよりよきふみなり。今は一の巻のみ板に上れりしが、次の巻々のはやく出んこそ、婦女子の爲にねがはしけれ。

●實用料理法　藤陰藤本眞の君が、くさ〴〵の書をあさりて、あるは古老の説をさぐり、あるは、その道の者の樣を見つゝ、あらゆる新古都鄙の調理は、恐くこの冊子に網羅されぬ。まいて、庖丁家師範石井氏の校閲を經たるもの、決して疎鹵佚散ならざるは、記者の保する所。もし令孃夫人達にして、この書を購ひ、坐右の伴侶となし給はゞ、家政の道に益する少からざるべく、一室の裡に、居ながら山海の珍味は言ふまでも无く、八百膳、松源等の獻立に接するを得べく、あらゆる料理法をかゝげられたり。これ亦日用百科全書第

三編としては、恥かしからぬものなり、（發行所例の博文館定價二十錢）

●家政案内　これ前書に續き、第四編として博文館より出づ、編者は、同館編輯局中の博識家、岸上質軒子の筆に成る。家政のつとめは、細大を論ぜず、輕重を問はず、苟も良妻賢母の盡すべき道は、詳に編輯されたり。殊に衣食住に關する緻密適切なる意見を加へ、保育、僕婢、經濟、貯蓄、藝術保險の記事の如き、皆良家庭の好墨繩たるに餘りあり。その家計簿記に至りては、最も斬新にして簡易適切なり。其の他上欄遊江君の飜譯にかゝる、西洋傭人管理法あり。いづれも家政の案内となすに、適合せりと雖も、唯憾む、我が皇國淑女の、家庭に於ける固有の美德を示して、これが模範たらしめず。徒らに泰西の風に倣ふの、傾向あるを、假令斯道に關する古文數篇を載せしといへども。兎に角に、家政上の著述としては、從前の諸書よら、まさしく進歩せるもの。言を聴いて、實を行ふもの、即ち實踐躬行を期するものは、宜しく、一本を購ひて、自己が行爲の規矩とすべきなり。

●新撰日本小歴史　神代國土の開始に稿を起し、清國媾和、皇軍凱旋して論功行賞に終る。二百の冊子にして、我が二千五百五十餘年間の歴史を敍述せんとす、抑も難ひ哉。されど、よく編年體にものされつ、歴代の重大事件をもらされず、文も自ら瑰麗、敍記も自ら簡易、中等教育の日本歴史に適すべく、著者は、増田于信の君、閲者は、栗田寛翁なり。以てこの書の眞價如何をトするに足らむ。その定價は、十五錢、廉價なる哉、再版も尤もなり。例の博文館發行、成程、出版業の親玉？（以上三件劍夢妄評）

●誤り易き字音　日本新聞に澱橋醉漁といふ人あり、誤り易き字音なりとて、

。剛愎（かうひつ）　下の愎は弼なり復（ふく）と誤る。

。鬩墻（げきしよう）　上の鬩は磬激の切なり睨（げい）と誤る。

。辴然（しんぜい）　上の音は瞋なり輾（てん）と誤る。

。巾櫛（きんせき）　下の音責なり節（せつ）と誤る。

。。踣仆（ふくふ）　上の音匐なり復（ふく）と誤る。

。覬覦（きき）　音は寄希なり覬覦（きゆ）と誤る。

。慫慂（そういよう）　音總勇なり上字從（じう）と誤る。

。瞠乎（さうこ）　上の音は鐺なり償（たう）と誤る。

◦老媼(らうあう) 下の音は襖なり媼(うん)と誤る。
◦雨雹(うはく) 下の音は薄なり砲(はう)と誤る。
◦譌傳(くわでん) 譌は訛に同し僞(ぎ)と誤る。
◦提撕(ていせい) 下の音は西より斯(し)と誤る。
◦泛賀(はうか) 上の音は捧なり汎(はん)と誤る。
◦龍準(りやうせつ) 下の音は拙なり准(じゆん)と誤る。
◦睚眦(がいさい) 音は愛蔡なり涯茲(かいし)と誤る。
◦斗杓(とうへう) 下の音は標なり勺(しやく)と誤る。
◦內帑(だいたう) 下の音は儻なり弩(ど)と誤る。
◦一抔(いつほう) 下の音は掊なり杯(はい)と誤る。
◦汚衊(をまつ) 下の音は抹なり蔑(べつ)と誤る。
◦副(ふ)ろへると讀むときは、音ふなり、されど輸入をゆにうと讀み習はせる如く、方今廣く誤傳せし故、正音にては却て人耳に入り難し。

●金圓下賜　福島縣に於て、九月九日、左の者に金圓を下賜せり。

福島縣行方郡金房村大字大富
渡邊辨司妻　富澤とめ

資性温順孝貞友愛克く婦道を守り舅郷に病歿し尋て姑並に夫妹亦病に罹り業に任へざるを以て一身耕耘に從事し且能く一家を扶持し侍養看護夙夜惰らず十有餘年一日の如く曾て家產の傾くを慨し刻苦力を農桑に致し產を復し家計の基礎を立て其他夫弟の子女を憫み愛育し一家の和睦を圖る等洵に奇特とす仍て其賞として金四圓下賜す

●わが國の辭書　とは、小中村博士が大日本教育會雜誌にのせられたるものなるが、すこしく高尙にすぐるかとは思はるれど、こゝに拔きいでてひめたちがものまなびのたよりとせん。

わが國の辭書

文學博士　小中村清矩

我が國を言靈のさきはふ國、又言靈の助くる國と、古へより云へど、昔は取りわけて此道を學習する事無けれど、まして其書もあるべき理なし、たゞ學問といへど、專ら漢學なりければ、漢字を彙集し、其字義を我が邦語にて訓注したる、字書めきたるものは、古來彼れ此れとみゆめり、されど今にしては、これ等の古書によりて、古への言詞を探り窺ふべき便を得たれど、其大かたを逃ふべし、先づ字書ならずとも、古く書籍に記したる漢語の上にて、訓注を下したるものは、日本紀に、日本此云耶麻騰、御統此

云二美須麻屡一と記したる類は、作者の自注にして、漢文ながら必ず邦語に訓むべき所々を導せるものとみゆ、○又古く博士の日本紀の進講に便せる私記あり、今應永古寫の殘欠本三卷を傳へたるは、(神代上下と神武天皇より應神天皇まで)和名抄序に、田氏私記一部三卷、古語多載、和名希存といふ者にして、承平六年十二月に、矢田部ノ宿禰公望が進講せる私記なりといふ説あれど、養老五年より此かた、數度博士の進講せる物に據て、撰述したりと覺ゆ、其書は皆漢語の訓注にして、漂蕩、太々與倍利、立二於天浮橋之上一、安末乃宇岐波志乃宇倍爾太知萬志天、とある類なり、今の普通刊行本の訓も、全くこれ等の書の訓注によりて、成るべく邦語に讀ましめんと、時の學者の加へたるものなるべし、○又天平の頃に著せるものと覺しき、八十卷華嚴經音義の書體も、鈴鐸、奴利天、良久、夜々比左爾安利天、かくの如きさまなるは、前に云ふ私紀に似たり。

此書二卷、作者詳ならざれども、書體と紙質とに據れは、奈良の朝の時の物ならんと、塙忠寶、黒川春村の兩氏は鑒定せり、原本は文久の頃の所藏にして、即同人の著はせる、古經題跋の中に、此書の事を、卷尾有二僧定昭之本五字一、定昭南都一乘院開祖也、其傳備見二高僧傳一、此音義與二惠苑本一有二異同一、往々附二和訓一、頗古言也、音法古拔、與レ常絶異、余常觀二石山寺藏玉篇一、筆法相類、と評せり、此書傳本世に有るまじく思へたこゝに詳にす。

○又弘仁中、奈良の藥師寺の僧景戒の著はせる、日本靈異記にも、一章の尾毎に字訓を掲げたり、此れは群書類從にも收めて、よく人の知れる書體を擧げす、此れ等は皆其書を讀むべき爲に著したるものなれど、今に至りては、言語學研究の資ともなりぬべし。

わが國にて正しき字書の始ともいはんは、昌泰年中僧昌住の著はしたる○新撰字鏡にして、書を分ちて字を集めたり、撰者の自序を按するに、新撰とは、從來字書ありて更に新撰したるものにはあらずして、我が國に於て始て新撰せる字書なりとの義なるべし、又序中に、亦於二字之中一、或有二東倭音訓一、是諸書私記之字也、或有二西漢音訓一、是數疏字書之文也、こゝあるをみても、此書に記したる和訓は、前に云へる私

記の類に據れるを知るへし、其書體は、字毎に四聲反切と訓とを記して、溪芥奚反、潤也、豁也、太爾、また憚丁且反、去、驚也、畏也、忌也、難也、僞也、彼々加留、とある類なり、末に恢々、丁々、などの重點の部、悄然、平素の類、連字の部をも記したるは古風なり、此書舊印本及群書類從に收めたる貳卷本は、後の人の訓ある字のみを抄錄したるものにて、十二卷の全本は、天治本と稱して、今稀に傳ふる寫本なり。

此原本は、もと攝津なる岸忠兵衛といふ人の藏本なりしが、京師なる鈴鹿連胤氏の影寫して秘藏したるを、嘉永中江戸の黒川春村、木村正辭の兩氏懇請して轉寫したるのみなれど、いまだ廣く傳播に至らず。

次は〇類聚名義抄にて、今傳ふる寫本十一卷あり、仙覺の萬葉集注にはかく記したるを、或は三寶名義類聚抄、（蓮成院本）三寶名義抄、（塵袋）三寶字類抄、（壒嚢抄）三寶字類集（高山寺藏書目錄）ともいへり、これは此書を佛法僧の三帙に分ちたる故しかいへるなり、菅原是善卿作と云ひ傳へたれど確ならず、然れども假字遣ひいまだ亂れず、（中に違ひたる處もあるは誤寫なるべし）又古體の片假字を用ひたるを思へど、延喜以前のものなるべし、此書も畵を分ち字訓を片假字にて記したるが、例は、仁、音人、キミ、ナムチ、ヒト、ウツクシブ、メグム、ムツマシ、ヨシ、ヨリコフ、ユルス、シノブ、タツトシ、驕、アナツル、オロス、オゴル、ホコル、アザムク、斧、音府、ヲノ一云ヨキの類にて、又長成ヒト、ナル、眞成マコト、八道行成ヤサスカリなど、連綿の字を擧たる所もあり、字數多く訓注も悉しき方にて、後世の字書に片假字を以て字訓を注したる祖書といふへし、此書は文化七年伴信友翁の京師なる、教王護國寺中の子院にて、建長の古本を寫し得られたるが始にて、今は博寫本多し、翁また西念寺本、（殘欠一卷）蓮成寺本、（殘欠三卷）を得て對校し、原本に序と附言とを添て、此書の考を識せられたり、おのれ思ふに、當時片假字平假字やゝ行はれて、諸人の言詞を書き寫すに便を得たるにより、かゝる著書も顯はれたるものなるべし、されど他にも此類の書ありて、學者僧侶の間に行はれけんを、今は亡びたるものなるべし、（未完）

教の庭

十月五日　兼題　鹿聲幽　（天地人のほかは原稿到着順なり）

天

いる月をなほ山ふかくしたふらん
　ほのかになりぬさをしかの聲
大阪市北區相生町百六十二番邸　梶井久子

地

ほのかにも鹿の聲のなり行くは
　尾のへをこえて妻やとふらむ
埼玉縣下浦和町　大橋貞子

人

山ふかく妻やとふらんさよふけて
　かすかになりぬさを鹿のこゑ
筑前國穂波郡飯塚町　林久子

月もやゝかたぶく夜半にきく鹿の
　聲あはれにもきこえけるかな
内田はる子

おもふどち月見てかへる秋の夜に
　あはれ身にしむさをしかの聲
内田たけ子

夕月のかげかたふきしやまのはに
　つまこふ鹿のこゑぞさびしき
佐治房子

たくひくろみねの嵐はすみながら
　さだかにわかぬさをしかの聲
藤村陸子

ふきよする嵐にみねのきりはれて
　をの上はるかに鹿ぞなくなる
竹村篁子

小夜ふけてきくぞ淋しきやま風の
　さそはにおくるさをしかの聲
吉市錦子

紅葉ちるみ山のおくになくしかの
　こゑをしきけば秋はかなしさ
加藤郁子

うき秋を思ひわひてや夜もすから
　みやまのおくに鹿のなくらん
河村土子

ねるめして聞も淋しき夜あらしに
　なり〱まじるさをしかの聲
松井千代子

秋はぎの花ちりはてしこのころは
　鹿のこゑさへとほくなりぬる
植木綱子

さをしかの妻こふ聲のかすかにも
　あらしにたぐふやまもとの里
土肥仙子

ながき夜を明しかねてやなく鹿の
　かれ〱になく聲ぞきこゆる
竹村夢子

吹おくる風にたぐひてさをしかの
　聲もかすかにきこゆるかな
池谷蘭子

山さとはとふ人まれにしかの音も
　いとかすかなりあきの夕ぐれ
伊賀直子

かすかにも笛にまがひてきこゆ也
　遠やまさとのさをしかのこゑ
杉浦糸子

夜をさむみ尾上のかれに夢さめて
増井くら子

かすかに鹿のこゑをきくかな

吹おくる風にたくひてきこゆなり　山本いさ子
いつくのやまそさを鹿のこゑ

つまこひもさたかなるより憐なり　吾妻ちか子
よつにやふのぶ男鹿なるらん

吹きおろす山の嵐しさもろさもに　細脇ます子
きこゆくるなり鹿のこゑ〳〵

妻こふるなしから聲のかすかにも　大谷津挙子
よな〳〵きこゆ山かけのいほ

さらぬたに哀れ身にしむ秋の夜に　中川いさ子
尾のへのをちのさを鹿のこゑ

あけわたるみれの嵐にわたるらん　眞鍋直子
ほのかになりぬ棹しかのこゑ

なか〳〵に耳かたふけてきく程に　田津木久子
あはれさまさるさをしかの聲

あけちかくを鹿の聲のかすかなり　松本米子
山のあなたのつまやさふらむ

棹鹿のこゑはいつくさわかれさも　松本みち子
月も入るさのやまになくらむ

里遠きほそたにかはのみつうへに　大津千枝子
妻こふ志かのこゑきこゆなり

山里これさめわひしや夜あらしに　松原ゆき子
遠きをしかのこゑも添はりて

かすかにも鹿のなくれの聞ゆなり　大津絲子
夜半のあらしや送てきつらむ

鹿の音のいつくさもなく聞ゆなり　岡崎たか子
遠のたかねにつまやこふらむ

山のかひ影いさくらきゆふつきに　服部たつ子
聲かすかなるさをしかのこゑ

おく山は夜はのあらしの吹あれて　岡崎房尾子
聞くたにさほきさをしかの聲

吹きわたる夜半の嵐にさそはれて　近山まつ子
つまこふ鹿のこゑかすかなり

月にたにねられぬ夜半を淋しくも　杠秀子
あはれさそへて鹿のなくなり

おく山の萩やたつれていりにけむ　松田靜枝
をしかの聲のさをさかにゆく

さを鹿の聲たね〳〵にきこゆなり　名取正代
深山のおくにつまやさふらん

小夜ふけて尾上はるかに聞ゆるは　坂本乙子
妻こふしかの聲にやあるらん

奥山はまたもみちばのこるらん　遠藤皆子
かすかに鹿のこゑそきこゆる

秋の夜はまたよひなれささ遠く　遠山よし江
かすかに鹿のこゑそきこゆる

小夜ふけて嵐のすゑにそれそさは　廣田さめ子
きゝさためたるさをしかの聲

淋しさの愈増すものはたゆ〳〵に　市川桃子
なくに男鹿のつまこひのこゑ

峯高くかたふくつきになくしかの　曲澤秋香

遠さかり行くこゑのかなしさ

月清きたかのの奥のまつかせに
なり〱たくふさをしかの聲　青羽茂枝

谷ひとつ隔たるみねのさをしかの
こゑ絶え〱にひゞく夜半哉　松尾他子

あきの夜に哀をそへてなくしかの
こゑもかすかにきこえぬる哉　高井孟子

ほのかにもを鹿の聲のきこゆなり
谷の戸ふかくつまやこふらむ　吉田芳子

さらぬたに夜毎に秋はかなしきを
こゝろも細くしかの音そする　小幡さみよ

小男しかの聲のかすかに聞ゆるは
しのふの山の奥くになくらん　山田ゑい子

さもすれは絶間勝にておほつかな
あらしの奥のさをしかのこゑ　川田こう子

思ひやるはても那須野のはき原に
聲もかすかにさをしかのなく　桂さき子

しきたへの枕のやまの夢さめて
かすかにしかの聲きこゆなり　及川榮子

秋の日のしくれ降りたす夕まくれ
聲もかすかにしかそなくなる　天野土記子

夕しくれ草のいほりに音さつれて
かすかにしかの聲そきこゆる　佐藤冬子

秋ふかくきり立ちこめし谷の月を
かすかにもなくさ男しかの聲　島村正美

秋の夜のかぜ吹く夜半に夢さめて
ほのかに鹿のこゑそきこゆる　福地くめ子

小雨ふる片やまさとの小夜なかに
あはれふかくも鹿そなくなる　上里たき子

ありあけの月かけしらむ山の端に
ほのかに聞ゆ小男しかのこゑ　勝家かなる

秋のよに身にしむはかり悲しきは
かすかにきこゆさをしかの聲　大海原芳子

有明のつきかけさむくあきふけて
妻さふしかのこゑかすかなり　香川ひみ子

ほのかにそこゑきこゆなる此峯の
あなたにしかの妻やこふらん　八十島きさ

松風さともにかすかになりにけり
みねをへたつるさをしかの聲　久松得子

夜あらしのまくらさひしき山里は
鹿のなくねもかすかなりけり　安井章子

十月五日兼題　菊を贈られたるかへし

天　大坂市北區相生町百六十二番邸　梶井久子

過ぎし春の日の御てずさびに花ころちらめと植ゑれかせたまひし御まがきのわたり此の頃の露にはさころとれしはかりたてまつりていとところなつかしかりしか今かくゐならは色に御言の葉の香をさへそへさせたまへるなんいとうれしきさるは「かゝる盛も」とのたまはせ

る志ら菊も「いはぬ色なる」と告げさせたまふろか菊も共に生ひたちすくよかに花もいとけだかくて此の月でろ何くれとかしづかせたまひ志御心いれの深さもこよなくにはひいでたれはなんさてころ千年の秋もうしろやすけれと老いたるにもかささせおのれも手折らんとするにせはき袂にあまるはかりこぼれかゝるかをりのいはんかたなくゆかしうていとど下露の雫もむすぼまほしけれはのたまはせし九日にはよろづをさしおきてもとくまうのぼりてこのかしこまりをもきこえあぐべくなん

地　　　播摩龍野　眞鍋直子

今年はわけて御ろのふの菊におこゝろを盡させ給ふと承りたれど此頃はいかにうるはしく咲匂ひぬらんといとゆかしう思ひ給へらるゝ折しもゆくりなくをしけもなうあまたおらせ給ひて惠ませ給へる御なさけは聞えさせん方なくなんけにみ心盡しの程あらはれ侍りて色さへ香さへならしならぬにれいのめでたき御言の葉の給をさへそへて給はせたるは花の色も一しほはえまさりていとも〳〵うれしうなん此御かへしもと思ひ侍れとなま中に片なりなる事いひ出て光を消し侍らんよりはと、わさとさしひかへ侍りてなん、おなかしこ

人　　　下野國足利町　川田こう子

里はあれて人はふりにし宿ならねとも元よりおこたりかちにて庭もまかきも蓬か心のまゝなれはとふ人もなく いとわひしきをりしも菊の花の七重やへさきみちたるをおくり給はりしかはうれしさのあまりやかて瓶にさしはへりぬおもへは月ころ朝夕の御心つくしのほともふかきいろ香にしあらはれてまたなくめ見つらしうなむされはむくいまゐらせんおもかなとおもひめくらしはへれと玉のみきりのあたりまはゆきにはなか〳〵なることゝこゝろおくれはへりてなむ

むくゆへき物しなけれは志らきくの
　千年を君にろへむとろ思ふ

中川いさ

千草にすだく虫のこゑ荻の葉そよぐ風の音ならでは道ふみわけてとふ人もなきこのごろはいさゝさびしうおもはるゝにせめて父かこゝろやりにもさてとりあつめたる秋の七草もこのほどの野分にはさながらにふき志をられむぐらのやどいやが上にあれまさりてあさま志うかつは父の心もおもひやられいとほしうおぼえられつる折柄色香たゞならぬ菊花あまためぐませ給ひつるいとも〳〵うれしうなんさしもすさま志かりつる庭のおもゝ時のまにうつかはりたるこゝち志侍りて　さき

そめしやとしかはれば」とてなどひとりごちつゝ水などそゝぎ侍るに花の上の露に月かげきらめきてにほひあふさままたたぐふべくもあらねば「露ながらをりてかざゝん菊の」などうち誦しつゝ父も母もめでくつがへりぬ侍りこのよろこびはみづからまゐりとふらひてとはおもひ侍れとねとりかたきことの侍ればかくなんあなかしこ

松田いし子

名さへゆかしき菊の花籠御贈り被下し有がたさよかの野邊にありて氣まゝに育ちしとは事かはり花は大形に幹は痩せて天晴瓶裏には好ましき姿にてまづ走りがきのまゝに御座まうし上候かしこ

松田靜枝

九重の大内所はけふしも重陽の御宴ありと承り候ものを賤が籬は秋をかざる花の一枝だになく心淋しき折節御使もておくられし菊の花籠よ時にとりていと忝く存候春の雨に鍬をいれ秋の霜に鎌をあて手を砕き玉ひし丹精は今ぞ彰はれ侍るけにやその黄なるは玉川の霧よりも黄に白きは吉野の雪よりも白く得ならぬ匂ひは櫻にも山吹にも勝りてゆかしうなつかしう存しまゐらせ候いざ今夜は彭祖がいにしへのためしにならひこの花の下露を盃に八百歳の齢をたもひはやと嬉しさの餘りとりあへず御返しまてかしこ

確敬和可子

いまはしも御使のたつきへたまへしいとめづらしき白菊に御歌さへそへさせおこせし花の色のたぐひなく花の香のなつかしくこまやかにかなれるなど御手つからひろき圃生におほしたてゝしほとちしろくていふはかりなしや殊にものせられし御歌のうるはしさは水くきもしたゝるゝ如く實に菊水のにほひ家の内にみち渡りてなんとなく昔なつかしくおほゆれはすくに瓶にさし一族ところりて打ながめ侍りぬまつは取りあへず菊の花めぐみたまひし深き御心の御かへしまで余は對面の節細々と御禮まをしあけ奉るべくなんかしこ

名取正代子

さらぬだに人目も草もかれわたりたるにきのふもけふもとふりしきる時雨のあめのいぶせくていとつれ〴〵なる折しも給はせたる御園の菊よ露ながら手折らせ給へりしとか實に〱あつき御こゝろの程身にあまりてうれしうなん直ちに花瓶にさしはさみ侍りしにまことや御心こめさせてつくらせ給ひしは此花にあらはれ侍りいと〱うるはしうてめでたきかをりはいぶせき伏屋にみち侍りぬあはれかゝるめでたき花をひとりながめんもいとをしう侍れは例の抹茶之事おもひいで侍りて心あへるとち二たり三たりまねき侍りぬされは君ものそませ給ひてまとゐに光りをそへさせ給はん事せちにねぎまつるになんあなかしこ

山田蕣美子

秋の野に色香きそひし女郎花藤袴なと名殘忍ばん姿さへなくなりぬるに引かへてまがきの白菊に朝霜のむすほゝれたるさまこそいはんかたなく一きはまさりてなか〱見所侍るなれけふは重陽の節なふは采の事とも思ひつゝけやんごとなきかた〴〵は九重の禁中にめぐる菊の宴を催され盡せぬ御代を祝ふなるへし妾が如き賤女なとをこがましくは侍れとも如何て萬世の霜にも枯れぬ高き操をはやしつゝ君は八千代を言壽き奉らさらんやはなとゝひとりごちつる折柄ふりはへ一本を惠み給へるはいともしゝ深き御志になむあはれ此の菊おのが操を高かゝらしめなはいかに盃あることとならめとうれしさのあまりはしりがきをもかへりみすかくかへり事まをすになむ

田中りん子

秋の花とて人の愛ではやすは菊かはじめたりしとなん中にも白菊は清ら

かにけたかし今日しもいさうつくしうふさ〳〵と匂ひかんはしく枝折り面白き白菊を送り給ひしは こよなき喜ひにはんへり手に取りて見れはうつくしき筆にて和歌のたにさく添給ひしは一しほ奥深くゆかしかりき古言にも 仙人の齢をのふる菊の盃とやいひてめてたきことにもてはやしぬるかしこくもことしの 霜月みつかの天長節は殊に清國をたひらけ御威稜もかゝやき千代萬世の大御國の御いはひの御宴も ひらかせ給ひしならんとあふきたてまつるも いともめてたしされはこれにまさりたる花はなしとこそ

吉田芳子

かれて御親父さま菊花培養につきこゝらの 年丹誠を盡されし事とていとめつらかなる變種を得させつるよし承りおき侍りぬ されとそは殊に御秘蔵なれは誰もえ能はさりしを御叔母様の御とりなしにより 姿に一株めくまれし事の嬉しさよ さるに此花のごと露にうつろはて其匂のます〳〵かむはしく霜にきほひて 其操のいよ〳〵正しかれとの御心盡しにや侍らん 朝夕心に銘して忘れましくこそあはれこの花の露をくまは千年もさかぬ袖ふれば老も若きにかへるとかけにさる心地せられて嬉しき心の駒のつなきとめあへねは 一言御禮まてかくなむあなかしこ

勝家かなる

晴るゝめと見ればふりたきり 盛るかと見れば晴れ渡りて實に定めなき此頃の時雨の空のさう〳〵しき折から いともありかたく嬉しき御消息をに侍るものかな 人傳の仰言にもあらて緑の薄葉に白菊の花を包ませかうふりはへて惠み給へる御心つくしの程 千代のかたみと一しほなつかしうかをり渡るに その色の千年ふる鶴の毛衣はようへて老せぬ秋を契り給へる御言葉ふめてたしともめてたく 花はとりもをかす瓶にさしはさみて いふせき住居の光をうへ御言葉は手にもはなたすくりかへし

〳〵てめてくつかへり侍るになむかしこ

太田貞子

承りいぬいみしう花の道をめてさせたまふとよ けふ御ふみにそへてしたまはらせたる菊のうるはしと見奉るからに先つ 千歳の齢をおもほへ老せぬ秋の 幾久しきもおもひしられてなむまことにあしたゆふへの御心盡しのほとや如何なりけむとあかぬまゝにをかめに物し侍れば 又一しほの色香になむ

七艸もやう〳〵霜かれて 紅葉もまたしければ庭のなかめもつき文つくゑによりて古きふみなと繙くに秋のならひいつかあはれを催し心うちしつみ行折しも給はりたる千代菊の花はいとうれしうなんすなはちに花かめにさして學ひの友とめて 侍るに匂ひの香はしき姿のけたかき唐人か世の業をすてゝこめてにし 古事なと思ひ出て胸もすか〳〵しうなり心の駒も勇み立ちぬされはこの 花のかたちうるはしきのみか心も萬つの花に秀いて操正しく霜におこりて咲出つるか如く人として世の中かつらき 事はかなきことも たゆしのひて こそ終には香かんはしき香もこめめてたき花も 保たるゝをと心とみに うきたちて今さら哀れにうちしすみたる學のひまのいと惜しう思ふにつけ君か御惠みの貴きことにてもむくひんと 思ひ出のまゝを斯くはきこゑかくるになんかしこ

千代かけし惠みの花路高ければ
心の駒もいさみ立ちつ

香川頴子

人めも草もかれむとする柴の 庭をおとつれ給ふ御玉章の御使をはとも〳〵うれしかりけるさるはさふの 山ふみの御つとさてめくませ給へる

菊の花よふかきいは繩なかき分け給ひけん君か御心つくしのたまものなれはや色も香もことにたくひなくなんけに菊はこちたく手入れしたらんよりおのつからなる樣に生ひ出たるそあはれになつかしう侍るな此花のかく人志れぬ深山の奥に咲出てたるはから德高く才ありなから世に志らす一生を侘れたる翁のもとにおくる人にも似てかきりなく貴きをふかきみ惠にかう我宿に移しうるは古への賢き君か忠臣を野にもさめ給ひけんよろこひにもましていとうれしうたりあなかしこ

兼題

十月二十日
- 歌……神嘗祭
- 文……女の心得

十一月五日
- 歌……殘菊
- 文……霧中時雨

●諸嬢に告けまゐらす五則

一　原稿はなるべく書体を正しく讀みやすきやう歌文別別に半紙に志たゝめらるべきこと

一　原稿には毎紙嬢達の國郡番地姓名等必ず漏れなくかきしるさるゝこと

一　兼題は必ず定めの發行日より十日前に編輯部へ到着の樣心得られたきこと

一　總て投稿は十行二十字詰に半紙へ認められたきこと

一　書体の亂れたるもの國郡番地の不明又は郵便はがき等へ認めたるもの及び前四則に違へるものは歌文のよしあしを問はず一切沒書のこと

業者は工業により、各其の從事する所を以て功名を成すべきなり。然らざれば、如何に勤勉し、如何に忍耐するも、功を成すこと難し。假令ば、工業者にして學術を以てせんとし、學者にして農事を以てせんとするが如きは、木によりて魚を求め、川に臨みて材を得んとするに異ならず、豈其の成功を望むべけむや。而して、一事一業を成すに當りては、決して其の成功を急ぐべからず。成功を急ぐ時は、必中途にして挫折するものなり。學問せんとするものゝ、故郷を出づる時は、學若成らずば死すとも歸らじと思ひ立ち、始の間は、晝夜勉强して怠らざるも、二年立ち、三年經るに從ひて、漸く怠慢の念を生じ、後には之を廢するに至るもの世に多し。是其の成功を急ぐ結果なり。すべて過度の勉强をする時は、過度の怠慢を來すものなれば、徐々に之を行ひ、怠る間なく之を勉め、年月を積む時は、遂には成就して、功名を得るに至る。功名をなすは、實に勉强と忍耐とにあるを知るべし。

少將源定信

子を思ふ心の道の心もて親に仕へよ世の中の人

一首の意は、父母の恩の、山よりも高く海よりも深しと云ふことは、實に子を持ちて、始めて知るものなり。其は世の中に、子を思ふ心に勝りて、思ふものはなけれど其の思を以て、己が父母に仕へしならど、是より孝行なることはなきなり。故に、世の中の人は、皆我が子を思ふ心の道の深きが如き心を以て、其の父母に仕へ奉るべしとなり。

上の歌にも、白金も黄金も玉もと云へる如く、子ほどかはゆきものはあるべからず。其の已の子を愛する如くに、父母は、我を愛し給ふなり。然れど其の父母の恩を報ゆるには、己の子を愛するだけの心を以てせざれど、之を報い盡くすこと能はざるべし。此は誰も知り易き明白なる道理なれども、大方の世の人の有様を見るに、子ほどは親を思はざるもの、多きが如し。若、子を思ふほど親を思ひたらむには、實に孝行の極と云ふべきなり。世の人、假令實際にそれほどまでは盡くし得ざるも、之を目的標準として、父母に仕へ奉りなど、不孝に立ち至る様な事は、決してあるまじきなり。

越前

思へたゞ心なぎさのをしだにもよるの妻にはながれあふかは

心なぎさとは、人の心の如く、心のなき、其のなぎさに居る鴛鴦と云ふことなり。なぎさになきと云ふことを云ひかけたるなり。○一首の心は、人たるものは、唯、ひたすらに、能く〳〵考ふべきなり。彼の人の如く、智識の心のなき渚に居る鴛鴦ですらも、夫婦相伴ひて、常に別るゝことなく、餘所の妻には、流れ逢ふことはなし況んや人間に於てをやと云ふことなり。

夫婦は、偕老同穴と云ひて、共に老い、共に死し、同じ穴に葬らるべきものなり。故に、互に親み睦じくして、一度夫婦になりたる時は、再び別れて、男は他の妻を呼び、女は他の夫に嫁するなどの樣なる事は、決してあるまじきなり。彼の渚に居る鴛鴦は、鳥類にて、人間より、數等劣りたる動物なれども、夫婦相伴ひて、決して別るゝことなく、終身其の倫道を守れり。鳥類ですら既に然り、況んや人に於いてをや。然るに、世には、婦の善からぬとて、之を離別して再び他より妻をもらふ夫あり。又は、夫あしとて、逃げ歸り、他の男に嫁する婦あり。其の他種々の故障によりて、一旦夫婦となりたるものが、再離別するが如きは、實に人

倫を破りたるものにて、鳥類にも劣れるものと云ふべきなり。苟、人たる所以の道を守らむと欲せむ、一旦夫婦となれるものは、決して離別せずと思ひ、婦は一心になりて夫に事へ、夫は精神を以て夫を愛し、偕老同穴の契を全くせざるべからず。

小野美樹

女郎花おほかる野べに宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ

一首の意は、女郎花の多く咲きにほひてある野べに、宿をかりて、一夜なりとも寢ねたらんには、あやなくも、其の女郎花に心をよせて宿りたるならんなどゝ、思もよらぬあだ〳〵しき浮き名が世に立つならん。されど、さる危き野には宿らぬがよきぞとなり。即女子の多くある處には、近づかぬがよし。若近づく事などのあらんには、心にもあらぬ浮名が世に立ちて、思はざる恥をも受くるものなれど、尤愼むべしとなり。

七歳にして男女席を同じくせずとは、古人の金言なり。遠くて近きは男女の中と、諺にも云へるが如く、實に心に思はざる過の出來易きは、男女の中なれど、尤も

謹愼すべき所なり。此の過は、過の中にても、尤恥づべく人道を破りたる過なれど、成るべく過らぬ樣にせざるべからず。若、一度、之を過らむか、名を汚し、身を傷け、世を擯斥指彈され、人に輕蔑卑下されて、再び頭角を顯すこと能はざるに至る。而して、他の過は、之を改むることを得るも、此の過に至りては、改むるに道なく、汚れたる名、傷けたる身は、元の如くになること能はずして、身を終るまで離れざるなり。凡て、人たるもの、誰か色欲なからむ。唯、之を謹むと謹しまざるとにあり。謹む時は、身を立て名をなし、謹まざる時は、身を損し名を汚す。而して、色欲は、迷ひ易く明めがたし。一度之に迷ふ時は、百年の身も惜まず、人倫の道も顧ざるに至る。夫婦の倫を破るも、大方此にあるなり。故に、人として、人の道を行ひ、名を立て功を成さむと欲するものは、男女互に席だにも、同じくせざらむ樣に注意すべし。輓近、西洋の惡風に染馴し、男女の交際を盛にせむと欲し、或は男女互にも交際するを善なりと誤想するものあり。男女は、各其の掌る處異なるものなれど、男子と男子と交際し、女子と女子と交際して、互に切瑳琢磨したらむには、其の功もあるべきなれど、男女相交りて、如何に親密

になりたりとて、何の功かあらむ。唯惡むべき醜聞を世に流すに止まらむのみ。彼の男女混淆して歌舞する踏舞會の如きは、實に斯の道を破壞する最大惡習なり、愼みて之を恐るべし。

源慶法師

形こそ深山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ

朽木とは、腐れたる木なり。○一首の意は、我が形どかりは、實に深山幽谷に隱れて、人も知らざる朽木の樣なるものなれども、心に至りては、決して形の如く腐れはてたるものに非ず、彼の美しき花の如く、成さんと思はゞ、などか成らざる事あらむとなり。

形貌容姿はおのづから生れ得たるものなれど、如何に、之を改めんと欲するも能はざるなり。然れども、心に至りては、賢より賢にも移さんと欲せど、などか移らざらむ。如何に形は美なりとも、心の愚ならんには、賞するに足らず。如何に形は醜なりとも、心の賢からんには、勝れたる人と云ふべし。世の形の美をのみ好みて、心の美醜を問はざるものは、愚なる人なり。又形の美ならむ事をのみ求

めて、心を美にせんと思はざらん人も亦愚なり。形は飾にして、心は實、形は外にして、心は內、形は末にして、心は本なるものなれど、寧ろ形の美ならむよりも、心の美ならんをこそ、美人とは云ふべけれ。形美にして心の美ならんには、之に如く美人はあらざるべけれど、形の美なるものは、大方心愚にして、形の醜なるものは、心賢し。故に、古の賢人は、好みて醜婦を娶りたるものさへあり。されど、人は男女を問はず、皆形の裝飾をのみ心とせんよりは、心の裝飾を施して、假令、形は深山がくれの朽木の如くとも、心は常に花の如く、美しくなさんことこそ望ましけれ。

寂身法師

手をらじな人の垣ねの梅の花吾にてしりぬ惜しき心は

手をらじなとは、手にて折りはすまじと云ふことなり。〇一首の意は、今日よりは、他人の垣ねなどに咲きてある梅の花などは、決して手折はすまじ。吾が垣ねに植ゑて、朝夕愛する梅の花を、人の來りて手折りしかど、大に惜しく覺えたり。此の惜しき心は、吾が身に斯樣なる事のありて、始めて人も亦吾が惜しむ如く惜

しくあることとならんと、云ふことを悟りたりとなり。
人には、恕と云ふ心なかるべからず。恕とは、想ひやると云ふ事にて、吾が身に辛き事は、人も辛かるべし。吾が身に苦しき事は、人も亦苦しかるべしと思ひて、之を人に施さぬなり。諺にも、吾が身をつみて、人の傷さを知れとある如く、何事にても、吾が身の事の思ひよろへて、他人の身の上を想ひやるべし。顔回の、人に勞を施さずと云へるも、此の意に外ならず。世の薄情苛酷にして、少しも愛情の心なき人は、此の恕の心なきなり。さる人は、人に恨まれ、世に厭はれて、遂には憂苦に逢ふべきなり。水心あれば魚心あるは、人情の常なれば、吾より恕の心を以て、人に接すれば、人も亦恕を以て、己に接すること明なり。故に、人に歡樂を與へんとすれば、人も亦已に歡樂を與へんとするにより、己も人も共に歡樂する事を得るに至る、世の中の百事皆此の心にて行はゞ、啻に其の德を積むのみならず、自然に其の身も幸福になりぬべし。

小野小町

色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける

三輪田眞佐子女史著

女子處世論

近刻

全一冊

本社は曩に女子の本分を發行し之を世に公にせり然るに世既にその有益なるを信じて之を購讀するもの實に多く第三版を發行するに至れり今や又この書を發行せんとすこの書は女史が女子處世の務を論ずること盡せりその論旨の如何は讀者乞ふ本書に就いて看られよ

發行所

東京京橋區築地二丁目二十一番地

（電話番號一九四六）

國光社

女子の本分　全

再版

近者、我邦女子道徳の頽敗に赴くこと、日また一日より甚し。三輪田女史、之に慨する處あり。本邦固有の道徳に基きて、書を著し、以て此の我が邦の婦女子に、其の本分のある處を示さんことを期せらる。本社の一たび、之を世に公にするや。忽にして、再版を賣盡し今や三版の成るを告ぐ。請ふ。續々として、御注文あらんことを。

目錄

第壹章
●總論
●風俗の變遷
●今日の情態
●本著の目的
●人の人たる所以
●女子本來の面目
●日本女子と西洋女子と
●維新前の女訓
●西洋女子の才能
●折衷

第二章
●女德
●節操
●孝行
●和合
●慈悲
●簡婉と靜止と
●恭謹と勤勞と
●自重と忍耐と
●女德の基源

第三章
●女子特別の身分
●妻道
●婚嫁の主義
●早婚の弊害
●夫婦とは如何
●從順
●補佐
●誠實
●母道
●胎教
●育兒
●教戒
●慈愛
●母の責任
●繼母の道

第四章
●女子の藝業
●女藝の本領
●例證
●松苗先生と紅蘭女史との言
●實用の藝
●裁縫
●料理
●經濟
●衛生及生理
●家内の整理
●良人と同藝
●優美の藝
●和歌
●音樂
●活花
●茶道
●書
●專門の藝
●文學
●美術
●教師
●醫業
●西洋の女業
●貴女の職分

第五章
●女子の容裝
●人類と禽獸と異なる點
●動作
●靜淑
●天眞
●恭敬
●裝飾
●實用
●禮儀
●雅致
●高尚
●風體
●結髮
●服制
●佳人の資格

第六章
●女子の人に接する道
●交際
●女子の交際
●交際の効德
●親切
●愛嬌及世辭
●自遜と他愛と
●禮節
●恒敬
●交際上の責任
●秘訣
●心得
●女禮
●進退
●事宜
●自然
●習慣
●婢僕を御する法
●寛容
●範例
●獎勵
●採用

第七章
●女子の生活及人物
●生活
●幸福
●快樂
●高尚
●質實
●安心
●脫塵
●中庸
●女子に適する學派
●人物と養生と
●天稟
●性癖
●多能
●達才
●富貴
●美貌
●好人物の本相
●上流
●中流
●下流
●應報

第八章
●結論
●公道
●女卑の原因
●反動
●御國の道
●女權に就いて
●報恩

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社
（電話一九四六）

●賣捌所

東京 東京堂
仝 東海堂
仝 文海堂
仝 北隆舘
仝 信文堂
仝 良明堂
仝 武藏屋
仝 文金堂
仝 小林新兵衛
仝 目黒支店
仝 三省堂
仝 岩見屋支店
仝 大倉書店
仝 小林尚文舘
仝 笠原岩吉
大坂 岡島書店
京都 東枝律書房
仙台 高藤書店
名古屋 川瀬書店
仝 片野書店
福岡 積善舘
熊本 長崎書店
仝 宮松幸吉
千葉 平野常吉
仝 堤安五郎
仝 高寺清兵衛
仝 根本紋二郎
仝 吉田德兵衛
仝 東定誠
仝 多田屋本店
德島 [illegible]黒崎精二

女鑑第九十四號目錄

女鑑

日本の女子たる最要素……二十二木生

論說

女子のたしなみ……坂本三七郎

試みに問はん……三輪田眞佐子

女子教育一斑（三）……鹽井ふく子

史談

小々等少女の事……永石蕭風

永井氏の女のこと……

家政

活花（第五）……田邊和氣子

たちぬひ……西山たい子

たいさころ（鮎）（續）……美食散人

鷄卵料理法

學園

わか學園（三）……鹽井正男

漫錄

父子の間　故人小山田與清●鹿兒島大島女子の風俗（畵入）三輪田眞佐子●禁裏御所女中語　赤門の雀●道灌山の虫　蓼川●お伽はなし夢のやうぐひす●笑ひぐさ　柴刈翁●流行の栞　中尾鷺夢●九十九髮　大町桂月

文林

歌文數十首

雜報

青山御所へ行啓●兩陛下の聖德●皇太子殿下の轉地御保養●山階宮の御婚禮●女子高等師範學校一覽●內藤耻叟翁の女子教育論●長野縣上田女學校紀念式

敎の庭

兼題歌　文　數十章

附錄

修身百首（つゞき）

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京**新富町**郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊（三ヶ月分）	十二冊（半年分）	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無	遞送料		

明治二十八年十月四日印刷
同　年十月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同
編輯人　山根勇藏
同